

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 3

城山遺跡第15地点

城山遺跡第16地点

2002

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 細田信良

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、人口6万6千を擁する自然と文化の調和する都市です。この地には、我々の先人たちが遺した足跡とも言うべき埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が16遺跡確認されています。

本書は、平成4年度に発掘調査が実施された城山遺跡第15・16地点の発掘調査報告書です。

主な内容についてですが、城山遺跡第15地点は、志木市立第3小学校の西校舎裏の道路工事に伴い発掘調査が実施されたもので、古墳時代後期の住居跡6軒や柏城関連の堀跡2本などが発見され、そこから、貴重な土器や陶・磁器などが検出されています。

また、城山遺跡第16地点は、共同住宅建設に伴い発掘調査が実施され、縄文時代の遺物包含層、平安時代の住居跡1軒、中・近世の溝跡2本・井戸跡2基が発見されています。特に、縄文時代の遺物包含層から、日本最古の土器群とみなされる草創期の爪形文系土器が1点検出されています。

以上のような、貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる1ページが追加されたことは大変喜ばしいことであり、同時に本書が郷土の歴史研究のために広く活用されますよう切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導ご協力いただきました文化庁、埼玉県文化財保護課、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の方々の多くの方々並びに関係者に対し、心から厚くお礼申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市柏町三丁目に所在する城山遺跡（県No.09-003）の第15・16地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により、各開発主体者から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。整理作業及び報告書刊行は、志木市教育委員会が実施した。
3. 本書の作成において、執筆は尾形則敏・佐々木保俊・深井恵子・佐々木潤が分担して行い、編集は尾形則敏・深井恵子が行った。なお、朝霞市博物館の野沢 均氏には、中・近世の遺物についてご教示を頂いた。

尾形則敏 第1章、第2・3章第1節、第2節の検出された遺物、第4章

佐々木保俊 第3章第5節

深井恵子 第2・3章第2節の検出された遺構

佐々木潤 第2章第4節

4. 旧石器・縄文時代の石器の実測及び観察表の作成は、(有)アルケアーリサーチ代表取締役藤波啓容に依頼した。
5. 遺物の実測は、鎌本あけみ・星野恵美子・松浦恵子が行い、遺構・遺物のトレースは、深井恵子が行った。写真撮影は尾形則敏が行った。
6. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

○ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。

○遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

H = 古墳時代～平安時代の住居跡 S = 集石 D = 土坑 W = 井戸跡

M = 溝跡 P = ピット

○遺物挿図版中のスクリーントーンは基本的に赤色土器の赤彩範囲を示すが、番号下に黒彩と表示があるものは、黒色土器の黒彩範囲を示す。

7. 第3章第5節の遺構外出土遺物の記述で用いた色の表示は『新版 標準土色帖 1999年版』農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所色票監修を参照した。
8. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・埼玉県立埋蔵文化財センター・朝霞市博物館・富士見市立水子貝塚資料館

会田 明・浅野晴樹・荒井幹夫・飯田充晴・井上洋一・上田 寛・江原 順・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・栗原和彦・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小林寛子・齋藤欣延・笹森健一・斯波 治・鈴木一郎・高橋 学・照林敏郎・並木 隆・根本 靖・野沢 均・早坂廣人・廣田吉三郎・藤波啓容・堀 善之・松本 完・松本富雄・三田光明・山田尚友・和田晋治

志木市遺跡調査会組織

〈役員〉

会 長	秋山 太藏 (志木市教育委員会教育長) (～平成12年 6 月)
	細田 信良 (") (平成12年 7 月～)
副 会 長	星野昭次郎 (志木市教育委員会教育総務部長) (～平成 7 年 3 月)
	川目 憲夫 (") (～平成12年 3 月)
理 事	谷合 弘行 (志木市教育委員会教育政策部長) (平成12年 4 月～)
	神山 健吉 (志木市文化財保護委員会)
	井上 國夫 (")
	宮野 和明 (") (～平成 5 年 3 月)
	尾崎 征男 (") (～平成10年 3 月)
	高橋 長 (") (～平成 8 年 3 月)
	高橋 正 (") (～平成 8 年 3 月)
	高橋 豊 (") (平成 8 年 4 月～)
	内田 正子 (") (平成10年 4 月～)
理事兼事務局長	並木 勝司 (志木市教育委員会生涯学習課長) (～平成 8 年 3 月)
	鈴木 重光 (") (～平成12年 3 月)
	土橋 春樹 (") (平成12年 4 月～)

〈監 査〉

監 事	根岸 正文 (志木市立郷土資料館長) (～平成 5 年 3 月)
	武川 洋子 (") (平成 5 年 4 月～平成 8 年 3 月)
	萩原 洋子 (") (平成 8 年 4 月～平成14年 3 月)
	根岸 清躬 (社会教育指導員) (～平成 5 年 3 月)
	野口 泰 (") (平成 5 年 4 月～平成 6 年 3 月)
	鈴木 憲三 (") (平成 5 年 4 月～平成 9 年 3 月)
	佐藤 茂 (") (平成 6 年 4 月～平成10年 3 月)
	永田 伸夫 (") (平成10年 4 月～平成14年 3 月)
	福田 鮎子 (") (平成14年 4 月～)
	金子 雅佳 (生涯学習課主幹) (平成14年 4 月～平成14年 8 月)
	荒井 正夫 (生涯学習課主査) (平成14年 8 月～)

〈事 務 局〉

担当課・係	志木市教育委員会社会教育課 (～平成 5 年 3 月)
	志木市教育委員会教育総務部生涯学習課文化財保護係 (～平成12年 3 月)
	志木市教育委員会生涯学習部生涯学習課文化財保護担当 (～平成14年 3 月)
	志木市教育委員会教育政策部生涯学習課 (平成14年 4 月～)
理事兼事務局長	並木 勝司 (生涯学習課長) (～平成 8 年 3 月)
	鈴木 重光 (") (平成 8 年 4 月～平成12年 3 月)
	土橋 春樹 (教育政策部参事兼生涯学習課長) (平成12年 4 月～)
事 務 局	山中 満 (生涯学習課補佐兼生涯学習係長) (平成 5 年 4 月～平成 6 年 3 月)
	尾崎 健市 (") (平成 7 年 4 月～平成10年 3 月)
	金子 雅佳 (生涯学習課主幹) (平成12年 4 月～平成14年 3 月、平成14年 8 月～)
	下河辺信行 (") (平成14年 4 月～ 8 月)
	岡本 孝 (生涯学習課文化財保護係長) (～平成 9 年 3 月)
	関根 正明 (生涯学習課主査) (平成 9 年 4 月～)
	佐々木保俊 (生涯学習課主査) (昭和61年 4 月～)
	清水あや子 (生涯学習課主任) (平成 8 年 4 月～平成12年 3 月)
	新井由紀子 (") (平成12年 4 月～)
	尾形 則敏 (") (昭和62年 4 月～)
	倉部 恵子 (") (平成14年 4 月～)
	今野 美香 (生涯学習課主事) (～平成 8 年 3 月)

〈城山遺跡第15地点の調査〉

調査担当者	佐々木保俊・尾形 則敏
調査補助員	深井 恵子・内野美津江
調査協力員	内野 晃一・金野 善幸・清水 芳子・白砂 正・高野 善政・手塚 全・ 富塚 聡史・深井 篤・細沼 弘和・宮川 幸佳・村井 京子・湯沢 正・ 吉谷 顕子

〈城山遺跡第16地点の調査〉

調査担当者	佐々木保俊・尾形 則敏
調査員	深井 恵子
調査補助員	内野美津江
調査協力員	伊野部三千子・清水芳子・竹内美代子・中村マキ子・成田しのぶ・東浦久美子・ 古田トシ子・宮川 幸佳・三輪 純子・村井 京子・柳沢 美子・吉谷 顕子

〈整 理 作 業〉

調査員	深井 恵子
整理協力員	遠藤 英子・奥野 恭子・鎌本あけみ・鈴木 浩子・高田美智子・星野恵美子・ 松浦 恵子・山口 優子・佐々木 潤 (東洋大学生)

目 次

はじめに

例 言

目 次

挿図目次

表 目 次

図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	7
第2章 城山遺跡第15地点の調査	14
第1節 調査の経過	14
第2節 古墳時代の遺構・遺物	16
第3節 中・近世の遺構・遺物	28
第4節 遺構外出土遺物	31
第3章 城山遺跡第16地点の調査	36
第1節 調査の経過	36
第2節 I区から検出された遺構・遺物	38
(1) 縄文時代の遺構・遺物	38
(2) 古墳・平安時代の遺構・遺物	39
第3節 II区から検出された遺構・遺物	41
(1) 古墳・平安時代の遺構・遺物	41
(2) 中・近世の遺構・遺物	42
第4節 III区から検出された遺構・遺物	47
(1) 古墳時代の遺構・遺物	47
(2) 中・近世の遺構・遺物	47
第5節 包含層出土遺物	49
(1) 縄文時代の遺物	49
(2) 弥生時代の遺物	65
(3) 古墳時代の遺物	65
第4章 まとめ	70

図 版

報告書抄録

挿図目次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20000)	2
第2図	城山遺跡の調査地点 (1/3000)	11
第3図	遺構分布図 (1/500)	15
第4図	82・83号住居跡 (1/60)	17
第5図	82・83号住居跡出土遺物 (1/4)	17
第6図	84号住居跡・遺物出土状態 (1/60・1/9)	19
第7図	84号住居跡出土遺物1 (1/4)	22
第8図	84号住居跡出土遺物2 (1/4)	23
第9図	85・86号住居跡 (1/60)	26
第10図	85号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	27
第11図	86号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)	27
第12図	12・13号溝跡 (1/60)	29
第13図	12号溝跡出土古銭 (1/1)	30
第14図	遺構外出土遺物 (1/3・1/4)	32
第15図	遺構外出土石器 (1/3)	33
第16図	遺構分布図 (1/300)	37
第17図	1号集石 (1/30)	38
第18図	I区出土の古墳・平安時代の遺物 (1/4)	40
第19図	87号住居跡・カマド (1/60・1/30)	41
第20図	14号溝跡 (1/60)	43
第21図	13・14号井戸跡 (1/60)	46
第22図	II・III区出土の古墳・平安時代の遺物 (1/4)	47
第23図	15号溝跡 (1/60)	48
第24図	14・15号溝跡出土遺物 (1/4・1/3)	49
第25図	包含層出土遺物1 (1/3)	50
第26図	包含層出土遺物2 (1/3)	54
第27図	包含層出土遺物3 (1/3)	56
第28図	包含層出土遺物4 (1/3)	60
第29図	包含層出土遺物5 (1/3)	62
第30図	包含層出土遺物6 (1/3)	64
第31図	包含層出土石器1 (2/3・1/3)	66
第32図	包含層出土石器2 (1/3)	67
第33図	包含層出土石器3 (1/3・1/6)	68
第34図	柏城落城後の屋敷割の図	72
第35図	柏城の関連遺構	73

表目次

第1表	志木市の時代別にみた考古資料一覧	4
第2表	志木市の発掘調査報告書一覧	8
第3表	城山遺跡調査一覧	12
第4表	遺構外出土の石器観察表	35
第5表	包含層出土の石器観察表	69

図版目次

- 図版1 城山遺跡第15地点
1・2. 82号住居跡遺物出土状態 3. 82号住居跡 4. 83号住居跡
5・6. 84号住居跡遺物出土状態 7. 84号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 8. 84号住居跡
- 図版2 城山遺跡第15地点
1. 85号住居跡遺物出土状態 2. 85号住居跡 3・4. 86号住居跡遺物出土状態
5・6. 12号溝跡発掘風景 7・8. 12号溝跡遺物出土状態
- 図版3 城山遺跡第15地点
1・2. 12・13号溝跡（I区） 3. 12号溝跡土層断面 4. 13号溝跡
- 図版4 城山遺跡第15地点
1. 82・83号住居跡出土遺物 2. 84号住居跡出土遺物
- 図版5 城山遺跡第15地点
1. 85号住居跡出土遺物 2. 86号住居跡出土遺物 3. 12号溝跡出土古銭
4. 12号溝跡出土遺物
- 図版6 城山遺跡第15地点
12号溝跡出土遺物
- 図版7 城山遺跡第15地点
1. 遺構外出土遺物 2. 遺構外出土石器
- 図版8 城山遺跡第16地点
1. 確認調査風景 2. 1号集石 3. I区調査風景 4. I区遺物出土状態
5. 87号住居跡 6～8. 14号溝跡
- 図版9 城山遺跡第16地点
1・2. 14号溝跡 3. 15号溝跡発掘風景 4. 15号溝跡 5. 13号井戸跡 6. 14号井戸跡
- 図版10 城山遺跡第16地点
1. I区出土の古墳・平安時代の遺物 2. 87号住居跡出土遺物 3. 14号溝跡出土遺物
4. 14・15号溝跡出土遺物
- 図版11 城山遺跡第16地点
1. 14号溝跡出土遺物 2. 15号溝跡出土遺物 3. 15号溝跡出土遺物
4. 14号井戸跡出土遺物
- 図版12 城山遺跡第16地点
1. II・III区出土の古墳・平安時代の遺物 2. 包含層出土遺物
- 図版13 城山遺跡第16地点
包含層出土遺物
- 図版14 城山遺跡第16地点
包含層出土遺物
- 図版15 城山遺跡第16地点
包含層出土遺物
- 図版16 城山遺跡第16地点
包含層出土石器

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口約6万6千の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（7）、中道遺跡（5）、新邸遺跡（8）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、氷川前遺跡（4）、市場裏遺跡（15）、市場遺跡（1）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した14遺跡に塚ノ山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた16遺跡である（第1図）。

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

志木市内に最初に人が住みついたのは、旧石器時代からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・中野遺跡がある。中道遺跡では、立川ローム層のIV層上部・VI層・VII層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパー・ナイフ形石器や安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

最近では、平成11～12年度にかけて実施された東京電力志木変電所の増設工事に伴う中野遺跡第49地点でも立川ローム層のIV層下部から、黒曜石・頁岩の石材の石核・剥片が約60点出土している。

縄文時代になると、草創期では、城山遺跡から爪形文系土器1点、田子山遺跡から有茎尖頭器1点が出土している。早期では、田子山遺跡から撚糸文・沈線文・条痕文系土器、富士前・城山遺跡から撚糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚・新邸遺跡の前期黒浜式期のものが最古に位置付けられ、それぞれ1軒検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

遺跡が最も増加するのは、中期後葉の勝坂式～加曾利E式期である。西原大塚遺跡では、多くの住居跡が環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

さらに後期では住居跡も皆無で、唯一遺構から発見される例は、田子山遺跡184号土坑である。この土坑からは、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。晩期にな



富
士
見
市



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20000)

ると、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡が希薄になる傾向にあるが、平成12年度の西原地区特定区画整理事業に伴う発掘調査により、後期の堀之内式期の住居跡1軒と遺物集中地点、晩期の溝跡1本が検出されている。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡第21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が200軒近く確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）年以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の3遺跡から相次いで確認されており、集落跡との関連の中で今後注目されるであろう。古墳時代前期では、特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。

さらに、最近では、平成11年度に西原大塚遺跡で発見された一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が特筆すべきであろう。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土しており、こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する。中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、市内最古のカマドをもつ住居跡として注目される。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で130軒を越え、次いで中野遺跡で50軒、中道遺跡で15軒を数える。また、田子山遺跡では、6世紀後半以降に比定できるものと考えられる4.1×4.7mのやや不整形円形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代の代表とする遺跡として挙げるができる。この遺跡では、住居跡の他、掘立柱建築遺構、溝跡、100基を越える土坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰釉陶器の他、腰帯の一部である銅製の丸柄、鉄製の紡錘車・刀子などが出土している。

また、平安時代の城山遺跡128号住居跡からは、印面に「富」1文字が書かれた銅製の印章が出土したことに注目される。この住居跡からはその他、緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

第1表 志木市の時代別にみた考古資料一覧

1. 旧石器時代

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	報告書一覧No.及び資料索引
7	西原大塚	区画整理	石器集中地点 4カ所	No.19
		市史掲載	ナイフ型石器、尖頭器など	1984『志木市史 原始・古代資料編』

2. 縄文時代

2	中野	第2地点	土坑 1基、土製円盤 1点、包含層出土土器片	中期	No. 2
		第16地点	集石 1基	不明	No.17
		第18地点	土坑 1基、土器	中期	No.14
		第25地点	住居跡 1軒、土坑 9基、炉穴 5基、土器、石器	早～中期	No.25
		第43地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
3	城山	A地点	住居跡 1軒	前期	『志木市史 原始・古代資料編』
		第3地点	包含層出土土器	早～後期	No. 7
		第4地点	埋甕 1基	中期	No. 8
		第9地点	土坑 1基	不明	No.11
		第11地点	住居跡 1軒、土坑 3基、炉穴 1基、土器	前・中期	No.12
		第12地点	包含層出土土器	早～晩期	No.17
		第29地点	土坑 1基	早～後期	No.18
		第32地点	包含層出土土器	早～中期	No.18
		第34地点	包含層出土土器	早～中期	No.20
		第35地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
5	中道	第2地点	住居跡 3軒、土坑 8基、集石 2基、土器、石器	中期	No. 6
		第12地点	住居跡 2軒、土器	中期	No.13
		第13地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土器	中期	No.13
		第21地点	包含層出土土器	前期	No.17
		第27地点	包含層出土土器	前～後期	No.22
		第41地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
		第44地点	包含層出土土器	早～後期	No.21
7	西原大塚	第1地点	住居跡 4軒、土坑 8基、土器、石器	中期	No. 1
		第3地点	住居跡 5軒、土坑 2基、土器	中期	No. 2
		第8地点	住居跡 1軒、土坑 22基、土器	中期	No. 9
		第10地点	土坑 4基、土器、包含層出土土器	前・中期	No. 9
		第39地点	住居跡 3軒、土器、石器	中期	No.21
		第43地点	住居跡 10軒、土坑 22基、土器、石器	中期	No.24
		第47地点	土坑 1基、遺構外出土土器片	中期	No.26
8	新邸	第1地点	住居跡 1軒(貝塚)、土坑 2基、包含層出土土器	前・中期	No. 3
		第2地点	住居跡 1軒(第1地点と同一)、土器、石器、貝類	前期	No. 4
		第3地点	包含層出土土器	早・前期	No.10
10	田子山	第4地点	土坑 1基	不明	No.13
		第10地点	住居跡 1軒、土器	中期	No.17
		第19地点	土坑 2基、遺構外出土土器片	早～後期	No.22
		第21地点	遺構外出土土器片	早～後期	No.22
		第25地点	炉穴 1基、遺構外出土土器片	早～後期	No.22
		第32地点	土坑 1基、遺構外出土土器片	早～中期	No.16
		第37地点	遺構外出土土器片	早期	No.16
		第39地点	土坑 3基、集石 2基、炉穴 2基、土器	早期	No.18
		第47地点	遺構外出土土器片	早・前期	No.20
		第49地点	遺構外出土土器片	早期	No.20
第69地点	集石 1基	中期	No.26		

3. 弥生時代

2	中野	第2地点	住居跡 2軒、土器	後期	No. 2
		第9地点	住居跡 1軒、土器	後期	No. 9
		第25地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土器	後期	No.25
3	城山	B地点	住居跡 1軒	後期	『志木市史 原始・古代資料編』
		第3地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No. 7
		第4地点	住居跡 2軒、土器	後期	No. 8
		第35地点	住居跡 1軒、土器、砥石	後期	No.20
7	西原大塚	第1地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No. 1
		第2地点	住居跡 3軒、土器	後期～古墳	『志木市史 原始・古代資料編』

7	西原大塚	第3地点	住居跡 2軒、土器	後期～古墳	No.2
		第4地点	住居跡 3軒、土器、砥石	後期～古墳	No.4
		第6地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.8
		第7地点	小竪穴状遺構 1基	後期～古墳	No.10
		第8地点	住居跡 13軒、方形周溝墓 1基、掘立柱建築 1基	後期～古墳	No.9
		第9地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.9
		第10地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.9
		第14地点	住居跡 4軒、土器	後期～古墳	No.17
		第21地点	方形周溝墓 1基、土器	後期～古墳	No.17
		第32地点	住居跡 2軒、土器	後期～古墳	No.16
		第36地点	住居跡 4軒、土器	後期～古墳	No.20
		第37地点	住居跡 7軒、土器	後期～古墳	No.21
		第39地点	住居跡 1軒、方形周溝墓 1基、土器、石器	後期～古墳	No.21
		第43地点	住居跡 9軒、土器	後期～古墳	No.24
		第45地点	住居跡 72軒、方形周溝墓 1基、土器(鳥型土器)	後期～古墳	No.23
		第47地点	溝跡 1本	後期～古墳	No.26
	区画整理	住居跡 106軒、方形周溝墓 3基(記述のみ)	後期～古墳	No.19	
10	田子山	第1地点	住居跡 1軒、土器	後期	No.9
		第4地点	住居跡 1軒、土器	後期	No.13
		第10地点	住居跡 5軒、土器	後期	No.17
		第19地点	遺構外出土遺物 土器3点	後期	No.22
		第31地点	住居跡 17軒(21号住居跡記述のみ)	後期	『田子山富士』文化財第22集
	第32地点	方形周溝墓 1基	後期～古墳	No.16	
	市場裏	第1地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.17
		第2地点	方形周溝墓 2基、土器小片	後期～古墳	No.17
		第3地点	方形周溝墓 1基、土器小片	後期～古墳	No.14

4. 古墳時代

	中野	第2地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.2
		第7地点	住居跡 1軒	後期	No.10
		第12地点	住居跡 1軒、土師器多数	後期	No.12
		第16地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.17
		第18地点	住居跡 1軒、土師器、鉄鏃多数	後期	No.14
		第25地点	住居跡 10軒、土師器多数	後期	No.25
		第31地点	住居跡 1軒、土師器、鉄鏃、砥石	後期	No.15
		第41地点	住居跡 1軒、土師器多数、紡錘車	後期	No.18
	第50地点	住居跡 1軒	後期	No.24	
3	城山	B地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	後期	『志木市史 原始・古代資料編』
		第1・2地点	住居跡 54軒、土師器多数、須恵器、鉄・土製品	前・後期	No.5
		第3地点	住居跡 4軒、土師器	前・後期	No.7
		第4地点	住居跡 1軒、土師器多数	後期	No.8
		第6地点	住居跡 2軒、土坑 1基、土師器多数	後期	No.10
		第7・9地点	住居跡 7軒、土師器多数、鉄製品	中・後期	No.11
		第11地点	住居跡 3軒、土師器	前・後期	No.12
		第13地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.17
		第20地点	住居跡 1軒	後期	No.15
		第25地点	住居跡 2軒、土師器、初期須恵器	中・後期	No.16
		第29地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	後期	No.18
第34地点	住居跡 3軒、土師器	後期	No.20		
第35地点	住居跡 1軒、土師器多数	後期	No.20		
5	中道	第2地点	住居跡 5軒、土師器	後期	No.6
		第12地点	住居跡 3軒、土師器	後期	No.13
		第13地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.13
		第21地点	住居跡 2軒、溝跡 1本、土師器、鉄製品(鏃完形1点)	後期	No.17
		第33地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	後期	No.16
		第36地点	住居跡 1軒、土師器	前期	No.18
		第37地点	住居跡 1軒、土師器多数、須恵器小片、土製品	中期	No.18
7	西原大塚	市史掲載	土師器	前期	『志木市史 原始・古代資料編』
		第11地点	方形周溝墓 1基、壺棺 1基、土師器	前期	No.11
		第43地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.24

7	西原大塚	第45地点	住居跡 2軒、土師器	後期	No.23
8	新 邸	第2地点	住居跡 1軒、土師器	前期	No.4
10	田子山	第5地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、炭化種子(ヤマモモ多数)	後期	No.13
		第13地点	住居跡 1軒、土師器(暗文土器1点あり)	後期	No.17
		第29地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	後期	No.15
		第48地点	住居跡 1軒、土師器(続比企型坏あり)	後期	No.20
		第69地点	住居跡 1軒、土師器	後期	No.26
11	富士前	市史掲載	土師器多数	前期	『志木市史 原始・古代資料編』
		第15地点	住居跡 1軒、土師器(元屋敷系高坏あり)	前期	No.20
12	馬 場	市史掲載	土師器(S字甕か)	前期	『志木市史 原始・古代資料編』

5. 奈良・平安時代

2	中 野	第2地点	住居跡 1軒、須恵器	8c後半	No.2
		第16地点	住居跡 3軒、須恵器	9c中葉	No.17
		第25地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	平安時代	No.25
		第41地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄製品、転用紡錘車	9c後半	No.18
		第43地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄滓	9c前半	No.20
3	城 山	第1・2地点	住居跡 6軒、灰釉陶器、土師・須恵器多数、鉄・石製品	8~10c	No.5
		第4地点	土坑 2基、灰釉陶器、須恵器(新開・栗谷産)	10c前半	No.8
		第7地点	住居跡 1軒、灰釉陶器	9cか?	No.11
		第11地点	住居跡 1軒	平安時代	No.12
		第29地点	住居跡 1軒	平安時代	No.18
5	中 道	第12地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	9c後半	No.13
		第21地点	住居跡 2軒、溝跡 1本、灰釉陶器片、土師・須恵器	9c後半	No.17
		第41地点	住居跡 2軒、溝跡 1本、灰釉陶器片、須恵器、炭化米	9~10c	No.20
		第44地点	土坑 1基	平安時代	No.21
7	西原大塚	第8地点	住居跡 3軒	平安時代	No.9
		第34地点	住居跡 1軒	平安時代	No.18
10	田子山	第4地点	住居跡 9軒、土師・須恵器	8~10c	No.13
		第5地点	住居跡 4軒、土師・須恵器	8~10c	No.13
		第6地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、刀子、土錘	9c後半	No.12
		第7地点	住居跡 1軒、布目瓦小片2点、格子目叩き瓦小片1点	8c後半	No.12
		第19地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄製品	9~10c	No.22
		第21地点	住居跡 4軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄製品	9c代	No.22
		第25地点	住居跡 2軒、土坑 3基、土師器、砥石	9c後半	No.22
		第29地点	住居跡 1軒、須恵器、布目瓦 1点	9~10c	No.15
		第37地点	土坑か 2基、須恵器	9~10c	No.16
		第39地点	溝跡 3本、土師・須恵器小片	9c代	No.18
		第41・42地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄・銅製品	9~10c	No.18
第47地点	住居跡 2軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄・石製品	9c中頃	No.20		
第49地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	10c代	No.20		
第69地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、土師・須恵器	9c中頃	No.26		

6. 中・近世

2	中 野	第2地点	溝跡 1本	不明	No.2
		第6地点	溝跡 1本	不明	No.8
		第8地点	土坑 1基	不明	No.10
		第11地点	土坑 1基、陶・磁器小片	18~19c	No.17
		第25地点	土坑 15基、陶・磁器・瓦器小片	近世	No.25
		第43地点	井戸跡 1基	不明	No.20
3	城 山	A地点	溝跡 1本	中世	『志木市史 原始・古代資料編』
		C地点	柏城跡の大堀跡 1本、陶・磁器	中・近	『志木市史 中世資料編』
		第1・2地点	柏城跡関連の堀跡 5本、土坑 32基、井戸跡 10基、掘立柱建築・ピット群、陶・磁器多数、銅鏡、鉄・石製品	中・近	No.5
		第3地点	土坑 16基、溝跡 2本	中・近	No.7
		第4地点	土坑 1基	14~15c	No.8
		第6地点	土坑 7基	中・近	No.10
		第7・9地点	土坑 3基、土製品	中・近	No.11
		第11地点	土坑 3基、井戸跡 1基	中・近	No.12
		第12地点	土坑 2基、井戸跡 1基、溝跡 5本、陶・磁器、古銭	中・近	No.17

3	城山	第25地点	土坑 2基	中・近	No.16
		第29地点	土坑 11基、溝跡 1本、ピット群、板碑、陶・磁器、馬骨、古銭など	中・近	No.18
		第35地点	土坑 15基(鑄造土坑1基・溶解炉1基・地下式坑1基)、井戸跡 1基、鑄型、土・鉄製品、陶・磁器、古銭など	中・近	No.20
5	中道	第2地点	土坑 数基、溝跡 14本、掘立柱建築 4基、ピット群	中・近	No. 6
		第6地点	土坑 1基、陶・磁器小片	15c代	No. 8
		第26地点	土坑 6基(土坑墓2基)、掘立柱建築、人骨、古銭など	17c代	No.17
		第27地点	地下式坑 2基、土坑 2基、陶・磁器	14~15c	No.22
		第36地点	溝跡 2本、ピット群、陶・磁器小片	中・近	No.18
		第37地点	土坑墓 1基、道路遺構 1条、人骨、青磁盤、古銭	中世	No.18
8	新邸	第1地点	土坑 19基(地下式坑1基)、井戸跡 1基、溝跡 2基	中・近	No. 3
		第3地点	地下式坑 1基、溝跡 2本、陶・磁器	中・近	No.10
10	田子山	第25地点	遺構外出土遺物 陶・磁器	中・近	No.22
16	大原	第1地点	溝跡 1本	近世	No.22
7. 近代以降					
2	中野	第11地点	土坑 1基	18~19c	No.17
3	城山	第35地点	かわらけ 2点	19c後半	No.20
10	田子山	第31地点	ローム採掘遺構 2カ所	19c後半	『田子山富士』文化財第22集
		第49地点	土坑 1基	近・現代	No.20
15	市場裏	第3地点	かわらけ 2点	19c代	No.14

中・近世では、柏城跡、関根兵庫館跡が代表される遺跡である。特に、柏城跡内での数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。また、頭部及び上半部を欠く馬の骨が、城山遺跡第29地点の127号土坑から検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）が出土しており、特に、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、城山遺跡第35地点では、鑄造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。

近代以降の遺跡では、田子山遺跡の富士塚築造に関連するローム採掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

第2節 遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する城山遺跡について概観することにする。

城山遺跡は、志木市柏町3丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1kmに位置している。遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約12m、低地との比高差は約5mである。遺跡の現況は、住宅地を主とするが、小学校・神社・墓地などがあり、市内の台地上では比較的に緑地を多く残している地区と言える。今後は、住宅建設を中心とする各種開発行為の増大が予想されよう。

城山遺跡は、これまでに44回の調査が実施され、旧石器時代、縄文時代草創・早・前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世、近代に至る複合遺跡であることが判明している。そこで、これまでに城山遺跡からどのような遺構・遺物が検出されたかを今までの発掘調査の成果から代表的な例を挙げ、大まかに振り返ってみることにしたい(第3表)。

まず、城山遺跡における最初の発掘調査は、昭和49(1974)年に実施されたA地点に始まる。この調

No.	報告書名	刊行年	シリーズ名	発刊者	執筆者
1	西原・大塚遺跡発掘調査報告	1975	志木市の文化財第4集	志木市教育委員会	谷井 彪 宮野和明 井上國夫
2	西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点発掘調査報告書	1985	志木市遺跡調査会調査報告第1集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊 尾形則敏
3	新邸遺跡発掘調査報告書	1986	志木市遺跡調査会調査報告第2集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
4	新邸遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書	1987	志木市遺跡調査会調査報告第3集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
5	城山遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告第4集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形 神山健吉
6	中道遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告第5集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
7	城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書	1987	志木市の文化財第11集	志木市教育委員会 志木市遺跡調査会 志木ロータリークラブ	佐々木
8	志木市遺跡群Ⅰ	1989	志木市の文化財第13集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
9	志木市遺跡群Ⅱ	1990	志木市の文化財第14集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
10	西原大塚遺跡第7地点 新邸遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点発掘調査報告書	1991	志木市の文化財第15集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
11	志木市遺跡群Ⅲ	1991	志木市の文化財第16集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
12	志木市遺跡群Ⅳ	1992	志木市の文化財第17集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
13	中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点発掘調査報告書	1992	志木市の文化財第18集	志木市遺跡調査会	佐々木・尾形
14	志木市遺跡群Ⅴ	1993	志木市の文化財第20集	志木市教育委員会	尾形
15	志木市遺跡群Ⅵ	1995	志木市の文化財第21集	志木市教育委員会	尾形
16	志木市遺跡群Ⅶ	1996	志木市の文化財第23集	志木市教育委員会	佐々木・尾形 深井恵子
17	城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書	1996	志木市の文化財第24集	志木市教育委員会	佐々木・尾形
18	志木市遺跡群Ⅷ	1997	志木市の文化財第25集	志木市教育委員会	佐々木・尾形・深井
19	西原大塚の遺跡 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概報	1998		志木市遺跡調査会 西原特定土地区画整理組合	佐々木
20	志木市遺跡群9	1999	志木市の文化財第27集	志木市教育委員会	尾形・深井
21	志木市遺跡群10	2000	志木市の文化財第28集	志木市教育委員会	尾形・深井
22	埋蔵文化財調査報告書 1	2000	志木市の文化財第29集	志木市教育委員会	尾形・深井
23	西原大塚第45地点発掘調査報告書	2000	志木市遺跡調査会調査報告第6集	志木市遺跡調査会	佐々木・内野美津江 宮川幸佳・上田寛
24	志木市遺跡群11	2001	志木市の文化財第30集	志木市教育委員会	尾形・佐々木・内野 宮川
25	埋蔵文化財調査報告書 2	2001	志木市の文化財第31集	志木市教育委員会	尾形・深井
26	志木市遺跡群12	2002	志木市の文化財第32集	志木市教育委員会	尾形・佐々木・深井

第2表 志木市の発掘調査報告書一覧

査は、市史編さん事業の一環で志木市立志木第3小学校の校庭内を発掘調査したものである。この調査により、縄文時代前期の諸磯a式期の住居跡1軒と弥生時代後期の住居跡1軒、中世の溝跡1本が検出されている。特に、この地区から縄文時代前期の住居跡が検出されたことは、同遺跡に存在する城山貝塚との関連で注目されることになった。

昭和55（1980）年には、柏城の大堀の実体を解明する目的で、市史編さん室によるトレンチ発掘が実施され、上幅9.02m・下幅1.6m・深さ4.7mの大堀跡の細部形態が明らかになった。

昭和60（1985）年には、志木市遺跡調査会により、城山遺跡第1地点の発掘調査が実施された。この調査は、面積約5,000㎡という市内では初の大規模調査となり、古墳時代前期の住居跡1軒、後期の住居跡54軒、平安時代の住居跡6軒、中・近世では柏城の大堀跡を含め、土坑・井戸跡・溝跡・ピット群など多くの遺構・遺物が検出された。同時にこの調査を契機に志木市では、本格的に発掘調査体制が整備されたことは重要であろう。

昭和61（1986）年、志木ロータリークラブのボランティア事業の一環として、市教育委員会が主体となり、発掘調査が行われ、弥生時代末葉から古墳時代初頭の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡3軒、中・近世の土坑16基・溝跡2本が検出された。

昭和62（1987）年、本市では、国庫及び県費の補助金を導入し、個人専用住宅建設等に伴う発掘調査を開始した。この年は城山遺跡では第4地点の発掘調査が実施され、縄文時代中期の埋甕1基、弥生時代末葉から古墳時代初頭の住居跡2軒、平安時代の土坑2基、中・近世の地下式坑1基が検出された。

平成元（1989）年、第7・9地点の発掘調査が実施され、古墳時代後期の住居跡7軒、平安時代の住居跡1軒、中・近世の土坑5基が検出された。この調査は、第1地点よりも台地の奥まった地区ではあったが、古墳時代後期の住居跡が密集して分布することが判明し、改めて集落の広がりを理解するのに重要であったと言える。

平成2（1990）年の第12地点の調査では、中・近世に比定される地下式坑・井戸跡・溝跡が検出されている。これらについては、『館村旧記』の屋敷割之図では表記されていないが、柏城の西之丸に対する東之丸に関連する遺構と考えられる。

平成4（1992）年には、今回の報告である第15・16地点の調査が実施された（本書参照）。

平成5（1993）年には、志木市立志木第3小学校の雨水抑制工事に伴う調査により、縄文時代の土坑1基、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代の住居跡8軒、中・近世の土坑6基・溝跡6本が検出された。中・近世の溝跡については、柏城関連の堀跡に相当するものと考えられる。

平成6（1994）年、第25地点の発掘調査が実施され、古墳時代中期の住居跡1軒・後期の住居跡1軒、近世の地下室1基・溝跡1本が検出された。古墳時代中期の住居跡については、屋内炉を有するもので、遺物には土師器・須恵器が出土している。特に須恵器は、陶邑産の大型器台の脚部破片の他、坏蓋の破片で、その特徴からTK216型式（5世紀前葉から中葉）に比定される可能性があり、市内では最古のものとなった。

平成7（1995）年の第29地点の調査では、縄文時代早期の土坑1基、古墳時代後期の住居跡2軒、平安時代の住居跡1軒、中・近世の土坑11基・溝跡1本・ピット群が検出されている。特筆すべきは、中世に比定される127号土坑から、馬の埋葬土坑が検出されたことである。馬は頭部及び上半部を欠くが、板碑の直下で、横臥屈葬された状態で埋葬されており、同時に土師質土器・炭化種子（イネ・オオムギ・コムギ）が出土している。中でも、イネの塊状のものは、「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなも

のと分析結果が報告されている。

平成8（1996）年の第35地点の調査では、個人専用住宅という狭小な面積（84.40㎡）ではありながら、調査区全面から、弥生時代後期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡1軒、平安時代の住居跡2軒、中・近世の鑄造土坑1基・溶解炉1基・井戸跡1基などが密集して検出された。この調査で特筆すべきは、平安時代の128号住居跡から、県内初の出土である「冨」印と市内初の猿投産の緑釉陶器片が出土したこと、さらに、17世紀中頃から後半に比定される鑄造遺構に関連する鑄造土坑・溶解炉、そして数多くの鑄型・鉄滓・道具類が出土したことである。

平成9～12年は、発掘調査が実施されなかった。平成13（2001）年には第42地点の調査が実施された。調査面積は2,000㎡を越すもので、当遺跡内では大規模発掘に相当する。この調査により、旧石器時代の石器集中地点1カ所、縄文時代早期の炉穴1基・中期の土坑17基、古墳時代後期の住居跡16軒、平安時代の住居跡5軒、中・近世の土坑169基・溝跡3本・井戸跡8基・ピット群などが検出された。現在、志木市遺跡調査会により整理作業が進行中であるため、詳細は不明であるが、現時点で注目すべきは、古墳時代後期では148号住居跡から一括出土した土器群、中・近世では、柏城の大堀跡（犬走り）、234号土坑から出土した完形の鉄鍋、様々な形態の土坑群などが挙げられる。

以上の調査から、城山遺跡は、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中・近世の複合遺跡であり、また、各時代の遺構が複合する密度も散在的ではなく、市内では最も濃密で、複雑な地区であると言っても過言ではない。

最後に、本遺跡の特色を時代別にまとめると、以下のとおりである。

○旧石器時代 第42地点から石器集中地点1カ所が検出されている。

○縄文時代 前期に比定される城山貝塚が本遺跡の北端に存在する。斜面貝塚であるが、詳細な調査は実施されていないため、実態は不明である。A地点からは諸磯期の住居跡1軒が検出されている。

中期の加曾利EⅡ式期の住居跡1軒が検出されている。

○弥生時代 後期の住居跡がB地点から1軒、第3地点から1軒、第4地点から2軒、第35地点から1軒の合計5軒が検出されている。

○古墳時代 前期の住居跡は、第2・11地点から1軒ずつ2軒が検出されている。

中期から後期にかけては、住居跡が爆発的に増加し、大集落を形成する。5世紀後半から7世紀後半にかけての住居跡は130軒を越えている。

○奈良時代 8世紀後半に比定される住居跡は2軒検出されている。現時点では8世紀前半に比定される住居跡は皆無である。

第42地点のピットから、偏行唐草文が描かれた軒平瓦片1点出土している。

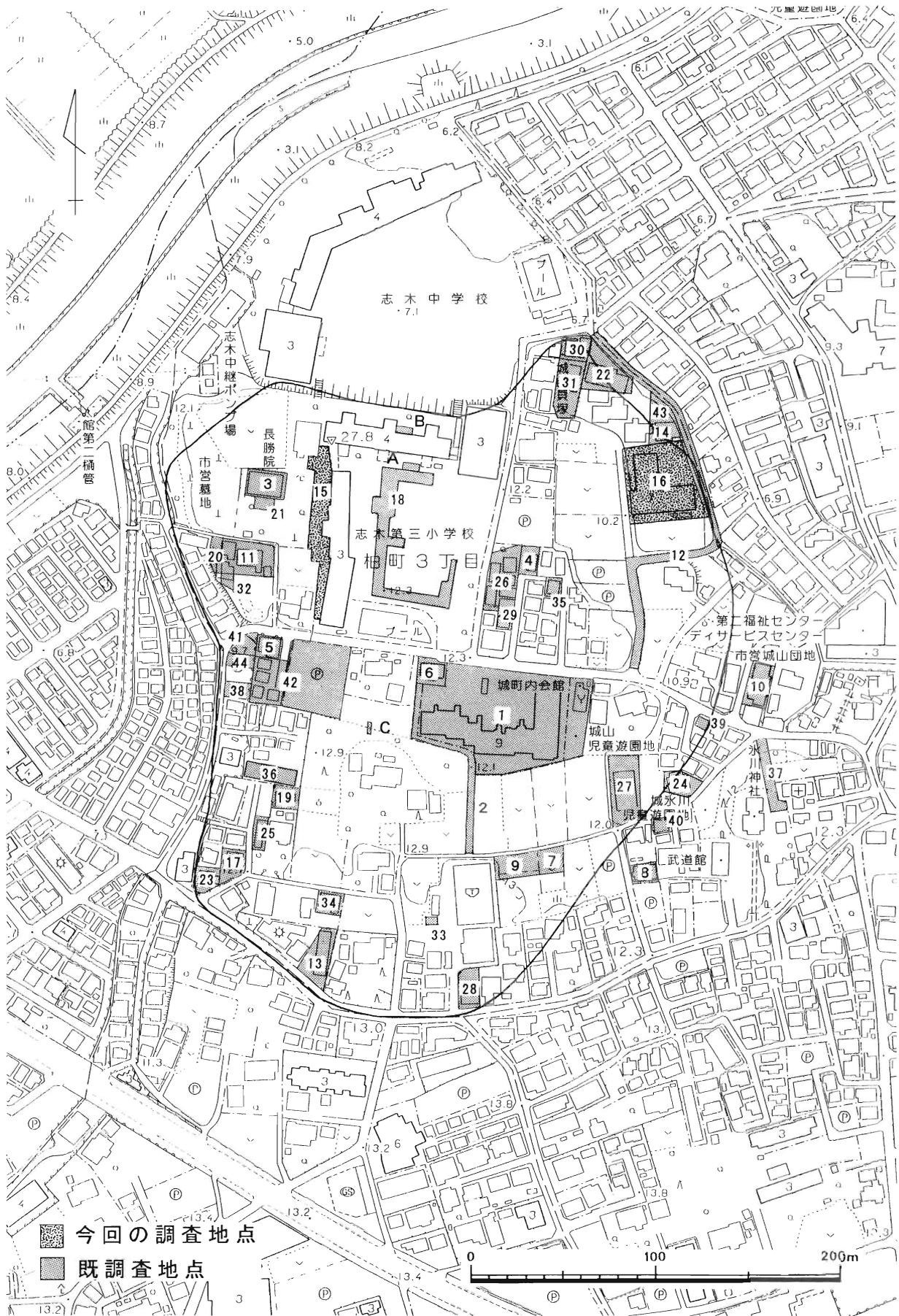
○平安時代 9世紀前半から10世紀にかけての住居跡は15軒検出されている。

第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」と書かれた銅印、緑釉陶器の小破片などが出土している。

○中・近世 柏城関連の大堀を含めた溝跡・井戸跡・土坑・ピット群が多数検出されている。

第29地点の127号土坑は馬の埋葬土坑である。

第35地点からは鑄造土坑と溶解炉が検出されている。市内では初の鑄造関連遺構である。



第2図 城山遺跡の調査地点 (1/3000)

平成14年7月31日現在

第3表 城山遺跡調査一覧

調査地点	面積(㎡)	確認調査日	発掘調査期間	調査原因	遺構の概要	報告書No.
A地点	90.00		昭和49年8月中	学術調査	(縄文前期)住居跡1軒(弥生後期)住居跡1軒(中世)溝跡1本	1984『志木市史 原始・古代編』
C地点	30.00		昭和55年7月20日 ～8月21日	学術調査	(中世)柏城大堀跡	1986『志木市史 中世資料編』
B地点	50.00		昭和57年3月25日 ～3月31日	学術調査	(古墳後期)住居跡2軒(中世)溝跡1本	1984『志木市史 原始・古代編』
第1・2地点	4,964.39		昭和60年4月8日 ～11月26日	共同住宅建設	(古墳前期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡54軒(平安)住居跡6軒(中・近世)土坑31基、溝跡5本、井戸跡9基、ピット	No.5
第3地点	300.00		昭和61年7月21日 ～8月30日	学術調査	(古墳前期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡3軒(中・近世)土坑16基、溝跡2本	No.7
第4地点	92.28		昭和62年6月19日 ～7月1日	個人住宅建設	(縄文中期)埋甕1基(弥生後期)住居跡2軒(古墳後期)住居跡1軒(平安)土坑2基(中世)土坑1基(不明)土坑1基	No.8
第5地点	125.00	昭和63年 6月10日		共同住宅建設	検出されなかった。	未
第6地点	166.08		昭和63年12月12日 ～12月28日	共同住宅建設	(古墳後期)住居跡2軒、土坑1基(中・近世)土坑7基	No.10
第7地点	130.00	平成元年 11月17日	11月20日～12月4日	宅地造成	(古墳後期)住居跡1軒(平安)住居跡1軒	No.11
第8地点	132.13	11月23日		共同住宅建設	検出されなかった。	No.11
第9地点	115.71	12月4日	12月4日～12月18日	宅地造成	(古墳後期)住居跡6軒(中・近世)土坑5基	No.11
第10地点	330.491	平成2年 3月16日		共同住宅建設	検出されなかった。	No.11
第11地点	192.00	4月6日	4月7日～4月20日	個人住宅建設	(縄文早期)炉穴2基(縄文前期)土坑1基(縄文中期)住居跡1軒、土坑2基(古墳前期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡2軒(平安)住居跡1軒(中・近世)土坑3基、井戸跡1基	No.12
第12地点	1,074.00	4月19日 ～24日	4月25日～5月22日	道路改良工事	(中・近世)土坑2基、溝跡4基、井戸跡1基	No.17
第13地点	400.44	5月7日	5月8日～5月17日	共同住宅建設	(古墳後期)住居跡1軒	No.17
第14地点	181.90	平成4年 5月1日		個人住宅建設	検出されなかった。	No.15
第15地点	560.00		平成4年7月21日 ～8月26日	道路工事	(古墳後期)住居跡6軒(中・近世)溝跡2本、土坑1基	本報告
第16地点	1,556.00		平成4年10月2日 ～12月12日	共同住宅建設	(縄文)遺物包含層、集石1基(古墳後期)住居跡1軒(中・近世)土坑1基、井戸跡2基、溝跡2本	本報告
第17地点	130.56	平成5年 3月22日		個人住宅建設	検出されなかった。	No.15
第18地点	115.45	平成5年 6月3日	平成5年6月3日 ～8月28日	雨水流水抑制工事	(縄文)土坑1基(弥生後期)住居跡1軒(古墳後期)住居跡8軒(中・近世)土坑6基、溝跡6本	未
第19地点	361.93	10月28日	11月1日～11月15日	共同住宅建設	(古墳後期)住居跡5軒(不明)土坑1基	未
第20地点	100.38	12月24日	平成6年1月13日 ～1月17日	個人住宅建設	(古墳後期)住居跡1軒(不明)土坑2基	No.15

調査地点	面積(m ²)	確認調査日	発掘調査期間	調査原因	遺構の概要	報告書No.
第21地点	48.00		2月18日～2月24日	樹木土壌改良	(縄文早期) 炉穴1基(古墳後期) 住居跡2基(近世) 土坑3基	未
第22地点	498.13	3月2日	3月9日～3月30日	共同住宅建設	(縄文早期) 炉穴1基(古墳後期) 住居跡1軒	未
第23地点	157.94	平成6年 5月31日		個人住宅建設	検出されなかった。	No.16
第24地点	277.68	7月6日		個人住宅建設	検出されなかった。	No.16
第25地点	127.38	7月15日	7月21日～7月29日	個人住宅建設	(古墳中期) 住居跡1軒(古墳後期) 住居跡1軒(近世) 土坑1基、溝跡1基(不明) 土坑1基	No.16
第26地点	410.00	8月18日	8月22日～10月14日	共同住宅建設	(縄文) 土坑1基(古墳後期) 住居跡7軒(平安) 住居跡4軒・土坑1基(中・近世) 土坑6基・溝跡4本(不明) 土坑1基	未
第27地点	371.52	平成7年 1月30日	平成7年2月27日 ～4月7日	共同住宅建設	(古墳後期) 住居跡2軒(中・近世) 土坑15基、溝跡2本、井戸跡1基	未
第28地点	233.30	平成6年 12月13日	平成7年1月10日 ～2月17日	事務所建設	(縄文前期) 土坑1基(古墳後期) 住居跡5軒(不明) 土坑1基	未
第29地点	146.41	平成7年 4月5日	4月11日～4月28日	個人住宅建設	(縄文早期) 土坑1基(古墳後期) 住居跡2軒(平安) 住居跡1軒(中・近世) 土坑11基、溝跡1本、ピット群	No.18
第30地点	200.85	4月24日		分譲住宅建設	検出されなかった。	No.18
第31地点	164.27	6月6日		個人住宅建設	検出されなかった。	No.18
第32地点	59.62	11月14日	11月15日	倉庫建設	(中世) ピット1本(不明) 土坑1基	No.18
第33地点	30.00	平成8年 6月12日		防火水槽 設置工事	検出されなかった。	No.20
第34地点	162.00	7月12日	7月15日～8月1日	個人住宅建設	(古墳後期) 住居跡3基(平安) 土坑1基	No.20
第35地点	84.40	11月15日	11月18日～12月25日	個人住宅建設	(弥生後期) 住居跡1軒(古墳後期) 住居跡1軒(平安) 住居跡2軒(中・近世) 土坑1基、溶解炉1基、土坑13基、井戸跡1基、ピット	No.20
第36地点	361.18	平成10年 4月23日		駐車場建設	盛土保存適用	No.21
第37地点	430.00	平成11年 11月5日		駐車場建設	検出されなかった。	No.24
第38地点	120.38	平成12年 7月25日		分譲住宅建設	検出されなかった(現地踏査)。	No.26
第39地点	94.97	8月21日		個人住宅建設	盛土保存適用	No.26
第40地点	76.32	12月7日		個人住宅建設	検出されなかった。	No.26
第41地点	140.33	12月12日		個人住宅建設	検出されなかった(現地踏査)。	No.26
第42地点	2,173.79	12月18日	平成13年2月23日 ～6月29日	共同住宅建設	(旧石器) 石器集中地点1カ所(縄文) 坑17基、炉穴1基(古墳後期) 住居跡16軒(平安) 住居跡5軒(中・近世) 土坑169基、溝跡3本、井戸跡8基、ピット群	未
第43地点	117.00	平成13年 5月29日		分譲住宅建設	検出されなかった。	未
第44地点	132.30	6月20日		分譲住宅建設	検出されなかった(現地踏査)。	未

第2章 城山遺跡第15地点の調査

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経過

平成4年4月、志木市長細田喜八郎氏から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町3丁目2608番地（面積560㎡）にある志木市立志木第3小学校の西校舎裏の道路を改良するための工事を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡（コード11228-003）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 本地点は埋蔵文化財包蔵地に該当し、さらに遺構が密集して分布することが予想される。
2. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
3. 上記2の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

その後、数回の協議を重ねた結果、本地点は、周辺の調査成果から遺構が密集して分布することが明らかであり、さらに埋蔵文化財の保存措置を講ずることは困難であるという理由から、埋蔵文化財確認調査は実施せずに、そのまま発掘調査を実施することに決定した。

平成4年7月21日、志木市長細田喜八郎氏より、埋蔵文化財発掘届が提出され、教育委員会では発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、志木市長細田喜八郎氏と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、7月21日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、文化庁通知番号は、委保第5の1317号 平成4年12月18日付である。

(2) 発掘調査の経過

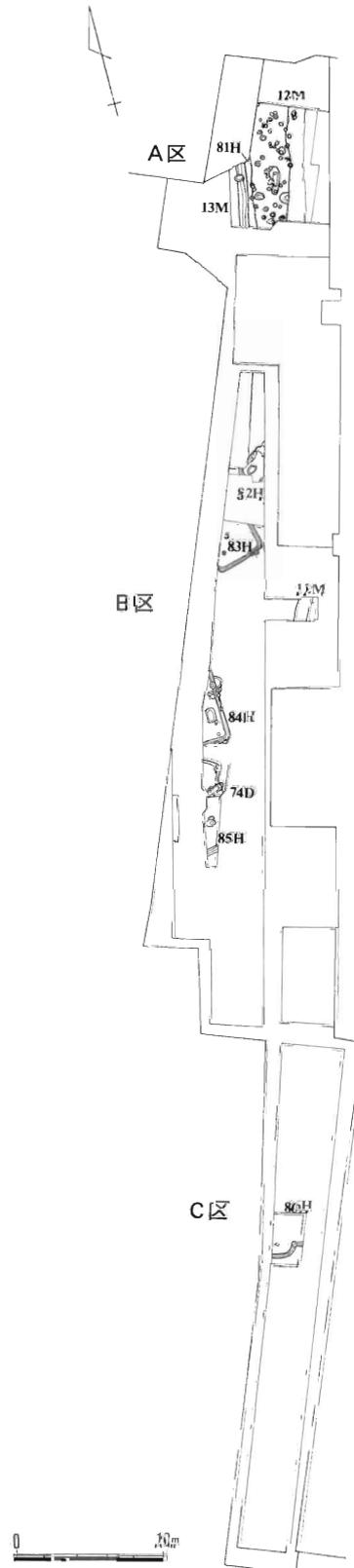
本地点の調査に当たり、調査区域を便宜的に北端からA・B・C区とする。

7月21日 午後2時、重機による表土剥ぎ及び遺構確認作業を開始する（A区）。検出された遺構は、かなり大規模な堀跡（12M）であることから、柏城関連の本丸を囲む大堀跡である可能性があるものと考えられた。また、地中には無数の水道管・ガス管が張り巡らされており、重機による表土剥ぎ作業は難航極まりない。途中、水道管を破壊し、冠水する。

22日 本日よりB区の表土剥ぎ及び遺構確認作業を開始する。12Mの延長部分は確認できなかった。新たに古墳時代後期の住居跡1軒（82H）を確認した。

23日 重機による表土剥ぎ及び遺構確認作業に併行し、B区の遺構の精査を開始する。A区の12Mの精査は、B区にその排土を置き場として割り当てる予定とし、先行してB区を終了させることにした。新たに古墳時代後期の住居跡82Hと83Hの精査を開始する。

- 24日 82H・83Hの精査。82Hはほぼ掘り終了。83Hの南東方向から溝跡の一部を検出する。詳細は不明であるが、12Mの延長部分である可能性も捨てきれないであろう。今回は12Mとして取り扱うことにする。
- 27日 83Hの精査。
- 28日 B区の82H・83H・12Mの写真撮影・実測を終了する。本日より、A区の12Mの精査を開始する。表土剥ぎ及び遺構確認作業により、新たに住居跡2軒（84H・85H）を確認する。
- 29日 84Hの精査を開始する。A区の12Mはかなり深く、やはり柏城関連の大堀跡である可能性がある。調査区の関係上、東側は調査区外になってしまうが、西側については、立ち上り部分が確認できる。断面形は薬研状を呈するものと考えられる。
- 30日 84H・12Mの精査続き。12Mの西側斜面には多くのピットが確認できる。
- 31日 84H・12Mの精査続き。85Hの精査を開始する。
- 8月1日 85Hの精査続き。
- 3日 84Hの実測。土器を取り上げる。その後、カマド精査開始。85Hは精査続き。C区の表土剥ぎ及び遺構確認作業を開始する。新たに86Hを確認し、精査を開始する。古墳時代後期の所産であろう。
- 4日 84Hのカマド実測終了。85・86Hは精査続き。12Mから播鉢の破片出土。16世紀後半のものと考えられる。
- 5日 12Mの西側上端を精査中に新たに13Mを確認する。13Mは幅約60cm、断面形が薬研状を呈するもので、12Mの走行方位に平行している。85・86Hは精査続き。
- 6日 85・86H・12M精査続き。85Hは出土遺物を実測し、取り上げる。



第3図 遺構分布図 (1/500)

- 10日 12・13Mは精査続き。85Hは遺構の写真撮影・実測を終了する。86Hは床面及び壁を確認する。床面上より炭化材が多く出土していることから、焼失住居と考えられる。
- 11日 12Mは遺物出土状態の写真撮影を終了後、実測を行い、遺物を取り上げる。その後、土層断面図の実測を開始する。86Hは掘り終了後、遺構の写真撮影を行う。13Mは掘り終了。
- 12日 12Mはほぼ掘り終了。86Hは実測完了。
- 13日 12Mは一旦確認面から3mの深さで写真撮影を行う。
- 14日 12Mをさらに掘り下げる。
- 15日 12Mの精査続き。堀底面を一部確認する。
- 17日 12Mの土層図完了。同時に平板測量開始する。
- 18日 12M実測続き。
- 19日 12M精査再開。
- 20日 12M掘り終了。その後、写真撮影を完了する。
- 21日 午前中に実測の残りを終了させ、調査は完了する。午後から配管露出部分を人力により埋戻し、器材を片付ける。同時に重機による埋戻し作業を開始する。
- 26日 埋戻し作業を完了する。

第2節 古墳時代の遺構・遺物

82号住居跡（第4図）

〔住居構造〕住居の西コーナー付近以外は、攪乱と調査区域外であるため、詳細は不明である。（平面形）不明。（規模）不明。（壁高）10cm前後を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲では、カマドを除いて巡らされている。（床面）柱穴の南側に一部よく硬化した床面が確認された。（カマド）北壁に位置するが、一部しか確認できなかったため、詳細は不明である。（柱穴）深さ20cmの柱穴が1本検出されたが、本住居の主柱穴の可能性がある。（貯蔵穴）カマド左側の西コーナーに位置し、平面形は長方形を呈する。規模は50×74cm・深さ40cmを測る。

〔遺物〕甑・甕・土製支脚が出土した。

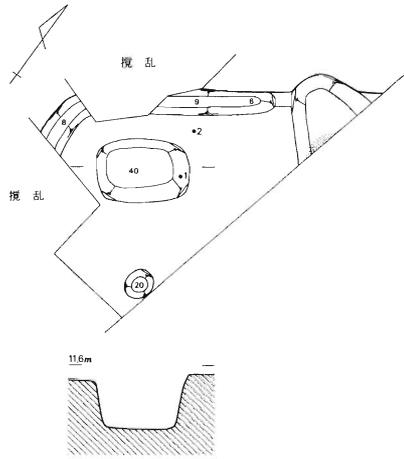
〔時期〕古墳時代後期（7世紀前葉）。

82号住居跡出土遺物（第5図1～3）

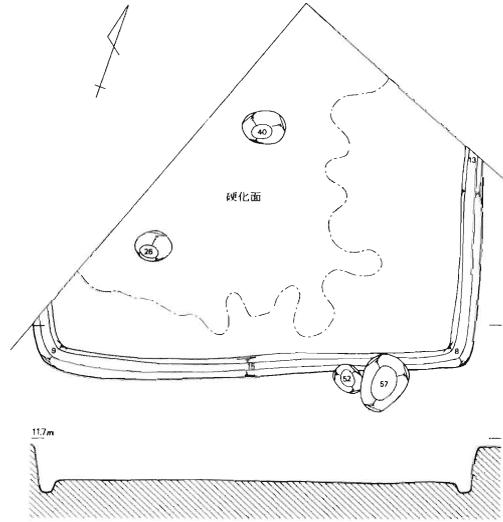
1・2は土師器甕形土器。1は器高27.5cm・口径27.5cm・推定底径10.7cm。底部は筒抜け式。口縁部は外反し、頭部から底部にかけてはやや膨らみをもつ。色調は黄褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内外面はていねいにヘラナデ（スリップか）が施され、全体にボンヤリと薄い皮膜が貼られたようである。貯蔵穴内からの出土で、遺存度は4/5程である。

2は現器高20.1cm・底径10.1cm。底部は筒抜け式。底部から胴部にかけてはやや膨らみをもちながらゆるやかに開いている。色調は内面が橙色、外面が黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・小石を含む。調整は1の土器同様に内外面ヘラナデ（スリップか）が施されている。カマド左横の床面上からの出土で、胴部中位以下を1/3程遺存する。

3は土製支脚。現高7.7cm・現最大幅5.8cm。色調は淡赤褐色を基調とし、胎土には砂粒・茶褐色粒子を多く含む。表面には稜線をもつ面が観察されることから、製作にあたり、粘土塊を直接粘土板のよう



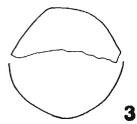
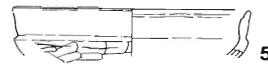
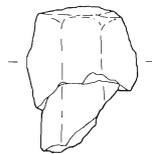
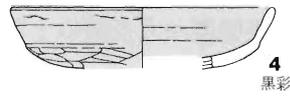
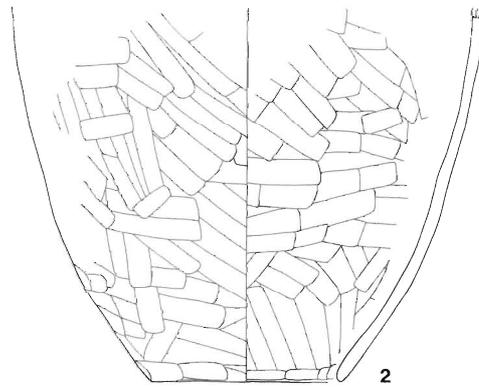
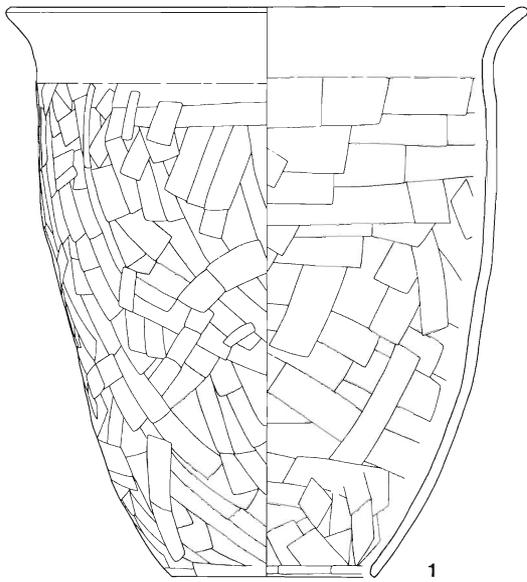
82号住居跡



83号住居跡



第4图 82・83号住居跡 (1/60)



1-3 82号住居跡出土遺物
4-5 83号住居跡出土遺物



第5图 82・83号住居跡出土遺物 (1/4)

なものに叩きつけて成形したものと推測される。カマド中からの出土である。

83号住居跡（第4図）

〔住居構造〕住居の西側は調査区域外であり、北側は攪乱により壊されている。（平面形）隅丸方形か。（規模）不明×3.50m。（壁高）24～27cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲では全周する。上幅15～20cm・下幅10～18cm・深さ8～15cmを測る。（床面）壁際を除いて、硬化した面が確認された。（柱穴）2本検出されたが、本住居に伴うかどうかは不明である。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕坏2点とヤマモモの炭化種子1個が覆土中より出土している。

〔時期〕古墳時代後期（7世紀前葉）。

83号住居跡出土遺物（第5図4・5）

4・5は土師器坏形土器である。4は現器高3.3cm・推定口径14.0cm。口縁部と底部の境に段をもち、口縁部は外傾するが、途中に弱い稜がみられる。色調は全体に暗褐色を基調とするが、内面及び口縁部外面を中心に黒く煤けている。黒色土器の可能性はある。胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、遺存度は1/6程である。

5は現器高3.0cm・推定口径12.6cm。口縁部と底部の境に段をもち、口縁部は外傾し、口唇部内面には沈線がまわる。色調は全体に暗黄褐色を基調とするが、部分的に黒く煤けている箇所がみられる。黒色土器の可能性はある。胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、遺存度は1/5程である。

84号住居跡（第6図）

〔住居構造〕住居の東壁と南東コーナー付近以外は調査区域外のため不明である。（平面形）方形か。（規模）不明。（壁高）15～26cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できた範囲では全周する。上幅20～25cm・下幅7～12cm・深さ10～17cmを測る。（床面）壁際を除いてよく硬化している。（カマド）東壁に位置するが、西側は調査区外であり、さらに後世の柱穴にも壊されている。長さ110cm・幅約100cm・壁への掘り込み50cmを測る。壁溝を掘った後にカマドが構築されており、袖部は灰褐色粘土で作られたと思われる。（柱穴）検出された柱穴は、後世のものと思われる。（貯蔵穴）東壁の南東コーナーとカマドの中間に位置し、平面形は長方形を呈する。規模は90×73cm・深さ64cmを測る。

〔遺物〕貯蔵穴と東壁際から多数の土器が出土し、ヤマモモの炭化種子も貯蔵穴と覆土中から1点ずつ出土している。

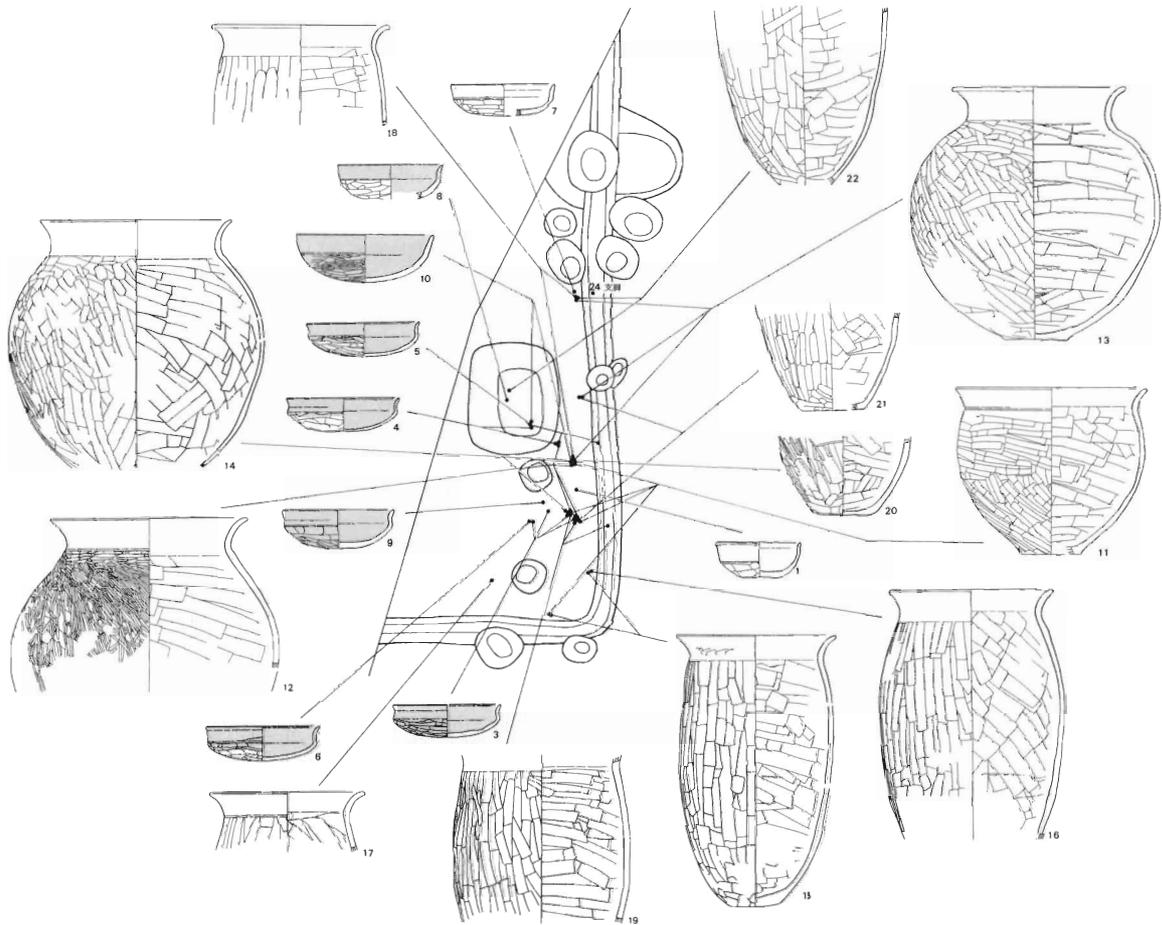
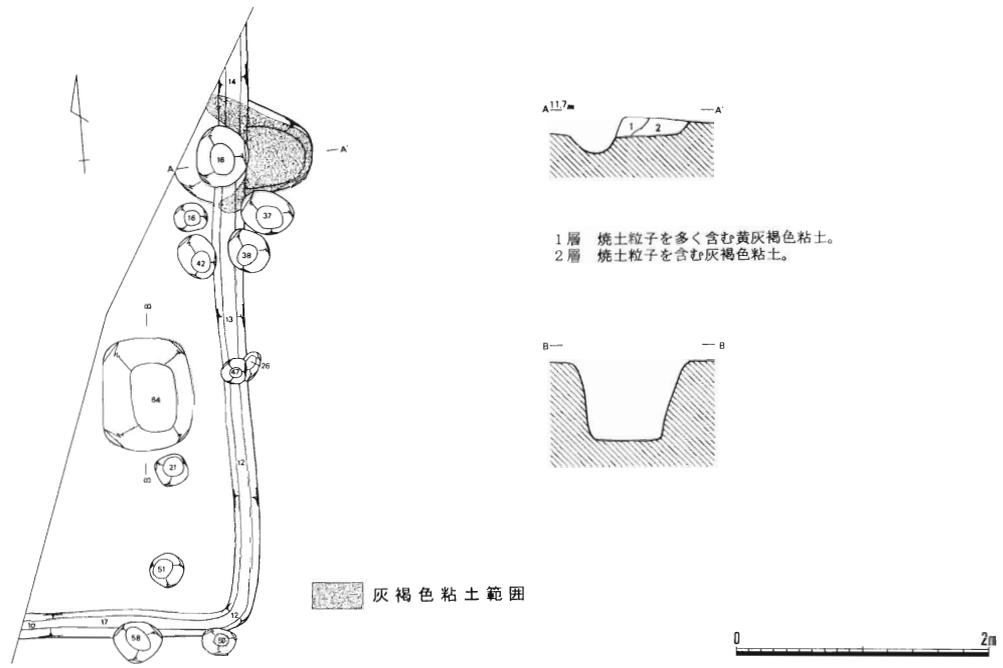
〔時期〕古墳時代後期（7世紀前葉）。

84号住居跡出土遺物（第7・8図）

土師器坏形土器（1～10）

坏形土器はバラエティーが豊富で、無彩系土器（1・2・7）、赤色系土器（3～6・8）、黒色系土器（9・10）に分類できる。その内、無彩系土器は1・7が有段坏、2が有稜坏に、赤色系土器は3～6が比企型坏、8が有段坏に、黒色系土器は9・10が有段坏にそれぞれ細分が可能である。

1は器高4.2cm・口径10.3cm・底径4.4cm。口縁部と底部の境と口唇部直下には横ナデにより作出された弱い段をもち、底部は平底風である。底面には僅かではあるが、木葉痕が残る。色調は暗橙色を基調



第6図 84号住居跡・遺物出土状態 (1/60・1/9)

とし、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・白色粒子・金雲母を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。貯蔵穴すぐ南東の床面上からの出土で、遺存度は4/5強である。

2は現器高3.2cm・推定口径12.0cm。口縁部と底部の境に稜をもち、口縁部は外傾する。色調は暗褐色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・白色粒子・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、遺存度は1/5程である。

3は器高3.9cm・口径12.6cm。口縁部と底部の境には鋭い稜をもち、口縁部は外反する。口唇部内面直下には幅1.5mmの沈線がまわる。赤彩は外面底部を除き全面に施されるが、基本的に胎土の色調が全体に赤褐色を呈すため、赤彩の範囲と区別するのが困難な土器である。胎土には茶褐色粒子・黒色粒子・砂粒・小石を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ナデが施される。貯蔵穴すぐ南側の床面上からの出土で、遺存度は2/3程である。

4は器高4.1cm・口径13.1cm。口縁部と底部の境に稜をもち、口縁部は外反する。口唇部内面直下には幅1.5mmの沈線がまわる。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土の色調は暗橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。貯蔵穴内及びそのすぐ南東の床面上からの出土で、ほぼ完形品である。

5は器高4.1cm・口径13.2cm。3・4の土器に比べ、口縁部の張りが幾分弱く、口縁部と底部の境の稜に丸味をもつ。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土の色調は暗褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。貯蔵穴内からの出土で、ほぼ完形品である。

6は器高4.1cm・推定口径13.2cm。5の土器と法量は同じであるが、口縁部と底部の境の稜がやや強く段に近い。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土の色調は暗褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒・小石を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施されるが、その後ナデられ光沢を帯びる。貯蔵穴南側の床面上からの出土で、遺存度は1/2程である。

7は器高3.6cm・推定口径12.0cm。口縁部と底部の境には横ナデにより作出された弱い段をもち、口縁部は直立する。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。貯蔵穴北東の東壁近くの床面上からの出土で、遺存度は1/4程である。

8は現器高4.1cm・推定口径12.3cm。口縁部と底部の境には横ナデにより作出された段をもち、口縁部は外傾する。内面及び口縁部外面は赤彩が施される。胎土の色調は暗褐色を呈し、胎土には黒色微粒子・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。貯蔵穴内からの出土で、遺存度は1/5程である。

9は器高4.6cm・口径12.9cm。口縁部と底部の境には横ナデにより作出された段をもち、口縁部は外反する。内外面が黒く煤けていることから、黒色土器と考えられる。胎土の色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後底部を中心にナデが施される。貯蔵穴南側の床面上からの出土で、ほぼ完形品である。

10は器高5.7cm・推定口径16.0cm。大型有段坏で、口縁部と底部の境には横ナデにより作出された段をもち、口縁部は外傾する。全面黒彩が施される。胎土は精錬されており、茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む程度である。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削り後ヘラ磨き調整が施され、光沢を

帯びる。貯蔵穴内及びそのすぐ南東の床面上からの出土で、遺存度は1/4程である。

土師器鉢形土器 (11)

器高20.3cm・口径23.0cm・推定底径7.2cm。胴部上半に膨らみをもち、口縁部は外反する。色調は全体に黒く煤け黒褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデが施される。貯蔵穴内及び住居南東隅の床面上からの出土で、遺存度は1/2程である。

土師器甕形土器 (12~23)

12~14は球胴甕、15~23は長胴甕である。

12は現器高20.5cm・口径23.0cm。胴部中位に最大径をもち、口縁部は外反する。色調は淡橙色を基調とし、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・黄褐色粒子・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後磨きが施される。貯蔵穴内及びそのすぐ南東の床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて2/3程遺存する。

13は器高31.0cm・口径23.0cm・底径7.6cm。12の土器に比べ、胴部の膨らみが強く、口縁部は「コ」の字状を呈する。最大径は胴部中位にもつ。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・白色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）が施される。貯蔵穴及びそのすぐ東側の床面上からの出土で、遺存度は4/5程遺存する。

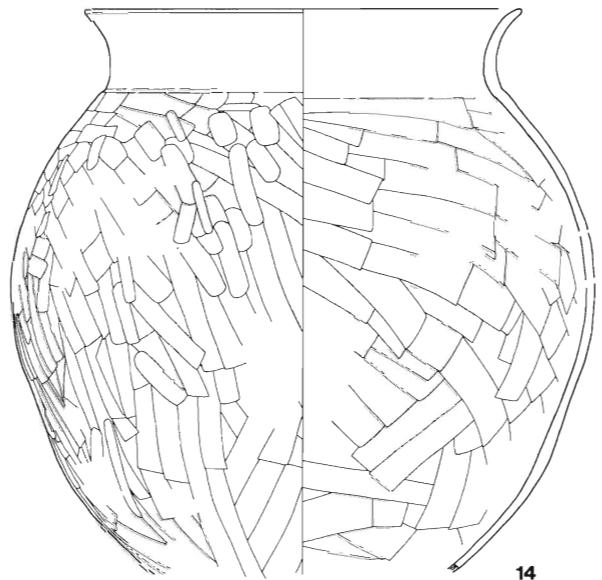
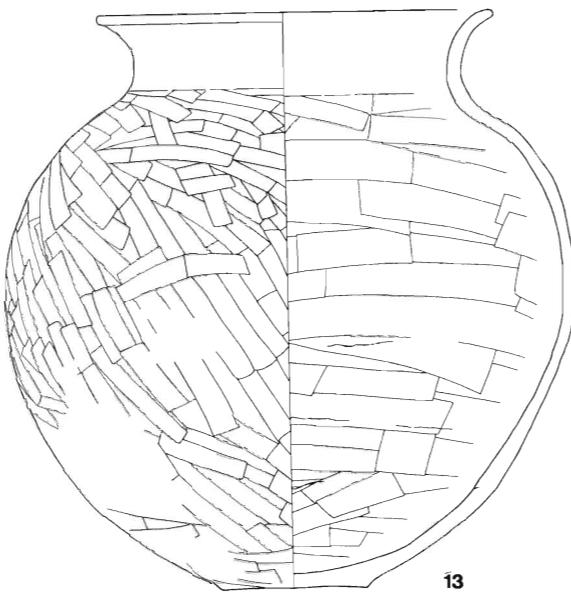
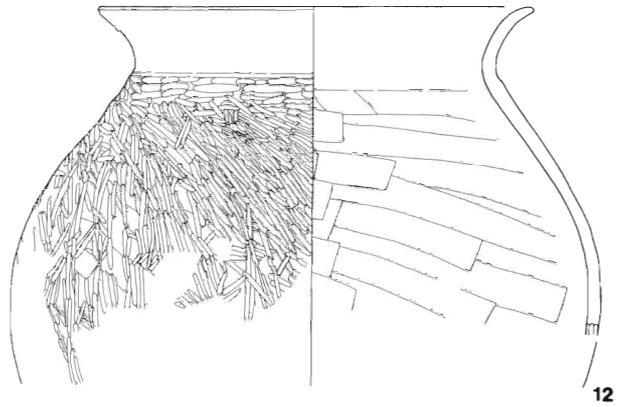
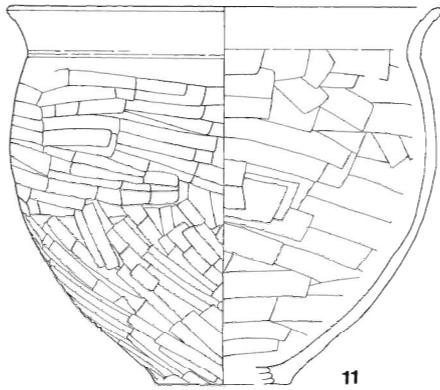
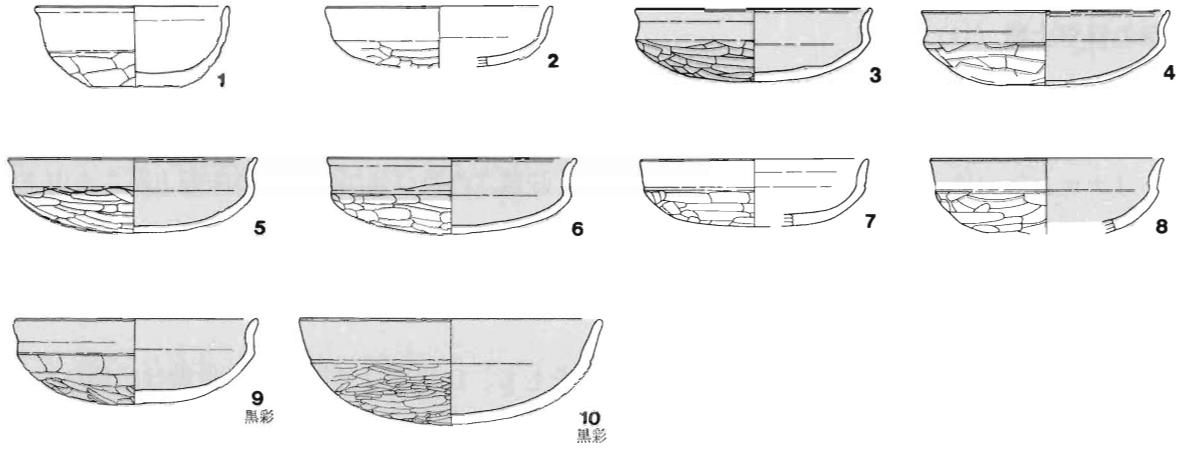
14は現器高30.4cm・推定口径22.9cm。13の土器と比べると、胴部上半の張りは弱く、全体に器厚が薄く作られている。色調は淡橙色を基調とし、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）が施される。貯蔵穴すぐ南東の床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/3程遺存する。

15は器高31.0cm・口径18.7cm・底径5.6cm。胴部は直線的に細長く、口縁部は外反する。最大径は口縁部と胴部中位のはほぼ同じ位置にもつ。色調は暗黄褐色を基調とするが、胴部全体は煤けており、黒褐色を呈する。また、口縁部内外面には粘土の付着が観察される。胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。住居南東隅の床面上からの出土で、遺存度は4/5強である。

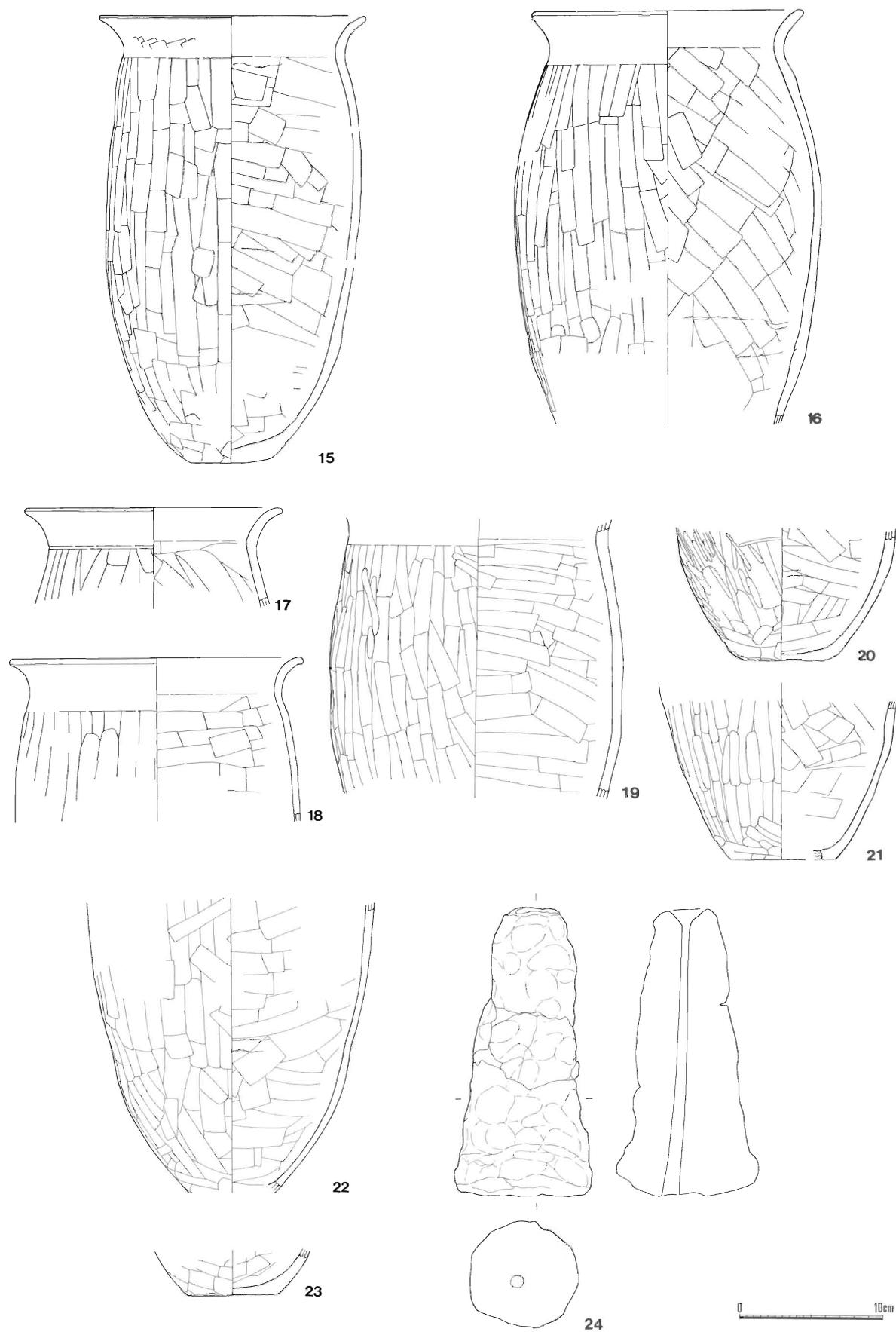
16は現器高29.5cm・口径19.0cm。15の土器に比べ、胴部中位に膨らみをもつ。色調は暗黄褐色を基調とするが、15の土器同様に胴部全体が煤けており、黒褐色を呈する。口縁部内外面にも粘土の付着が観察される。胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・金雲母を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）が施される。住居南東隅の床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて2/3程遺存する。

17は現器高7.2cm・推定口径18.1cm。口縁部が大きく外反する長胴甕である。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）が施される。住居南東隅の床面上からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/3程遺存する。

18は現器高11.9cm・推定口径20.6cm。直線的な胴部と外反する口縁部をもつ長胴甕である。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・白色粒子・砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）が施される。貯蔵穴東側の床面上からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて1/3程遺存する。



第7図 84号住居跡出土遺物1 (1/4)



第8图 84号住居迹出土遺物2 (1/4)

19は現器高20.0cm・胴部最大径20.5cm。胴部中位に膨らみをもつ長胴甕である。色調は全体に煤けており、黒褐色を呈する。胎土には茶褐色粒子・白色粒子・砂粒を多く含む。頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ（ささくれ状）、外面はヘラ削り後ヘラナデが施される。貯蔵穴内及びその南東の床面上からの出土で、頸部から胴部下半にかけて1/3程遺存する。

20は現器高9.5cm・推定底径5.7cm。胴部下半から底部にかけて1/3程遺存する。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。内面はヘラナデ（ささくれ状）、外面はヘラ削り後粗いナデが施される。貯蔵穴南東の床面上からの出土である。

21は現器高12.7cm・推定底径7.2cm。胴部下半から底部にかけて2/3程遺存する。色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデが施される。貯蔵穴内及びその南東の床面上からの出土である。

22は現器高21.0cm・胴部最大径20.1cm。胴部中位に最大径をもつ長胴甕である。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・白色粒子・小石を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）が施される。貯蔵穴内及びその北東の床面上からの出土で、胴部中位から底部にかけて1/2程遺存する。

23は現器高3.2cm・底径6.3cm。底部を2/3程遺存する。色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・白色粒子を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土である。

土製品（24）

支脚である。全長20.6cm・上底径3.9cm・下底径9.0cm。重さ1,193g。上底より下底が大きく安定よく作られているが、おおよそ円筒形状を呈している。また、中心には径7mm前後の穿孔が開けられている。色調は淡橙色を呈し、胎土には砂粒・繊維を多く、金雲母を含む。全面に押捺痕が観察される。東壁の壁溝内からの出土で、完形品である。

85号住居跡（第9図）

〔住居構造〕北側は74号土坑に切られる。さらに攪乱によりほとんどが壊されているため、詳細は不明である。（平面形）不明。（規模）不明。（壁高）残っている部分では40cmを測る。（壁溝）確認できた所では、上幅40cm・下幅10～14cm・深さ9～12cmを測る。壁は急斜に立ち上がる。（床面）よく硬化していた。（柱穴）検出された柱穴は、支柱の可能性がある。（覆土）焼土粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕床直から坏・甕形土器と土錘1点が出土した。

〔時期〕古墳時代後期（7世紀中葉）。

85号住居跡出土遺物（第10図）

土師器坏形土器（1～3）

1は現器高3.3cm・推定口径10.6cm。口縁部と底部の境に稜をもち、口縁部は外傾する。色調は黄褐色を基調とし、胎土には砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、口縁部から底部にかけて1/5程遺存する。

2は現器高3.9cm・推定口径12.8cm。口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部は外傾する。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、口縁部から底部にかけて1/6程遺存する。

3は器高4.7cm・口径12.0cm。口縁部と体部の境に段をもち、口縁部は直立する。色調は暗橙色を基調とし、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、遺存度は2/3程である。

土師器鉢形土器（4）

現器高9.5cm・推定口径25.8cm。全体にヘルメット形を呈する。口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部は外反する。色調は黄褐色を基調とし、外面には黒斑が付される。胎土には金雲母・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内外面はヘラナデが施される。住居西側の床面上からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1/6程遺存する。

土師器甕形土器（5～10）

5～7・9は長甕、8・10は丸甕である。

5は現器高7.1cm・推定口径19.5cm。口縁部に最大径をもち、口縁部は大きく外反する。色調は明橙色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内外面はヘラナデ（スリップか）が施される。南壁近くの柱穴すぐ北側の床面上からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/5程遺存する。

6は現器高11.3cm・推定口径20.0cm。器形は1の土器に類似するが、口縁部と胴部との境には段をもち、段は口縁部横ナデにより作出されたものである。色調は外面が暗橙色、内面は黒斑により黒色を呈する。胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内外面はヘラナデ（スリップか）が施される。覆土中からの出土で、口縁部から胴部中位にかけて1/3程遺存する。

7は現器高27.5cm・推定口径20.8cm。口縁部に最大径をもち、口縁部が弓状に外反する。口縁部と胴部との境はスムーズで段をもたない。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・金雲母を僅かに含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後胴部下半を中心に弱いヘラナデが施される。南壁近くの柱穴すぐ北側の床面上からの出土で、口縁部から胴部下半にかけて1/2程遺存する。

8は現器高6.3cm・推定口径21.7cm。口縁部は大きく弓状に外反し、口唇部は丸く仕上げられている。色調は明橙色を呈し、胎土には白色粒子・砂粒を僅かに含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデが施される。外面はヨコナデ以下未調整か。南壁近くの柱穴すぐ北側の床面上からの出土で、口縁部から胴部上半にかけて1/5程遺存する。

9は現器高4.5cm・底径6.7cm。長甕の底部で、色調は内面が灰褐色、外面が暗橙色を呈する。胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデが施される。覆土中からの出土で、底部のみ4/5程遺存する。

10は現器高4.5cm・底径9.0cm。丸甕の底部で、色調は淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。覆土中からの出土で、底部のみ2/3程遺存する。

須恵器甕形土器（11）

胴部の小破片で、色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒・白色粒子を含む。内面はナデが施され、外面には平行叩き目痕が残る。覆土中からの出土である。

土製品（12）

土錘である。長さ4.5cm・最大径0.8cm・穿孔径0.25cm・重さ2.6g。

石製品 (13)

用途不明の製品である。全面が細かい単位で磨かれているが、先端部はやや尖っている。断面は円形である。長さ3.0cm・径0.5cm・重さ2.2g。

86号住居跡 (第9図)

〔住居構造〕 一部分しか確認できなかったため、詳細は不明である。(平面形) 不明。(規模) 不明。(壁高) 40cmを前後を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できた範囲では、すべて巡らされていた。上幅20cm前後・下幅7~12cm・深さ6~16cmを測る。(覆土) 上層はローム粒子を含む黒褐色土、下層はローム粒子を多く、焼土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

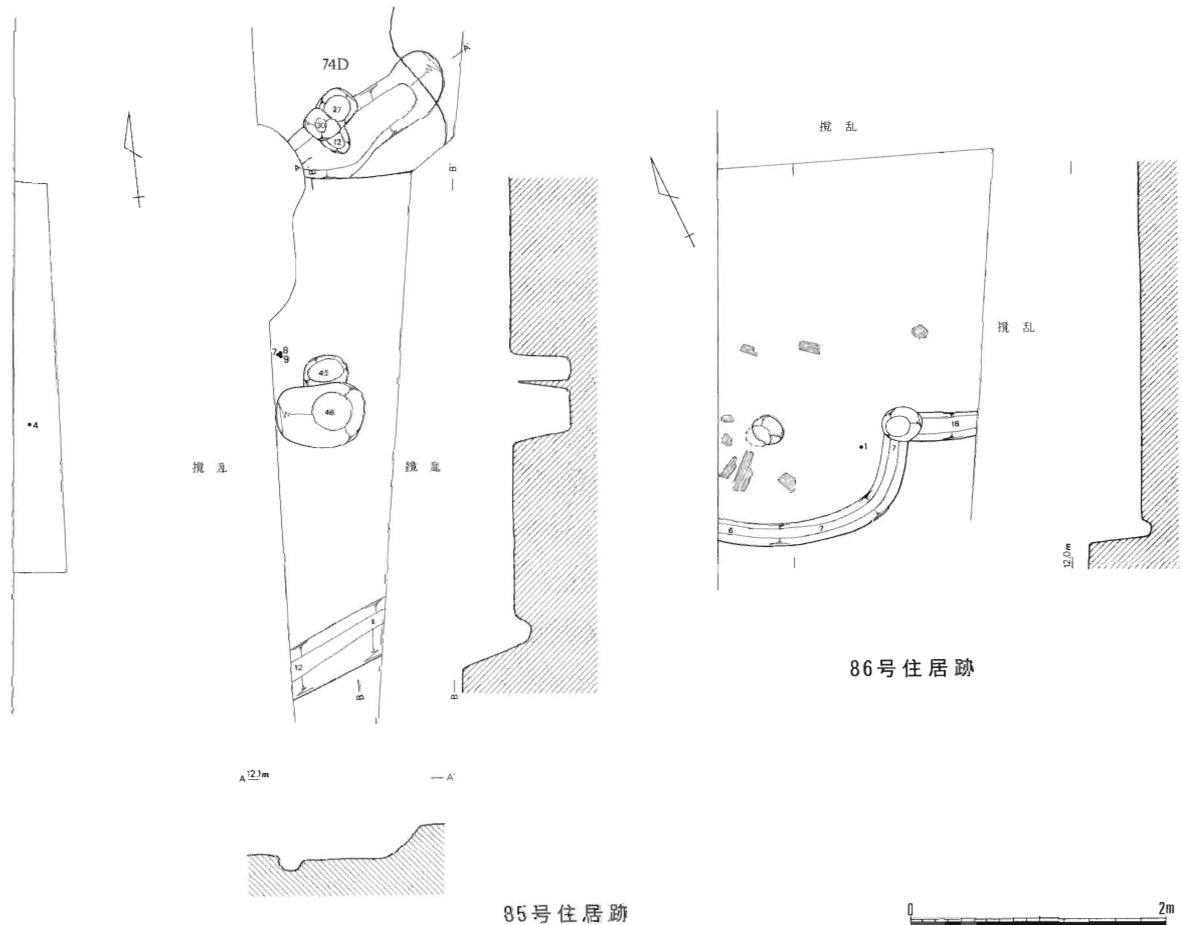
〔遺物〕 坏・甕形土器とミニチュア土器が出土した。

〔時期〕 古墳時代後期(7世紀前葉)。

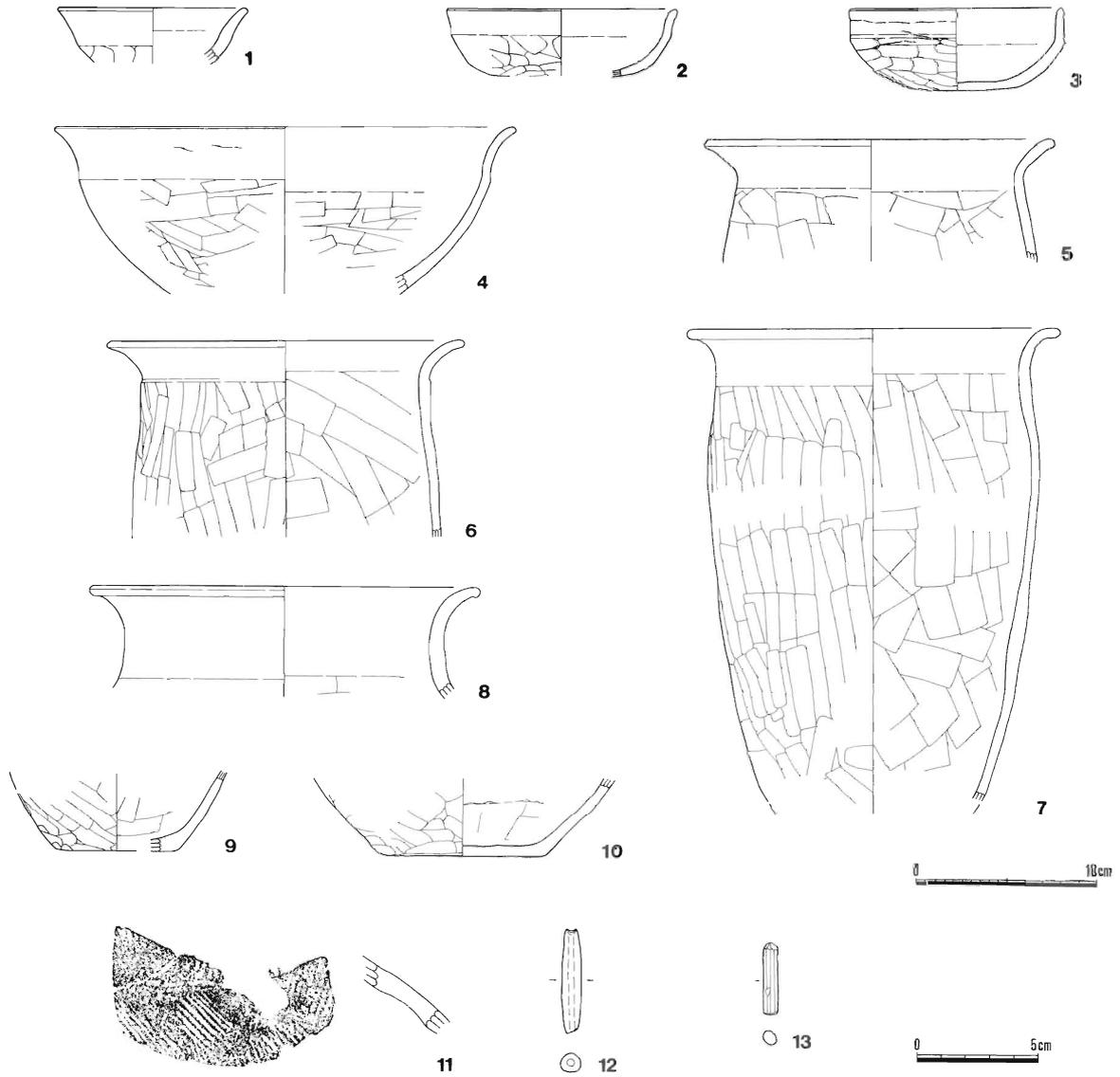
〔所見〕 床面上より炭化材が検出されたことから、焼失住居と思われる。

86号住居跡出土遺物 (第11図)

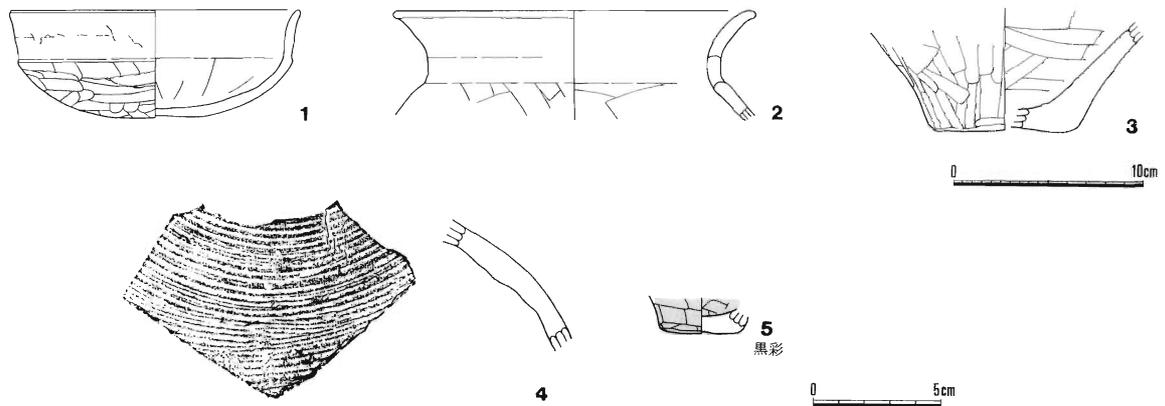
1は土師器坏形土器である。器高5.8cm・口径15.8cm。無彩の大型有段坏で、口縁部と底部の境に段をもち、口縁部は外傾する。色調は全体に暗橙色を基調とするが、外面底部の一部に黒斑が残る。胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は横ヘラ削り後ナデが施される。住居南側のくびれ部分近くの床面上からの出土で、遺存度は4/5程である。



第9図 85・86号住居跡 (1/60)



第10图 85号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)



第11图 86号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

2・3は土師器甕形土器である。2は中型の丸甕の口縁部から胴部上半にかけての破片である。色調は明橙色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色粒子・金雲母を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内外面はヘラナデが施される。覆土中からの出土である。

3は現器高6.7cm・底径7.8cm。器厚が比較的に分厚く、胴部下半以下スリムな器形を呈する。色調は明橙色を基調とし、胎土には砂粒・茶褐色粒子を含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後ヘラナデが施される。覆土中からの出土で、胴部下半から底部にかけて2/3程遺存する。

4は須恵器甕形土器である。胴部上半の破片で、色調は暗灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。内面はナデ調整、外面は粗いハケ目状の回転カキ目調整が施される。覆土中からの出土である。

5はミニチュア土器である。現器高1.5cm・底径3.2cm。体部以上を欠く。色調は内外面黒色を呈することから、黒彩が施されているものと思われる。胎土には白色粒子を僅かに含む。

第3節 中・近世の遺構・遺物

12号溝跡（第12図）

〔構造〕ごく一部分しか確認できなかったため、詳細は不明である。N-14°-Eの走行角度をもち、断面は葉研状を呈する。斜面に沿って多数のピットが確認されたが、本遺構に付属する可能性が大きい。（深さ）地表面から3.7m前後を測る。（覆土）37層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。なお、1～5層については、ロームブロックを充填する土層で、6層以下の土層とは断絶が見られる。

〔遺物〕陶・磁器の破片と寛永通宝1点などが出土した。

〔時期〕遺物の時期は、14世紀後半・16世紀終末段階・18世紀から19世紀前半の3段階の区分ができる。

〔所見〕本遺構から出土した遺物をみると、特に16世紀終末段階からの遺物が増加していることが分かる。このことから、この時期以降に大堀の機能が終了したものと考えるのが自然であろう。さらに18世紀から19世紀前半に比定される最新の遺物については、覆土1～6層中のローム充填土からの出土に限定されることから、7層以下の土層とは違い、時期を隔てて人為的に埋め戻された可能性がある。7層以下の土層については、自然埋没したものと推測される。本遺構は、柏城の本丸袖曲輪を圍繞する大堀と考えられる。

12号溝跡出土遺物（第13図、図版5-3・4、図版6）

磁器（図版5-4-1～5）

1は肥前系の染付碗の底部小破片である。文様は外面に草花文が描かれている。高台内には銘あり。時期は18世紀代であろう。

2は肥前系のくらわんか手染付碗である。器高6.0cm・推定口径10.6cm・底径4.4cm。文様は外面に草花文（松竹梅）が描かれている。時期は18世紀中～後半である。

3は肥前系の染付輪花鉢である。現器高7.7cm・推定口径19.0cm。内面には草花文、外面には唐草文が描かれている。時期は18世紀中頃であろう。

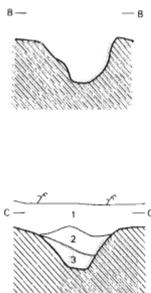
4は肥前系の白磁製の水滴である。形づくり成形による上面には、形による文様をもつが、文様については不詳である。

5は磁製の色絵小壺である。色彩の剥落が著しく詳細は不明である。文様は小破片のため、特定できないが、植物文であろう。

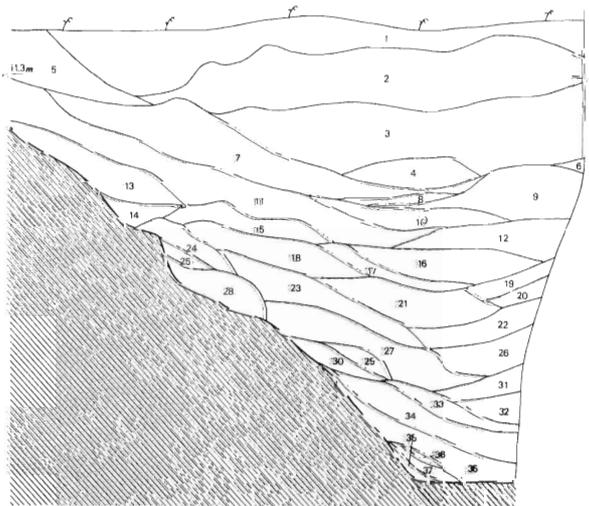


- 1層 表土。
- 2層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黄褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、黒色土を含む黄褐色土。
- 4層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗黄褐色土。
- 5層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗黄褐色土。
- 6層 ローム粒子を多く含む暗黄褐色土。
- 7層 ローム粒子を含む暗茶褐色土。
- 8層 ロームブロック。
- 9層 ローム粒子を多く含む明茶褐色土。
- 10層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 11層 ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
- 12層 ローム粒子を多く、小石を含む明茶褐色土。
- 13層 ローム粒子を含む暗茶褐色土。
- 14層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 15層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む茶褐色土。
- 16層 ローム粒子を含む暗茶褐色土。
- 17層 ローム粒子を多く、炭化物粒子を含む茶褐色土。
- 18層 ローム粒子を含む暗茶褐色土。
- 19層 ローム粒子を含む暗茶褐色土。
- 20層 ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。
- 21層 小石を多く、ローム粒子を含む暗茶褐色土。
- 22層 ローム粒子を僅かに含む暗褐色土。
- 23層 ローム粒子を多く含む明茶褐色土。
- 24層 ローム粒子を多く含む明茶褐色土。
- 25層 ローム粒子を含む黒褐色土。
- 26層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 27層 ローム粒子を含む茶褐色土。
- 28層 ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含む茶褐色土。
- 29層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黄褐色土。
- 30層 ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 31層 ローム小ブロックを多く含む黒色土。
- 32層 ローム粒子を含む黒色土。
- 33層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
- 34層 ローム粒子を含む黒褐色土。
- 35層 ローム粒子を多く含む暗黄褐色土。
- 36層 ローム粒子を含む黒褐色土。
- 37層 ローム粒子を多く含む暗黄褐色土。
- 38層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。

ローム
充填



- 1層 表土。
- 2層 ロームブロックを多く含む暗褐色土。
- 3層 ロームブロック。



第12図 12・13号溝跡 (1/60)

陶器（図版 5-4-6～12、図版 6-13～22）

6・7は京焼風の灰釉碗の破片である。7は器高4.6cm・推定口径8.8cm・底径3.4cm。見込みに胎土目ピンによるハリ支え痕が2ヵ所残る。時期は18世紀後～19世紀前半。

8は瀬戸・美濃系の灰釉皿の口縁部小破片である。時期は17世紀代であろう。

9は瀬戸・美濃系の志野織部皿である。内面に鉄絵（草花文）が描かれている。時期は17世紀前半。

10は瀬戸・美濃系の高台付鉢。内面には灰釉が施され、淡い緑斑（タンパン）と貫入が見られる。

11は瀬戸・美濃系の鉛釉徳利である。時期は18世紀後～19世紀前半。

12は唐津三島手の大鉢の口縁部小破片である。時期は17世紀後半である。

13・15・16は瀬戸の鉄釉播鉢で、13・15は受口状の複合口縁を呈し、13・16の内面には12本1単位の櫛目が施される。16の底部には回転糸切り痕が残る。13は17世紀後半、15は18～19世紀、16は18世紀代。

14は信楽系の鉄釉播鉢の口縁部破片である。口縁部は複合口縁を呈し、内面には7本1単位の櫛目が施される。時期は17世紀である。

17は瀬戸の鉄釉播鉢の胴部破片である。内面にはハケ目状の細かい目の櫛目が左回りに施される。時期は18世紀代であろう。

18は常滑甕の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部は複合口縁を呈し、頸部は大きく弓状に外反する。外面には薄い緑色の自然釉がかかっている。内外面横ナデが施される。時期は14世紀後半。

19は常滑大甕の底部破片である。底部付近には押捺痕が観察される。捏ね鉢に転用か。中世の所産。

20は在地系とされる甕の胴部上半の破片である。色調は暗茶褐色を基調とし、内外面ていねいに横ナデが施される。時期は14世紀後半である。

21は常滑甕の胴部小破片である。色調は灰褐色を呈し、外面には「×」印が刻印されている。内面には指頭押捺痕が顕著に観察される。時期は14世紀後半である。

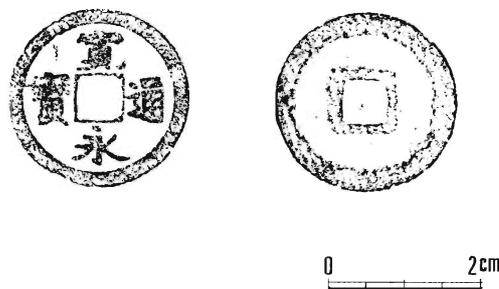
22は常滑大甕の胴部破片である。内外面はナデられているが、外面はハケ状工具による調整が施される。時期は14世紀後半である。

瓦器（図版 6-23～25）

ほうろくである。23は器高6.0cm、24は器高5.3cm。色調は全体に黒色を基調とし、胎土には白色粒子・茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む。25は器高4.8cm・推定口径23.2cm・推定底径21.2cm。内耳あり。色調は外面全体が煤け黒色、内面は暗灰褐色を呈している。時期は16世紀後半であろう。

銅銭（第13図）

寛永通宝である。外径2.4cm・重さ2.7g。



第13図 12号溝跡出土古銭（1/1）

13号溝跡（第12図）

〔構造〕 12号溝跡の西側に位置し、12号溝跡と同じ走行角度をもつ。上幅55～65cm・下幅16～20cm・深さ34～38cmを測る。（覆土）ロームブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 不明。

〔所見〕 遺物が出土しなかったことから、時期を比定できなかったが、12号溝跡のすぐ西側に併行して存在することから、12号溝跡に関連する遺構と考えられる。

第4節 遺構外出土遺物

縄文時代から中・近世にかけての遺物が検出された。時代的には縄文時代早・前・中・後期、弥生時代後期、古墳時代後期、中・近世に比定され、第1～10群に分類された（第14・15図、図版7）。

第1群 縄文時代早期後葉の条痕文系土器（第14図1～4）

1は全体が摩耗しているため、不明瞭であるが、無紋土器で、器面には軽い擦痕文が施されている。口縁部は波状口縁を呈し、口唇上には絡条体圧痕文が観察できる。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には砂粒・黄褐色粒子・繊維を含む。子母口式土器と思われる。

2は外面に擦痕がみられ、内面に貝殻条痕文が施される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、繊維を含む。

3・4は外面に貝殻条痕文が施される。色調は明茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、小石（5mm程）・繊維を含む。3は色調・胎土ともに2と同様であることから同一個体の可能性がある。

第2群 縄文時代前期前葉～中葉の土器（第14図5～8）

5は波状口縁の一部である。外面は無紋だが、内面には貝殻背圧痕文が施される。色調は明茶褐色を基調とする。胎土には砂粒・小石（3mm程）が多くみられ、繊維を僅かに含む。

6はRLの単節縄文を地文に横位の貝殻条痕文が施されている。色調は外面が暗黄褐色、内面は黒色を呈し、胎土には砂粒・小石（2mm程）・赤褐色粒子・繊維を含む。

7は口縁部の一部である。外面にRの無節縄文が施されている。色調は暗茶褐色を呈し、内面は黒斑が付される。胎土には砂粒・繊維を含む。

8は棒状工具による平行沈線内に半截竹管による刻み目が施され、その上にボタン状貼付文が付されている。色調は明茶褐色を呈し、胎土には砂粒・黄褐色粒子・繊維を含む。

5・6は花積下層式土器、8は関山Ⅰ式土器、7は黒浜式土器と考えられる。

第3群 縄文時代前期後葉の土器（第14図9～11）

9は外面に半截竹管による平行沈線が施されている。色調は外面が明茶褐色、内面は赤褐色を呈し、胎土には砂粒・黄褐色粒子を多く含む。

10は外面に縦位羽状の竹管文が施されている。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

11は貝殻腹縁による連続圧痕文が施されている。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒・白色粒子を含む。

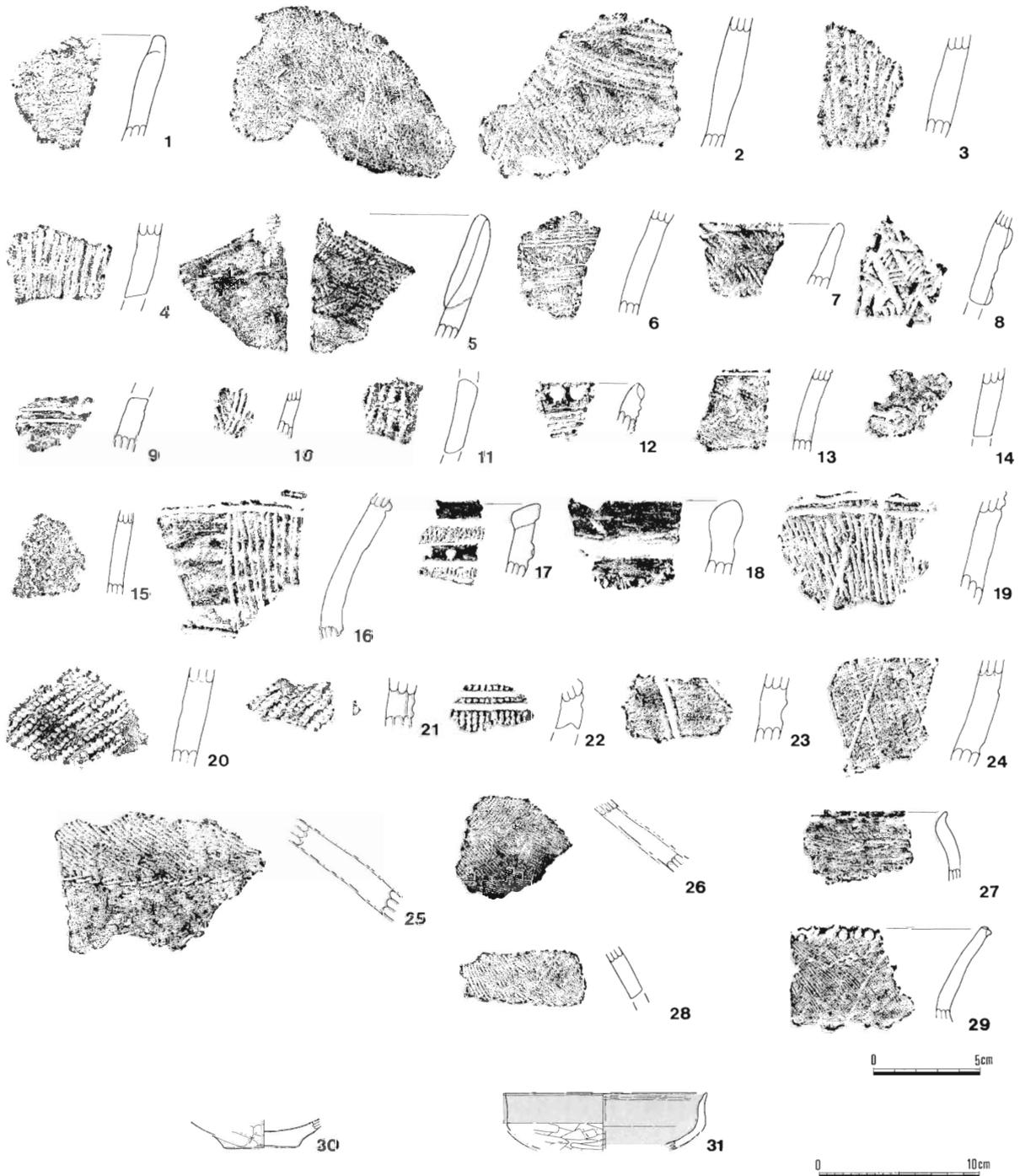
9は諸磯b式土器、10は諸磯c式土器、11は浮島・興津式土器と思われる。

第4群 縄文中期前葉の土器（第14図12～17）

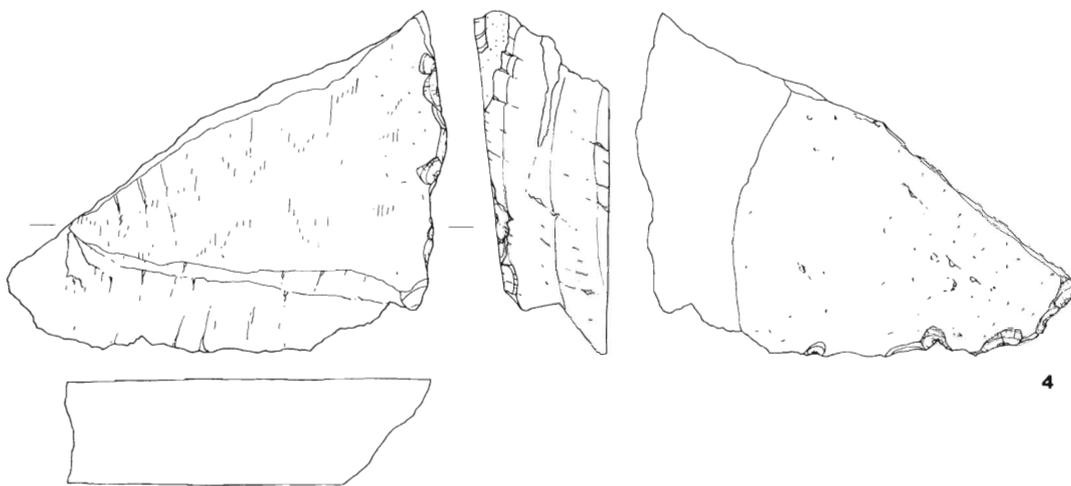
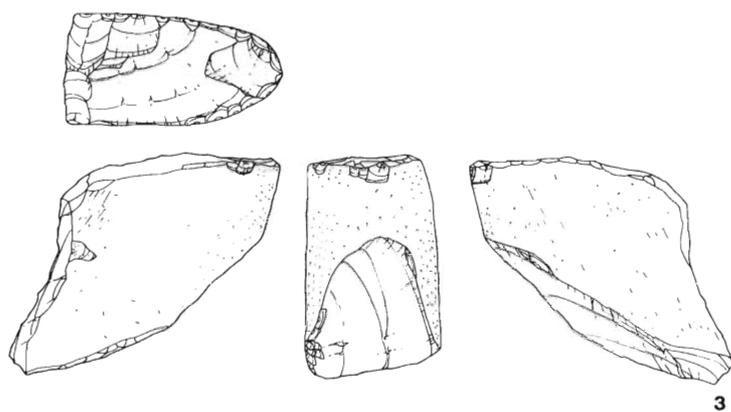
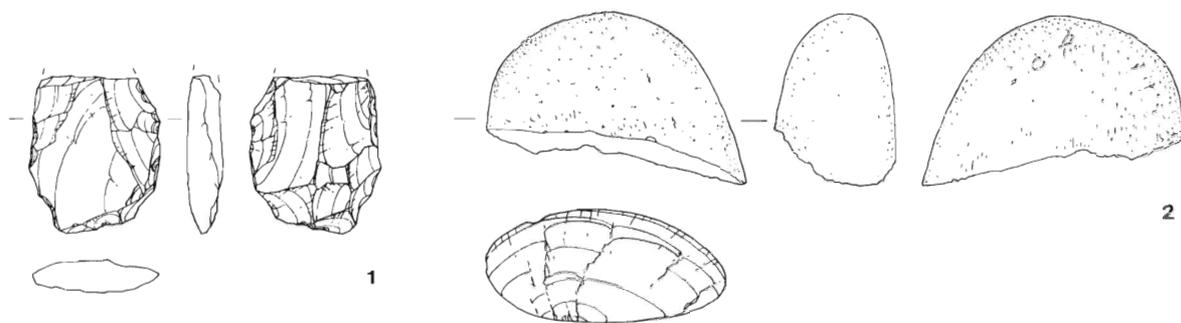
12は口唇部外面に刻み目が付され、その直下には半截竹管により横位に集合沈線が施されている。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒・黒色の鉱物(角閃石か)を多く含む。

13~15は結節文が13・14に横位、15に縦位に施されるもので、13は地文としてR Lの単節斜縄文がみられ、上部に横位区画の沈線が施されている。色調は13・15が暗赤褐色、14は外面が暗黄褐色、内面には黒班が付す。胎土にはいずれも砂粒・黄褐色粒子を多く含み、15には金雲母が含まれる。

16は半截竹管により上下に横位区画がなされ、その間を縦位の集合沈線が施されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒・金雲母を多く含む。



第14図 遺構外出土遺物 (1/3・1/4)



第15図 遺構外出土石器 (1/3)

17は口縁部の破片で、口唇付近の内面下端は突出し複合口縁状になっている。地文にはLの捺糸文が施され、その上には刻みをもつ隆帯が横位に貼り付けられている。色調は暗赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、黄褐色・赤褐色粒子を含む。

12～16はいずれも五領ヶ台式、17は五領ヶ台式併行の土器と考えられる。

第5群 縄文時代中期後葉の土器（第14図18～22）

18は口縁部の破片で、肥大した口縁直下に横位の幅広沈線が施されている。地文は縦位の条線文であろう。色調は暗赤褐色を呈し、胎土には砂粒・小石（2mm程）を僅かに含む。

19・22はLの捺糸文を地文に2本の横位沈線文が施されている。19は撚りが粗い。色調は19が暗茶褐色、22が黄褐色を呈し、胎土には砂粒・黄褐色粒子を多く含む。

20・21はRLの単節斜縄文を地文に沈線による懸垂文が施される。色調は20が暗黄褐色、21が暗茶褐色を呈し、胎土はいずれも砂粒を多く、小石（2mm程）を含む。

19・22は加曾利EⅠ式、18・20・21は加曾利EⅡ～EⅢと考えられる。

第6群 縄文時代後期の土器（第14図23・24）

23は2本の沈線文により曲線的な文様が描かれている。色調は黒褐色を呈し、胎土には砂粒・小石（2～3mm）を含む。

24は沈線による格子目文が描かれている。色調は黒褐色を呈し、胎土には砂粒・金雲母・小石（1～2mm程）を含む。

23は堀之内Ⅰ式土器、24は粗製土器である。

第7群 縄文時代の石器（第15図1～4）

1は打製石斧、2は磨石、3・4は石皿である（第4表参照）。

第8群 弥生時代後期の土器（第14図25～30）

25・26・30は壺形土器で、25・26は肩部小破片、30は底部破片である。25は端末に結節を伴うRの無節斜縄文が施され、無文部は赤彩される。胎土には黄褐色粒子・小石（3mm程）を多く含む。26は単節斜縄文により羽状に施され、無文部は赤彩される。胎土には黄褐色粒子を含む。30は現器高1.8cm・底径4.6cm。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を多く、小石（3mm程）を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。

27は高杯の口縁部小破片であろうか。口縁部が短く外反し、体部に膨らみをもつ。胎土には黄褐色粒子を含み、全面赤彩される。内外面にヘラ磨き調整が施されるが、外面にはハケ目痕が顕著に残る。

28・29は甕形土器である。28は胴部上半の小破片で、内面はヘラナデ、外面は斜位のハケ目調整が施される。色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色・橙色粒子を含む。29は口縁部小破片で、口唇部にはハケ状工具による刻み目が付される。色調は外面が暗茶褐色、内面が明茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はハケ目調整後ヘラ磨き調整、外面は斜位のハケ目調整が施される。

第9群 古墳時代後期の土器（第14図31）

31は現器高3.6cm、推定口径12.6cm。いわゆる比企型杯である。口縁部と底部との境は稜をもち、口唇部内面には幅2mm程の沈線がまわる。内面及び外面口縁部は赤彩される。赤彩以外での色調は暗赤褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、以下外面はヘラ削りが施される。時期は7世紀前～中葉に比定される。

第10群 中・近世の遺物（図版7-1-1～11）

(単位：cm・g)

図版番号	器種	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	観 察 所 見
第15図1	打製石斧	ホルンフェルス	6.3	5.1	1.4	65	撥型で刃部加工、整形加工、素材剥離ともハードハンマーによる直接打撃であり、素材剥片は横長である。
第15図2	磨石	礫岩	6.8	10.2	4.7	354	擦痕が表裏に認められ、形状は楕円形を呈すると思われる。
第15図3	石皿	砂岩	9.0	10.4	5.3	524	石皿分割後再利用されている。分割面周辺はマイクロフレーキングが多数認められる。
第15図4	石皿	玄武岩	13.5	17.1	5.8	966	硬い石材で節理面に擦痕が認められ、石皿として用いられたものと思われる。

第4表 遺構外出土の石器観察表

磁器（1～3）

1は猪口、2は蓋の小破片である。1の外面には「有色」の2文字のみ確認、吉祥句であろう。2は外面に吉祥文？、内面は口縁部直下に七宝つなぎ文、見込みには二重圏線が描かれる。時期は19世紀。

3は肥前系のくらわんか手染付碗である。文様は草花文。時期は18世紀後半である。

陶器（4～8）

4は緑釉と白濁釉掛け分けの筒形鉢である。産地不明。口縁部に釉の剥離が観察されることから、灰タキで使用されたものと考えられる。時期は19世紀以降であろう。

5は瀬戸の灰釉大鉢の底部破片である。時期は19世紀であろう。

6は瀬戸製の鉄釉天目茶碗である。時期は17世紀であろう。

7・8は瀬戸・美濃系の灯明受皿である。平底のもので、内面及び口縁部外面には鉄釉がかけられている。時期は18世紀後半から19世紀前半である。

瓦器（9・10）

9・10はほうろくの破片である。9は口縁部で、色調は黒褐色を呈し、胎土には白色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。10は9に比べ、口縁部が短く、扁平なものである。色調は内面が橙色、外面が黒褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子を含む。

土製品（11）

いわゆる泥面子である。中心部に径6.0cmの穿孔が認められる。推定外径3.7cm・重さ9.6g。上面には草花文が形押しされている。色調は明橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。遺存度は1/2弱である。

第3章 城山遺跡第16地点の調査

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経過

平成4年6月、(株)藤和不動産 代表取締役 笠原緊三氏から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町3丁目2599-7番地（面積1,556㎡）内に共同住宅建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡（コード11228-003）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 当該地は、平成2年に発掘調査を実施した第12地点に隣接するため、遺跡の存在する可能性があること。
2. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
3. 上記2の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

その後の事前協議で、教育委員会は、現状保存は不可能であるという(株)藤和不動産からの要望を重視することにより、上記2の確認調査を実施せずに当初から、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

9月28日、(株)藤和不動産から埋蔵文化財発掘届が提出され、教育委員会では発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を幹旋した。遺跡調査会ではこれを受け、10月1日、(株)藤和不動産と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、10月2日から遺跡調査会を主体として発掘調査が実施された。なお、文化庁通知番号は、委保第5の1620号 平成5年3月16日付である。

(2) 発掘調査の経過

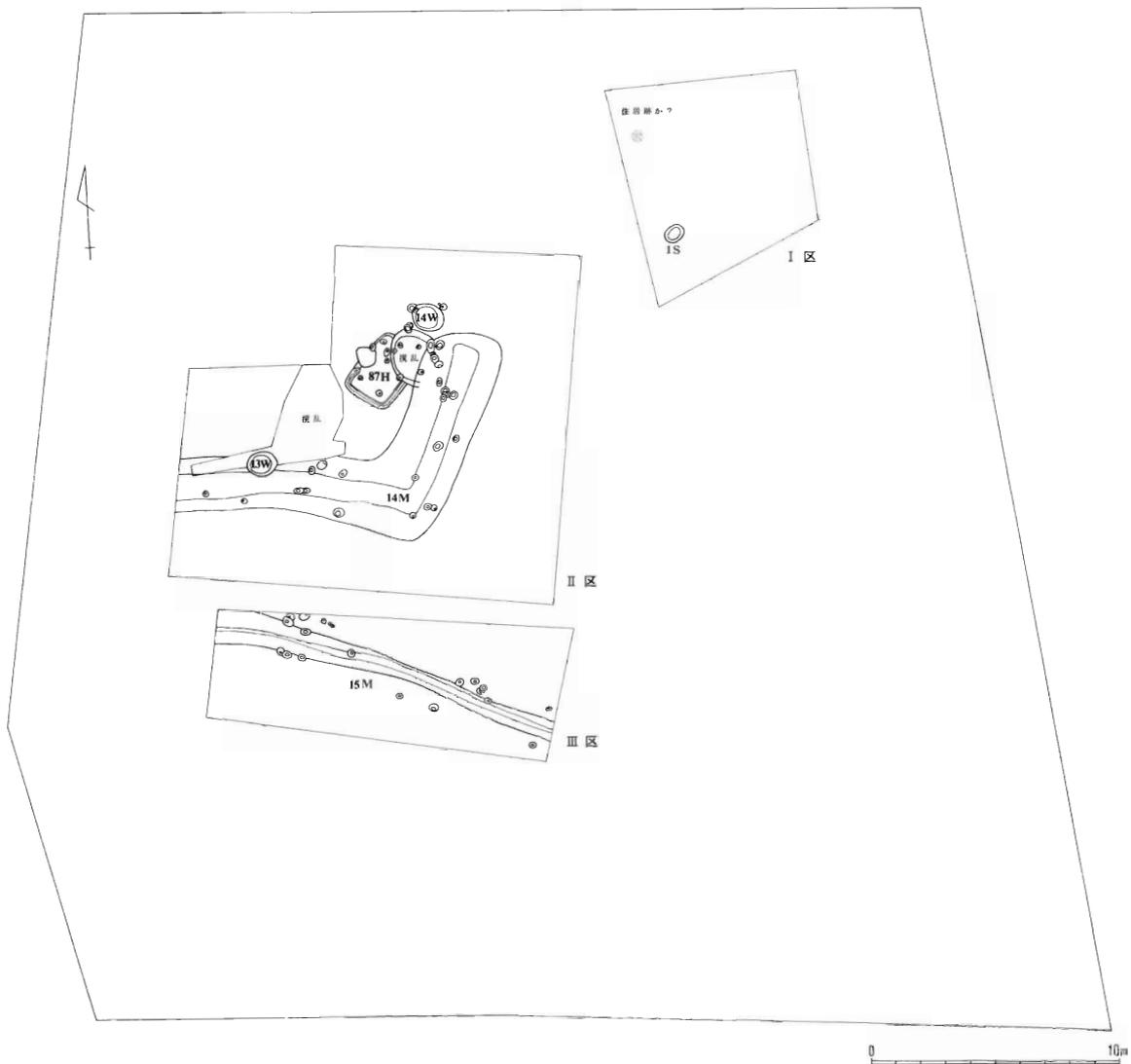
10月2日 重機による表土剥ぎ及び遺構確認作業を開始する。本地点は、東方向にゆるやかに下がる斜面地である。まず、標高の高い調査区北西部から表土を剥ぎ、徐々に標高の低い調査区北東部に遺構確認作業を行った。その結果、調査区域内には黒色土を基調とする遺物包含層・溝跡等の遺構が存在することが判明した。残土置場は当面、調査区南端部に当てることとした。

8日 表土剥ぎ作業に併行して、人員導入による発掘調査を開始した。まず、調査区の北東部をI区とし、遺物が比較的によく出土する部分にセクションを設定し、掘り下げることとした。遺物としては、古墳時代後期の土器を中心に縄文土器が出土している。

12日 調査区のほぼ中央付近に試掘トレンチを1本設定し、重機を使用し、表土を剥ぎ、遺構及び土層の確認作業を行った。その結果、遺構は確認されなかったが、遺物を僅かに含む

遺物包含層が確認された。その後、表土剥ぎ及び遺物包含層は、僅かずつ重機により剥ぐ予定とした。

- 10月13日 この期間は雨天続きであったため、ほとんど作業にならなかった。
～21日 I区の精査。
22日 午前中にI区の写真撮影のための掃除、午後から写真撮影、その後実測を行い、遺物を取り上げる。
23～29日 I区の実測及び遺物取り上げ、さらに掘り下げる。
10月30日 I区の南西部分をII区とし、遺物の実測及び遺物取り上げ開始。
11月3日
4日 II区からカマドをもつ住居跡(87H)が検出された。時期については、出土遺物が少なかつたため、特定は難しい。また、87Hの東側には広い範囲で、黒色土層が確認された。斜面地による堆積層であるものか。とりあえず掘り下げることにする。
5日 87Hの掘りほぼ終了。87Hの東側掘り下げ。
6日 87Hの東側については、溝状遺構の先端部であることが判明した、遺構名を14Mとする。



第16図 遺構分布図 (1/300)

断面は葉研状を呈している。遺物には常滑甕・志野皿・肥前系磁器碗などが出土していることから、時代的には中・近世に比定される。

- 7～17日 14Mの精査。北側にかけてほぼ直角に屈曲し、鍵の手状を呈していることが判明した。14Mの北半部から新たに井戸跡が検出された。13Wとし、精査開始。
- 18日 87H・13Wの写真撮影。
- 19日 13W実測。20・21日は雨天のため中止。
- 24日 午前中、14Mの写真撮影のためのそうじ、午後から写真撮影を行う。その後、Ⅱ区の南部分をⅢ区とし、精査を開始する。
- 25日 14Mの実測開始。Ⅲ区の精査。
- 26日 Ⅲ区の精査。
- 27日 14M・87Hの実測。
- 30日 Ⅲ区の精査中に新たに溝跡を検出する。15Mとし、精査開始。断面形はV字形を呈する。
- 12月1日 15Mの精査。Ⅱ区の精査再開。雨天にて3時で中止。
- 2日 Ⅱ区から新たに井戸跡検出。14Wとし、精査開始。Ⅰ区の精査を再開する。
- 3日 15Mの精査。Ⅰ区から新たに集石1基を確認。1Sとする。
- 4日 15Mの精査。14W実測。
- 5日 15Mの精査。
- 7日 Ⅰ区の精査。1Sの写真・実測。15Mの精査と写真撮影。
- 8日 Ⅰ区の精査。1Sの精査。
- 9日 Ⅰ区の精査。1Sの実測終了。新たに古墳時代後期の土器と土製支脚が出土した。周囲には焼土の広がりが見られる。住居跡の可能性はある。15Mの実測。
- 10日 15Mの実測終了。Ⅰ区の精査。
- 11日 Ⅰ区の精査。古墳時代後期の土器の出土状態の写真撮影終了。午後4時には調査を完了し、その後器材の搬出作業を終了する。
- 12日 重機による埋戻し作業完了。

第2節 Ⅰ区から検出された遺構・遺物

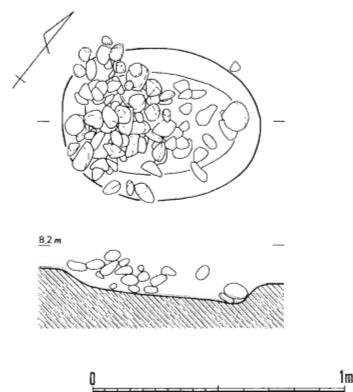
(1) 縄文時代の遺構・遺物

1号集石 (第17図)

〔構造〕長径78cm・短径62cm・深さ10cm前後の楕円形の土坑を伴う。坑底は東側が深くなっている。(礫の状態)礫は比較的に土坑の西側から集中して検出されている。

〔遺物〕記録では、土器が数点検出されているとあるが、所在不明である。

〔時期〕縄文時代。



第17図 1号集石 (1/30)

(2) 古墳・平安時代の遺構・遺物 (第18図)

調査区内から土器・土製品・石製品が検出されている。特に、北西端からは、完形に近い土師器甕形土器(3)と土製支脚(6)が出土し、その周囲からは焼土が検出されている。調査時においては、住居跡として取り扱わなかったが、焼土検出範囲はカマド部分に相当し、これらは住居跡とその出土遺物である可能性がある。住居跡であると考えた場合、以下の遺物で共伴するものは、1～7で、時期は7世紀前葉に比定される。

土師器甕形土器(1～4)

1は長甕、2～4は丸甕である。

1は現器高13.3cm・推定口径19.1cm。口縁部は弓状を呈し、胴部は長胴化が完成している。色調は淡茶褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後、ナデ(スリップか)が施される。口縁部から胴部中位にかけて、1/2程遺存する。

2は現器高4.5cm・底径7.2cm。底部には木葉痕が観察される。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・黒色粒子を含む。

3は器高35.1cm・口径22.1cm・底径8.2cm。大型のもので、胴部中位に最大径をもち、口縁部は弓状に大きく外反する。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子・金雲母・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面は横ナデ、外面は斜方向(左上がり)にヘラ削りが施される。ほぼ完形品である。

4は現器高22.7cm・底径9.2cm。3の土器同様に大型のもので、胴部中位に最大径をもつ。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く、黄褐色粒子・金雲母・小石を含む。内面は横ナデ、外面はヘラ削り後、胴部中位を中心にナデが施される。胴部から底部にかけて、1/5程遺存する。

土師器甌形土器(5)

器高28.6cm・口径25.3cm・底径7.0cm。口縁部は複合口縁を呈し、胴部から底部にかけてはゆるやかにすぼまっている。色調は暗茶褐色を基調とし、胎土には砂粒を多く、黄褐色粒子・茶褐色粒子・小石を含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後、ナデ(スリップか)が施される。また、口縁部外面の複合部には横ナデ前の指頭押捺による成形痕が観察される。遺存度は2/3程である。

土製品(6)

支脚である。現全長15.9cm・最大幅8.3cm。上底径4.7cm。上底面に比べ、下底面が広いが、ほぼ円柱形を呈する大型品である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子を含む。

石製品(7・8)

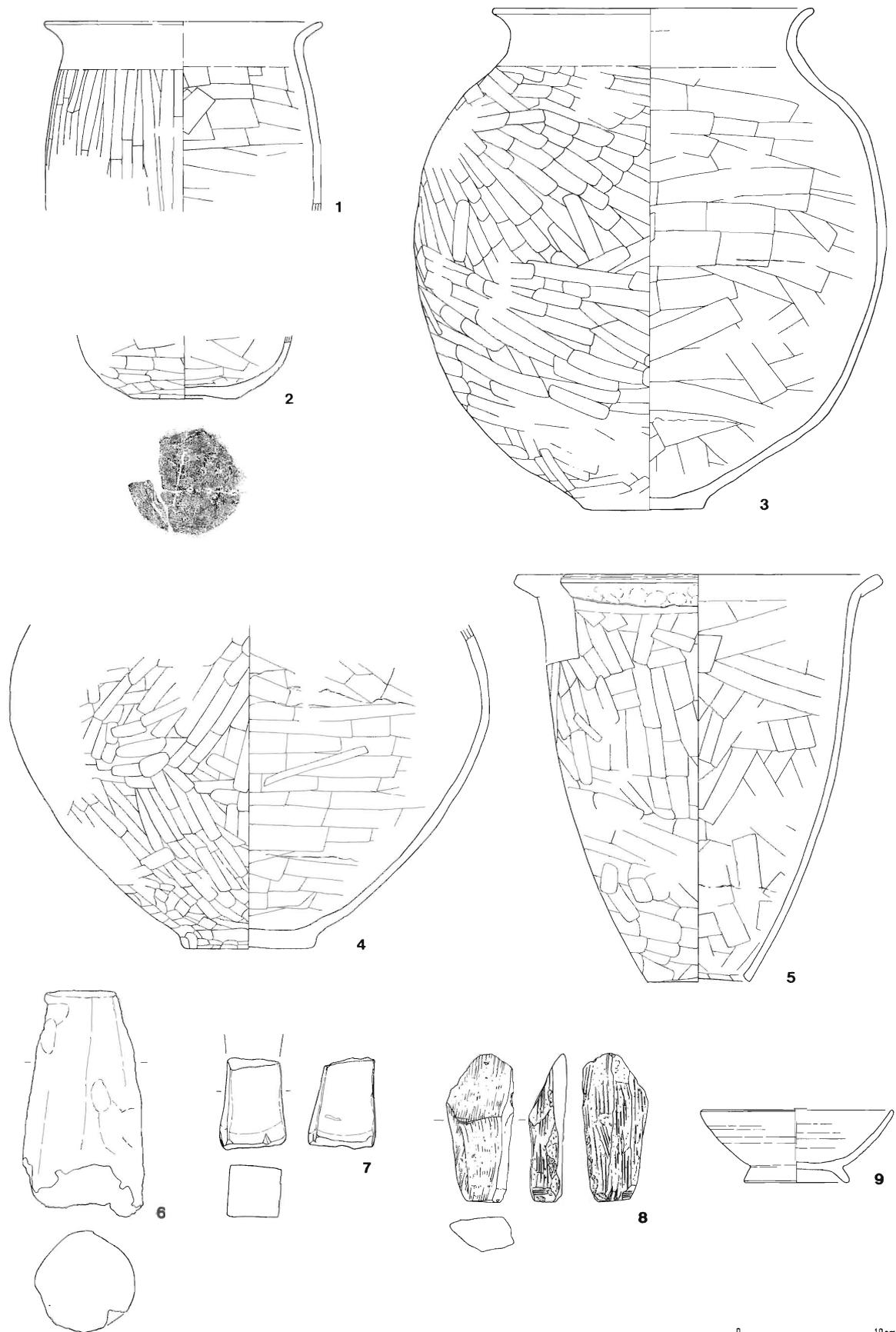
砥石である。

7は現全長6.5cm・最大幅4.6cm・重量196g。基部以外の4面は使用面である。石質は砂岩。

8は全長10.3cm・最大幅4.6cm・重量112.6g。使用面は表面のみである。裏面及び右側面に見られる細線は成形痕であろう。石質は凝灰岩。

須恵器壠形土器(9)

酸化炎焼成の須恵器壠形土器である。現器高5.1cm・推定口径13.4cm・底径7.3cm。ロクロ回転は右回転。色調は明橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。遺存度は1/2弱である。時期は平安時代(10世紀前葉)の所産であろう。



第18図 I区出土の古墳・平安時代の遺物 (1/4)

第3節 II区から検出された遺構・遺物

(1) 古墳・平安時代の遺構・遺物

1. 住居跡

87号住居跡 (第19図)

〔住居構造〕住居の東側は、攪乱により壊されている。(平面形)長方形。(規模)2.96×2.06m。(壁高)20～55cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)北コーナー付近を除いて確認された。上幅16～22cm・6～10cm・2～5cmを測る。(床面)カマドの前面に硬化した面が確認された。(カマド)北西壁のほぼ中央に位置する。主軸方位はN-47°-W、長さ99cm・幅95cm・壁への掘り込み45cmを測る。袖部はロームを残さず、黄褐色粘土により構築されていたと思われる。覆土は上層が粘土粒子・粘土ブロックを多く、焼土粒子を含む暗黄褐色土、中層が粘土粒子・焼土粒子を含む暗茶褐色土、下層は焼土粒子・粘土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。(柱穴)検出された柱穴は、後世のものと思われる。(覆土)上層はローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土、下層は焼土粒子・炭化物粒子を含む黒色土を基調とする。

〔遺物〕土器の小破片が数点出土したのみである。

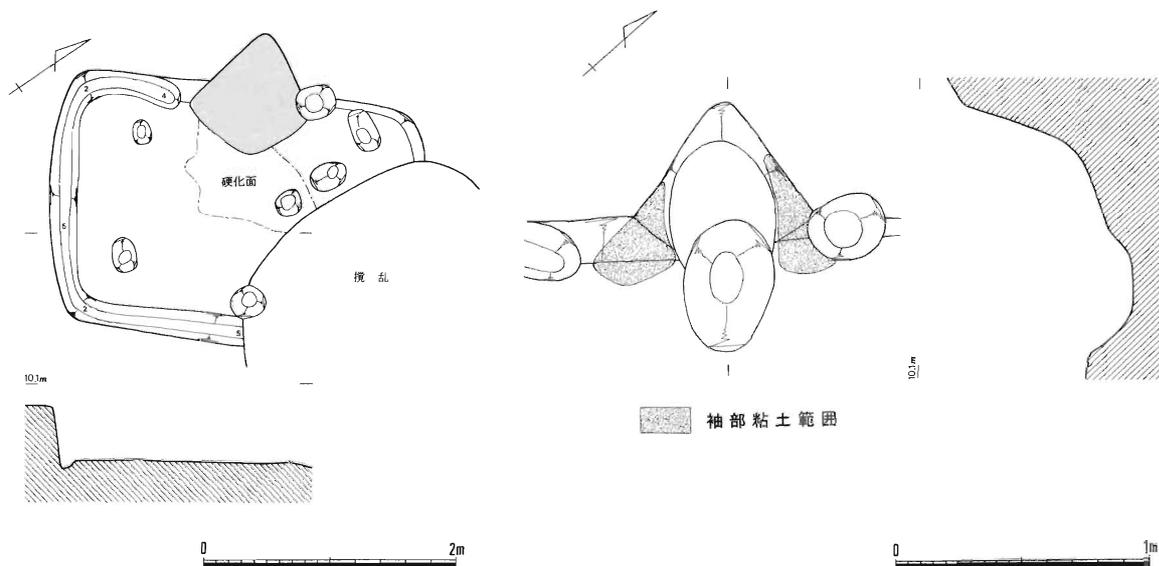
〔時期〕出土遺物から、時期を特定するには困難であるが、住居規模やカマド構造からみて、平安時代の所産のものである可能性がある。

87号住居跡出土遺物 (図版10-2)

土師器・須恵器の小破片が覆土中から出土しているが、図示できるものはなかった。遺物の時期については、1～3が古墳～奈良時代(7～8世紀代)、4が平安時代(9世紀後葉か)に比定される。

1は須恵器坏蓋形土器。小破片のため、器種を特定するのは困難であるが、壺類などの底部である可能性もある。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には白色粒子・砂粒を多く含む。

2は土師器甕形土器。口縁部小破片で、色調は黄褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・金雲母を含む。



第19図 87号住居跡・カマド (1/60・1/30)

内外面横ナデが施される。

3は土師器坏形土器。口縁部小破片で、色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒・白色粒子を含む。内面及び口縁部外面は横ナデ、体部外面は横方向にヘラ削りが施される。

4は須恵器坏形土器。口縁部小破片で、色調は暗灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

2. 調査区出土の遺物（第22図2～6）

須恵器坏身形土器（2）

底部のみの破片で、平底を呈する底部には、一文字状の線刻が施されている。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には黒色粒子・白色砂粒・小石を含む。

土師器高坏形土器（3）

現器高6.1cm。脚部破片で、裾部との境には稜をもつが、全体に「ハ」の字状を呈する。外面には赤彩が施される。胎土の色調は暗赤褐色を基調とし、砂粒・小石を含む。内面は脚柱部がヘラナデ、裾部が横ナデ、外面は縦方向のヘラ磨き調整後、ナデが施される。

土師器甕形土器（4）

現器高8.0cm・推定口径19.0cm。口縁部は弓状に外反し、口唇部外面は丸くめくれている。色調は黄褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。

布目瓦（5）

小破片である。色調は暗灰褐色を基調とし、胎土には白色砂粒を含む。

土製品（6）

支脚である。現全長10.2cm・下底径4.7cm。全体に細身で、下底部がやや裾状に広がっている。表面全体には指頭押捺による成形痕が観察される。内部中心は穿孔されており、穿孔径は0.8cmである。色調は暗橙色を基調とし、胎土には砂粒を多く含む。僅かに上底部分を欠損するのみで、遺存度は4/5強である。

（2）中・近世の遺構・遺物

1. 溝跡

14号溝跡（第20図）

〔構造〕ほぼ東西に走向していた溝の東側が直角に近い角度で北側に曲がり、9m程先で止まっている。東西に走行する部分は、確認できた長さが約11m、上幅240～280cm・下幅80～100cm・確認面からの深さ84～124cm（標高9.8～8.6m）を測る。南北に走向する部分では、上幅280～320cm・下幅70～100cm・確認面からの深さ115～133cm（標高8.7～8.2m）を測る。断面は箱薬研形を呈する。

〔遺物〕第24図1～3の土器については、10世紀後半から11世紀前半にかけての酸化炎焼成の須恵器である。安定した遺物としては、16世紀後半から17世紀前半に比定される陶・磁器であろう。

〔時期〕中・近世。

〔所見〕柏城関連の遺構と考えられる。

14号溝跡出土遺物（第24図、図版10-3・4、図版11-1）

須恵器坏・碗形土器（第24図1～3）



第20図 14号溝跡 (1/100)

1は器高4.3cm・推定口径10.3cm・推定底径4.6cm。ロクロ回転は右回転。底部は調整が加えられているが、僅かに回転糸切り痕が残る。色調は淡い灰褐色～赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。覆土中からの出土で、遺存度は1/2程である。

2は現器高3.2cm・推定口径11.0cm。ロクロ回転は右回転。色調は明橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・金雲母・砂粒を含む。覆土中からの出土で、口縁部から体部下半にかけて1/2程遺存する。

3は刻書土器で、現器高2.5cm・底径7.0cm。高台付き碗の底部破片。ロクロ回転は右回転。色調は明橙色を呈し、胎土には砂粒・茶褐色粒子を含む。内面底部には「舌」に類似する文字が刻書されているが、書き順は「口」に類似する文字が先で、「千」に類似する文字が後である。覆土中からの出土で、底部のみ4/5強遺存する。

素焼土器（第24図4～6）

4は器高2.2cm・推定口径10.5cm・推定底径6.8cm。器形は底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には茶褐色粒子を含む。遺存度は1/4程である。

5は器高2.2cm・推定口径10.3cm・推定底径8.0cm。4に比べ厚手で、底部から口縁部にかけて内湾気味である。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く、茶褐色粒子を含む。遺存度は1/5程である。

6は器高3.4cm。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。色調は淡黄褐色を呈し、茶褐色粒子を含む。小破片である。

時期については、4が15世紀前半、5・6が15世紀中～後半であろうか。

陶・磁器（第24図7、図版11-1-1～10）

第22図7は瀬戸・美濃系の志野菊皿である。器高2.0cm・推定口径12.0cm・推定底径7.5cm。内外面に貫入あり。遺存度は1/3程である。時期は16世紀終末～17世紀初頭である。

図版11-1-1は瀬戸・美濃系の志野皿である。口縁部小破片で、外面体部には2条の稜がまわる。外面に僅かに貫入あり。時期は17世紀後半である。

2は肥前系の磁器碗の口縁部破片である。内外面に貫入あり。時期は17世紀中頃である。

3は瀬戸・美濃系の灰釉鉢の底部付近小破片である。内面には鉄絵が描かれている。貫入あり。時期は16世紀末～17世紀初頭であろう。

4は在地系陶器捏ね鉢である。口唇部は平坦に面取りがされている。胎土には砂粒・白色小石を含む。時期は15世紀である。

5・6は瀬戸・美濃系の擂鉢である。5は口縁部小破片で内外面に飴釉がかけられている。時期は17世紀初頭である。6は体部小破片で内外面に鉄釉がかけられている。内面に櫛目痕あり。時期は17世紀。

7は在地系陶器壺である。口縁部が短く直立するもので、胎土には黄褐色粒子・白色小石を含む。時期は15世紀である。

8・9は同一個体と思われる常滑の大甕の胴部破片である。胎土には白色小石を多く含む。時期は中世期の所産である。

10はほうろくの口縁部小破片である。色調は暗黄褐色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。時期は17世紀であろう。

石製品（図版11-1-11～13）

11～13は緑泥片岩製の板碑破片である。11は三角形状に成形されているが、基部の一部であろう。

鉄製品（第24図8～10）

8は火打金である。長さ8.0cm・幅3.1cm・厚さ0.4cm・重さ18.8g。火打ち部分はゆるい「く」字状を呈する。糸通しの穴は観察できなかった。覆土中からの出土である。

9は不明品。長さ8.8cm・幅1.7cm・厚さ0.3cm・重さ14.2g。実測図の左側部分は欠損しているが、形状は全体に一文字状を呈し、断面は左端が幾分反っている。覆土中からの出土である。

10は鉄釘である。長さ3.4cm・厚さ0.4cm・重さ2.9g。覆土中からの出土である。

2. 井戸跡

13号井戸跡（第21図）

〔構造〕 開口部は楕円形を呈しているが、上端は攪乱により壊されているため、直径120cm程の円形であったと思われる。断面は上部が漏斗状に開き、40cm程下がったところから直径80～90cmの規模でほぼ垂直に垂下する。危険防止のため深さ220cmで調査を断念した。

〔遺物〕 出土しなかった。

〔時期〕 中・近世と思われる。

14号井戸跡（第21図）

〔構造〕 開口部は楕円形を呈し、長径130cm・短径110cmを測る。断面は深さ約120cmの位置で直径140～150cmと広がっている。危険防止のため、深さ210cmまでで調査を断念した。

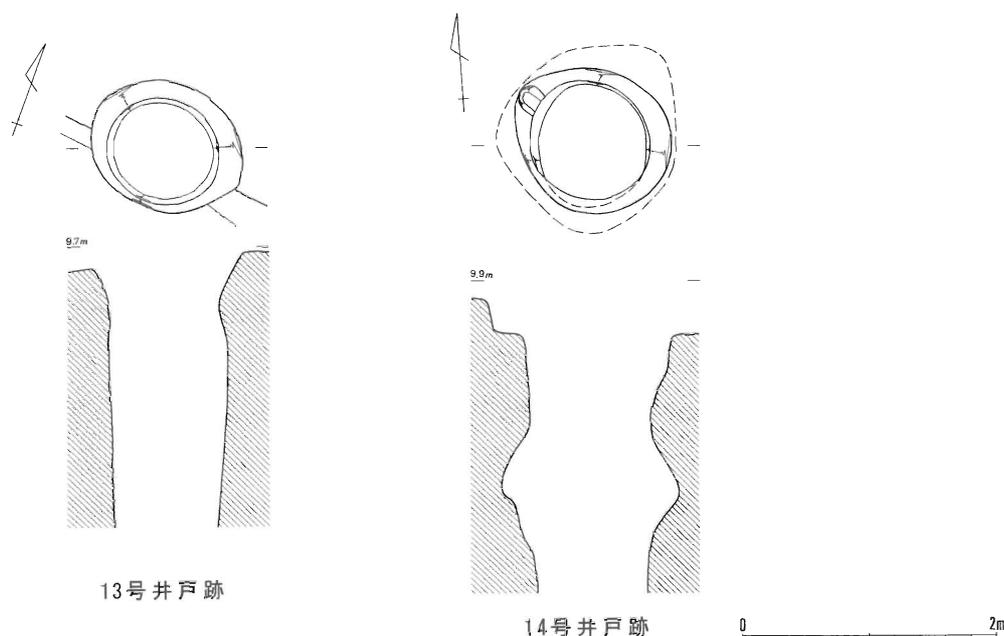
〔遺物〕 ほうろく1点と板碑1点が出土した。

〔時期〕 中・近世と思われる。

14号井戸跡出土遺物（図版11-4）

1は緑泥片岩製の板碑破片と思われる。割付線が残る。南北朝の所産であろう。

2はほうろくの体部小破片である。色調は内面が灰褐色、外面が暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。時期は不明である。



第21図 13・14号井戸跡（1/60）

第4節 III区から検出された遺構・遺物

(1) 古墳時代の遺構・遺物 (第22図1・7)

須恵器坏身形土器 (1)

口縁部から底部にかけての破片で、口径に比べ、器高が偏平なものである。口縁部は内傾し、口唇部は丸い。色調は暗灰褐色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。

土製品 (7)

支脚である。現全長10.0cm・最大径5.5cm。大部分が欠損するが、ほぼ円柱形を呈するものであろう。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

(2) 中・近世の遺構・遺物

15号溝跡 (第23図)

[構造] N-70°-Wの走向角度をもつ。確認できた範囲では、全長約14m、上幅54~128cm・下幅10~32cm・確認面からの深さ15~44cmを測る。(覆土) 6層に分層され、レンズ状の堆積状態を示す。

[遺物] 陶・磁器の破片3点と溶解炉の炉壁と考えられる破片1点、鉄釘1点が出土した。

[時期] 中・近世。

[所見] 柏城関連の遺構と考えられる。

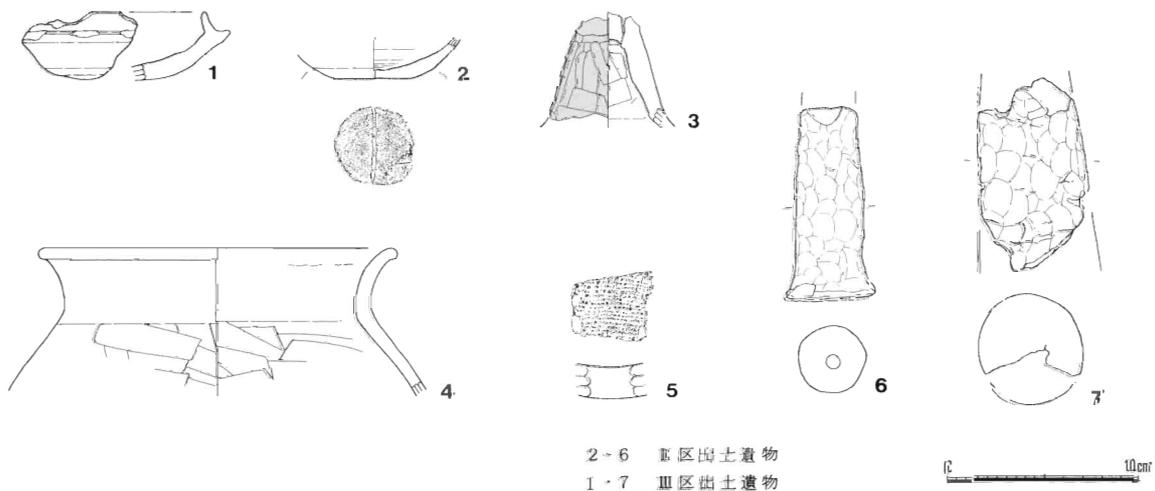
15号溝跡出土遺物 (図版11-2・3、第24図11)

図版11-2-1は内耳鍋の口縁部から体部下半にかけての破片である。内面の口縁部直下には内耳が付される。時期は16世紀後半であろう。

2は常滑製壺の底部破片であろうか。時期は15世紀であろう。

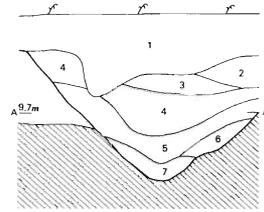
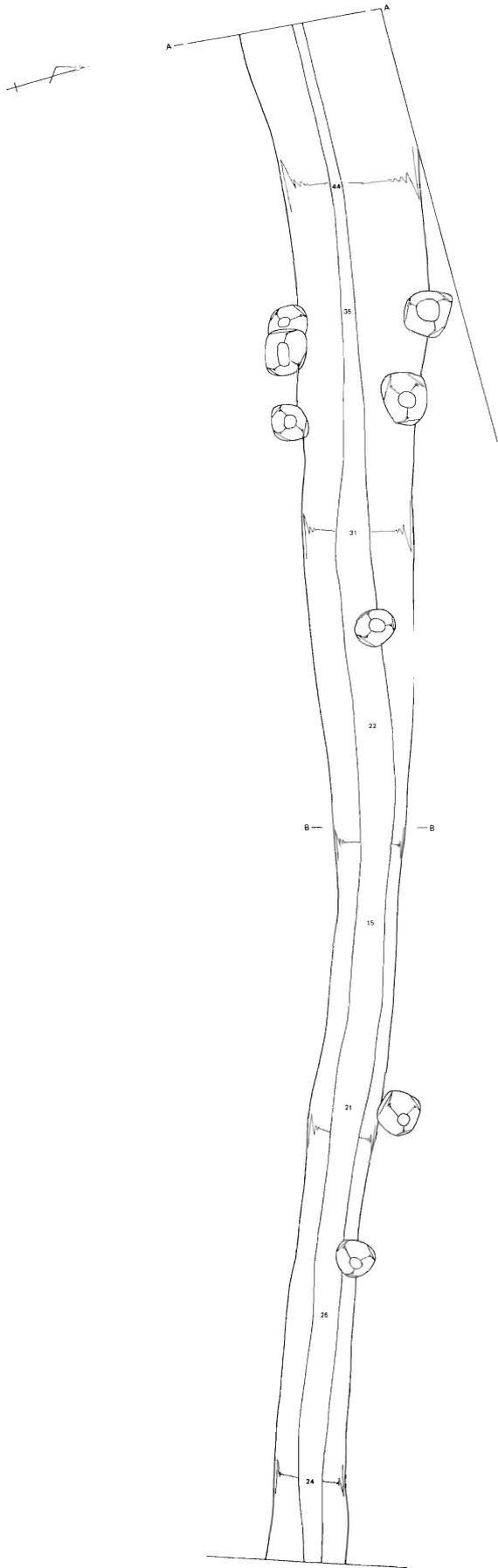
3は瀬戸・美濃系の鉄釉徳利である。時期は16世紀代であろう。

図版11-3は溶解炉の炉壁の一部と思われる。厚さ約2cmで、全体に暗灰褐色を呈し、砂粒質の素材である。内面には融液(フラックス)と思われる緑色を帯びたガラス質のものが付着している。これに類似するものは、本地点からすぐ近接した第35地点から検出されている。第35地点からは、市内で初め

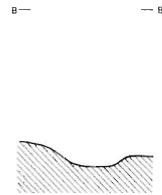


2~6 III区出土遺物
1・7 III区出土遺物

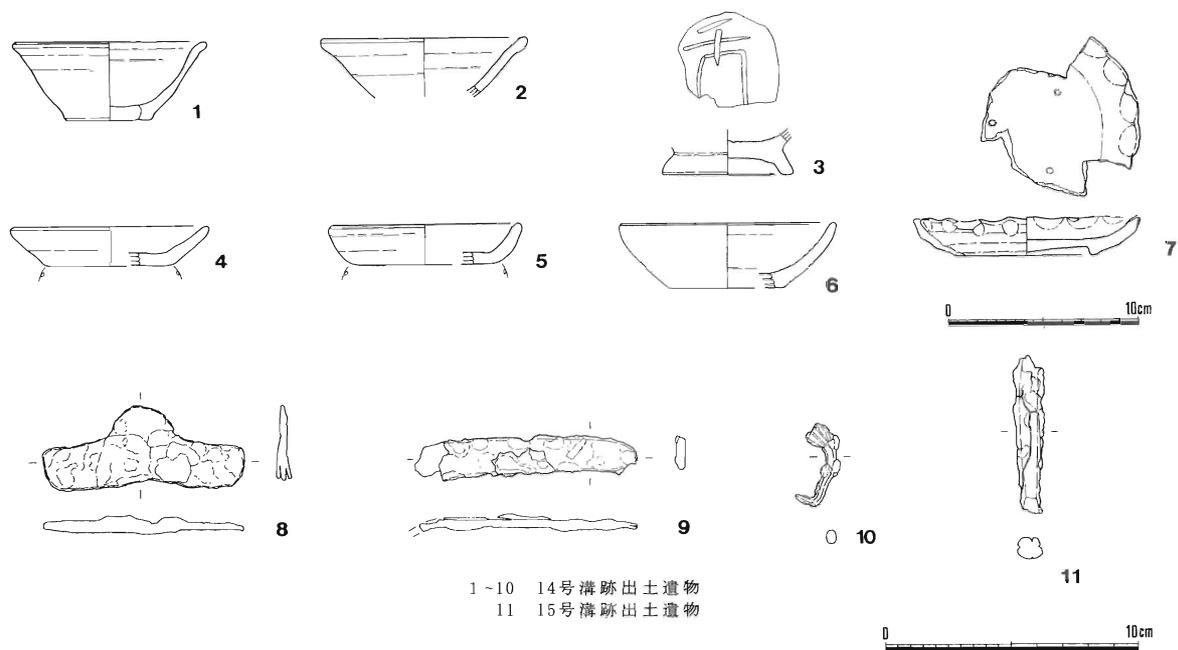
第22図 II・III区出土の古墳・平安時代の遺物 (1/4)



- 1層 表土。
- 2層 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
- 3層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
- 4層 ローム粒子・小石を含む暗茶褐色土。
- 5層 ローム粒子・小石を含む黒色土。
- 6層 ローム粒子を含む黒褐色土。
- 7層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黒褐色土。



第23図 15号溝跡 (1/60)



第24図 14・15号溝跡出土遺物 (1/4・1/3)

て、近世の鑄造関連の遺構である鑄造土坑（130号土坑）・溶解炉（134号土坑）が発見されている。

第24図11は鉄釘であろうか。長さ6.3cm・厚さ0.8cm・重さ12.4g。両端ともに欠損している。

第5節 包含層出土遺物（第25～33図）

ここでは、表土・包含層及び歴史時代の遺構から出土した縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物についてふれる。

今回の調査では、表土掘削・遺構確認作業中に市域で初見である爪形文系と思われる土器片をはじめとする多時期にわたる縄文土器が出土したため、遺物の分布状態を把握する必要から出土状況の図化を試みた。しかし、調査の進展に伴いこれらの遺物の大部分が中世以降の所産と思われる溝跡覆土中に含まれていることが判明し、当初の意図を果たすことができなかった。

（1）縄文時代の遺物（第25～30図176、第31～33図）

第1類 草創期の土器（第25図1）

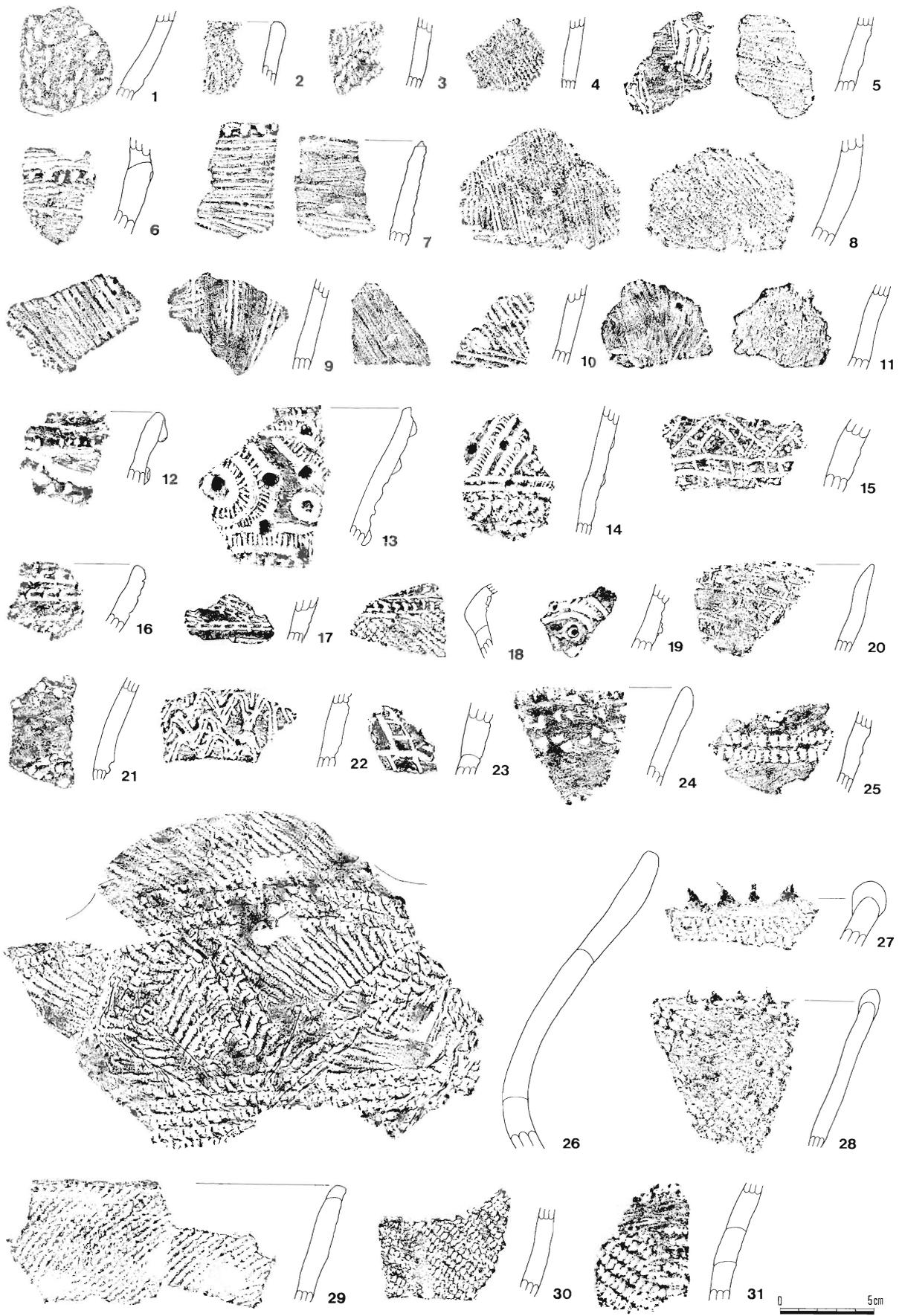
爪形文系土器。

底部に近い破片であろうか。器厚は8mm前後と比較的厚い。爪形文は人体爪によるものと思われる。右から左方向に刺突されていて密集するが、縦位に列をなしているとみられなくもない。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には細砂を多く含む。

第2類 早期前半の土器（第25図2～4）

撚糸文系土器。

2は口唇部が丸頭状を呈する。Lの撚糸文が縦位に施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土



第25图 包含層出土遺物 1 (1/3)

には輝石を僅かに含む。3はLの撚糸文が斜位に施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。胎土には細砂を僅かに含む。4はRLの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)で、胎土には輝石がめだつ。

第3類 早期後半の土器(第25図5~11)

条痕文系土器。

1種 鶴ガ島台式土器(5)

内外面に条痕文が施される。細沈線による幾何学的な区画が設けられ、太沈線が充填される。区画文の交点には円形竹管文が配される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には繊維を僅かに含む。

2種 隆帯が貼付された土器(6)

条痕文上に刻みが加えられた隆帯が横位に貼付される。色調はにぶい褐色(5YR5/3)を呈する。胎土には細礫を多く、繊維を僅かに含む。

3種 口唇部に刻みが加えられた土器(7)

内外面に横位の条痕文が施され、口唇端部には丸棒状の施文具の押捺による刻みが加えられる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土には繊維を僅かに含む。

4種 条痕文のみが施された土器(8~11)

8・9は内外面に斜位の条痕文が施される。8の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)で、胎土には繊維・粗砂・白色粒子を多く含む。9の色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)で、胎土には繊維を僅かに含む。10は内外面に斜位の条痕文を残すが、外面は擦痕状を呈する。色調は褐灰色(10YR4/1)で、胎土には繊維を僅かに含むが精選されている。11は内外面ともよく磨かれているが条痕文を残す。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)で、胎土には繊維を僅かに含む。

第4類 前期前半の土器(第25図12~31、第26図32~36)

羽状縄文系土器。胎土には繊維が多く含まれる。

1種 花積下層式土器(12)

口縁部が外側に肥厚し稜をもち、刻みが加えられる。口縁部下には刻みが付加された隆帯が巡り、同様の隆帯が口縁部との間に斜位に貼付されているようである。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。

2種 関山式土器(13~15・18~20・23)

13~15・23は平行沈線間に刻みを加えた梯子状沈線文により文様が構成された土器。

13は口唇部下に2条、胴部上位に1条の梯子状沈線文を巡らせて区画し、口縁部文様帯を形成する。区画内には梯子状沈線文による同心円文(渦巻文)などが描かれ、瘤状貼付文・沈線による円文が加えられる。沈線は幅のあるへら状の施文具を用いたために帯状を呈し、刻み部分は浮き彫り状になる。色調はにぶい黄褐色(10YR5/4)である。14は半截竹管による平行沈線間に連続した刻みを加えた梯子状沈線文を巡らせて区画する。区画上部は斜位の梯子状沈線文が施され、瘤状貼付文が貼付される。区画下部はループ付きの単節LRの斜縄文が施される。色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。15・23は棒状施文具で描かれた平行沈線間を短沈線で区切り梯子状にしたもの。15は鋸歯状・横走る梯子状沈線文が施される。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈する。23も15と相似た文様構成になるうか。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈する。

18は屈曲部の平行沈線間に半截竹管の押捺を加えた文様が施される。下位はR Lの単節斜縄文になる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）で、胎土には細礫がめだつ。

19は3条の沈線が弧状に施され、円形竹管文で加飾された瘤状貼付文が貼付される。色調は灰黄褐色（10YR5/2）を呈する。

20はL Rの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線をやや斜位に多段に施す。不明瞭であるが縦位にも沈線がみられ、文様が格子目状になる可能性がある。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。

3種 黒浜式土器（16・17・21・22・24・25）

16・17は半截竹管の押し引きによる側線のある連続爪形文が施された土器。

16は口縁部に2段施される。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。17は横位・斜位に施される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈する。

21・24・25は連続刺突文が施された土器。

21は半截竹管を連続刺突して文様を描く。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈する。24は口縁部に沈線を巡らせ、連続刺突文を横位・鋸歯状に施す。口唇端部には刻みが加えられる。色調は褐色（7.5YR4/6）で、胎土には細礫がめだつ。25は先端が平坦な施文具による連続刺突文が横位に2条、斜位に1条施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。

22は半截竹管による波状文が多段に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。

4種 縄文が施された土器（26～36）

26は波状口縁の土器。ループ付きR Lの単節縄文を用いて文様効果をあげている。波底部に沿った口縁部と胴部上位にループ文を多段に巡らせて区画を作る。区画内にはループ文を鋸歯状に施すため縄文は羽状を呈する。色調は褐灰色（7.5YR4/1）からにぶい褐色（7.5YR4/2）。

27・28は口唇部上に山形の小突起が複数付けられる。28はループ付きR Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）。28はL Rの単節斜縄文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）。

29はL Rの単節斜縄文が施される。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈する。

30・31はR Lの単節斜縄文が施される。色調は30が灰褐色（5YR5/2）、31がにぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。

32・34はL、33はRの無節斜縄文が施される。色調は32が灰褐色（10YR4/2）、33が赤褐色（5YR4/8）、34が灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。

35・36は底部破片。35はL Rの単節斜縄文が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）。36は上げ底状を呈する。R Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）。

これらの土器は関山式・黒浜式に該当するが、26～28は関山式である。

第5類 前期後半の土器（第26図37～76、第27図77～79）

竹管文系土器。終末期の土器を含む。

1種 諸磯式土器（37～48）

37～44は半截竹管の押し引きによる幅狭の連続爪形文が施された土器。

37は多段に連続爪形文が施されるが、拓影図左下端に縦位の施文が僅かにみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細礫を僅かに含む。

38はまばらな刻みが加えられた隆帯が貼付される。隆帯は拓影図左端で広がっていることが観察できる。この部分に突起などが付いた可能性がある。隆帯の上・下位には連続爪形文が多段に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には粗砂・輝石を含む。

39は口縁部に隆帯が巡る。口唇部と隆帯の間には2段の連続爪形文が施される。隆帯下位には幅狭の平行沈線文が巡り、以下、沈線による木葉文と思われる文様が描かれる。色調は褐灰色（10YR4/1）で、胎土には輝石を僅かに含む。

40は口縁部に連続爪形文が巡り、以下、平行沈線文がみられる。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土には細礫を多く含む。

41は口縁部に連続爪形文が巡り、幅狭な平行沈線により木葉文が描かれる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には粗砂を僅かに含む。

42は連続爪形文により変形木葉文が描かれ、円形竹管文が付加される。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土には粗砂を僅かに含むが精選されている。

43はR Lの単節斜縄文を地文とする。連続爪形文を巡らせ、縦列に円形竹管文を施す。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土には細砂を僅かに含む。

44は連続爪形文で肋骨文が描かれるが、隣接して平行沈線文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には細砂を僅かに含む。

45・46は幅狭の平行沈線が施された土器。

45はR Lの単節斜縄文を地文とし、縦列の円形竹管文を中心にして肋骨文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には細礫を僅かに含む。46は波状口縁の土器。木葉文が描かれる。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には細砂を含む。

47・48は条線と円形竹管文が縦列に施された土器。

47は波状口縁の土器。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には粗砂を僅かに含む。48は条線が肋骨文状に施され、中心には円形竹管文が配される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細砂を僅かに含む。

2種 諸磯b式土器（49～67）

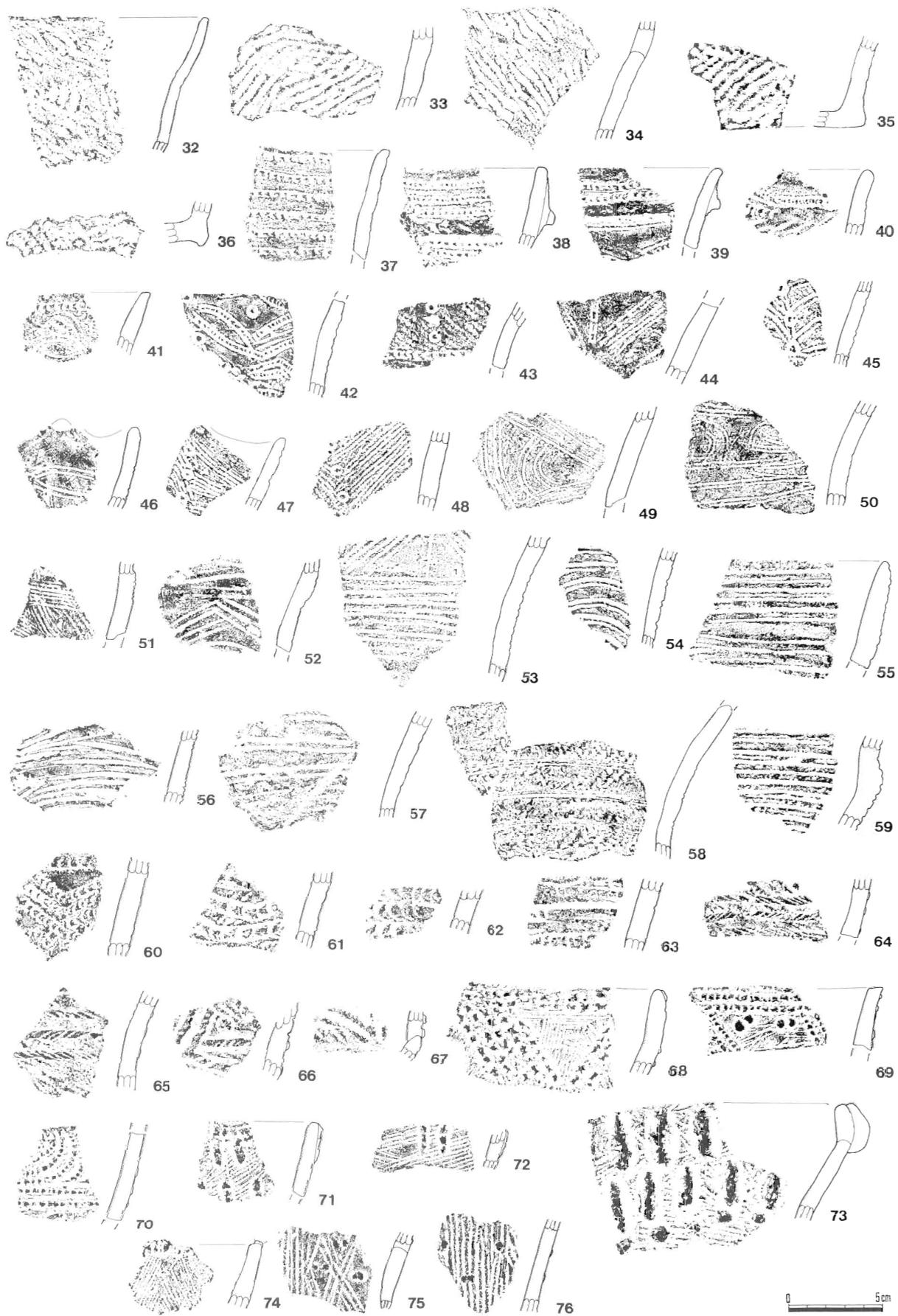
49～59は沈線により文様が描かれた土器。

49・50は単節斜縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線で区画が作られ、弧線文が充填された土器。49の縄文はR L。区画は三角形状になろうか。色調は褐灰色（7.5YR4/1）。50の縄文はL R。多段に巡らせた平行沈線で区画を作る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）。胎土には共にチャートなどの細礫を多く含む。

51はL Rの単節斜縄文を地文とする。横位・斜位の集合する沈線が施される。斜位のもは弧状になろうか。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細礫を含む。

52・53は半截竹管による平行沈線を横位・斜位に多段に用いて三角形の区画を作る。52は区画内に弧線文が充填されようか。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には細砂を僅かに含む。53は区画内に縦位の平行沈線文を加える。色調は赤褐色（2.5YR4/1）で、胎土にはチャートなどの細礫を多く含む、輝石もめだつ。

54は半截竹管による平行沈線を弧状に施した土器。色調はにぶい灰褐色（5YR5/3）で、胎土には細礫を僅かに含む。



第26图 包含層出土遺物 2 (1/3)

55～57・59は半截竹管による平行沈線を多段に施した土器。55は直立ぎみの口縁部破片。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には細砂を含む。56の色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には輝石がめだつ。57の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細礫と輝石を僅かに含む。59は胴部が屈曲する土器。平行沈線が密に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細礫・輝石を僅かに含む。

58はL Rの単節斜縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線が横位にまばらに施される。色調は褐灰色（7.5YR5/1）で、胎土にはチャートなどの細礫を多く含む。

60～63は半截竹管の押し引きによる幅広の連続爪形文が施された土器。

60の斜位の連続爪形文は「X」字状になろうか。色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土には粗砂を含む。

61はL Rの単節斜縄文を地文とし、連続爪形文を弧状に施した土器。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には粗砂を含む。

62は連続爪形文が多段に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細砂が僅かに含まれる。

63はL Rの単節斜縄文を地文とし、連続爪形文を横位に施すが、部分的に平行沈線文に変化する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には粗砂を多く含み、輝石・白色粒子がみられる。

64～67は浮線文が貼付された土器。

64・65はR Lの単節斜縄文を地文とし、刻みが加えられた浮線文が横位に貼付される。64の色調は灰褐色（5YR4/2）で、胎土には細礫を含む。65の色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には砂礫を僅かに含む。

66はR Lの単節斜縄文を地文とする。刻みのある浮線文により菱形状の区画が作られ、区画内には横位の浮線文・円形竹管文が充填される。色調はにぶい褐色（5YR5/3）で、胎土には粗砂を僅かに含む。

67はR Lの単節斜縄文を地文とする。加飾のない浮線文は入組文状に貼付されようか。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には雲母細片がめだつ。

3種 諸磯c式土器（68～77）

68～72は結節浮線文が貼付された土器。

68は僅かに内湾する口縁部破片。地文の条線は口唇部下で横位、それ以下は鋸歯状に施される。結節浮線文は地文の方向に符合するかのよう口唇部下で横位、それ以下は鋸歯状に貼付される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には細砂と輝石を僅かに含む。

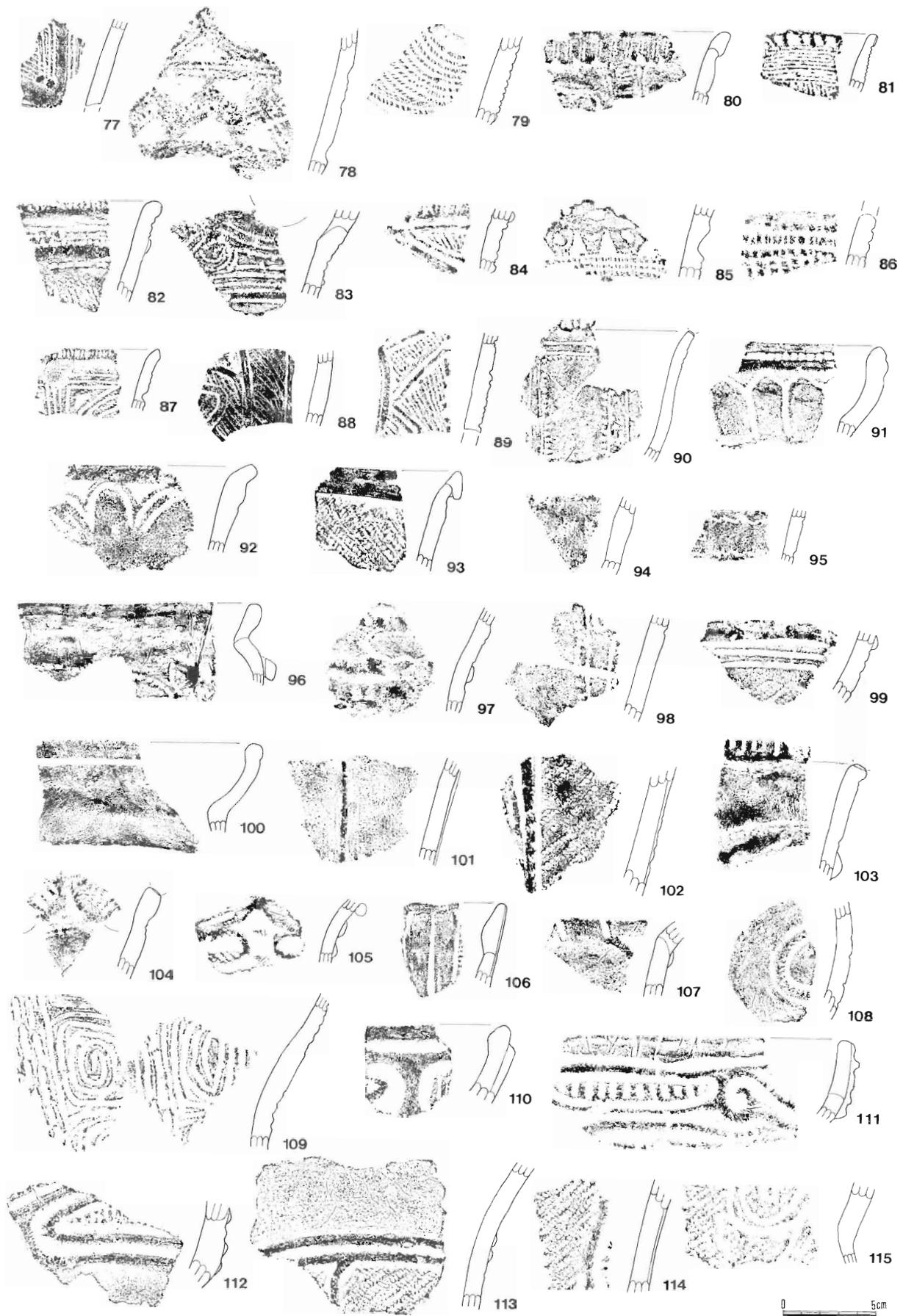
69は直立する口縁部破片。地文は半截竹管による平行沈線で、乱雑に施される。結節浮線文は口唇部下に2条、それ以下は複数列を斜位に貼付して区画を作る。区画内には粒状の貼付文が付けられる。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には細砂を僅かに含む。

70は同心円状及び横位の結節浮線文が貼付される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には細砂を僅かに含む。

71は条線を地文とする。口唇部下に結節浮線文を巡らせ、縦位の短い浮線文を貼付する。色調は灰黄色（10YR5/2）で、胎土には細砂を僅かに含む。

72は条線を地文とし、縦位の結節浮線文が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には細砂を僅かに含む。

73は口縁部が内屈する土器。地文の半截竹管による集合沈線は口縁部では矢羽根状に、それ以下は横位に施される。口縁部には縦長の貼付文が2列、円形の貼付文が1列巡る。色調はにぶい褐色（7.5YR



第27图 包含層出土遺物 3 (1/3)

5/3) で、胎土には細礫を僅かに含む。

74～77は集合沈線・条線が施された土器。

74は口唇端部に短い結節浮線文が貼付される。条線は鋸歯状に施される。色調はにぶい赤褐色（2.5 YR5/3）で、胎土には細礫を僅かに含む。

75～77は集合沈線・条線が施され、2個一対の粒状貼付文が付けられる。75は半截竹管による集合沈線が縦位・格子目状に施される。色調は灰褐色（7.5 YR4/2）で、胎土には粗砂を多く含み、輝石がめだつ。76は半截竹管による集合沈線が縦位・斜位に施される。色調は灰褐色（5 YR4/2）で、胎土には粗砂・輝石を多く含む。77は条線を縦位・斜位に施す。色調は灰褐色で、胎土には細砂を含む。

4種 十三菩提式土器（78・79）

78は半截竹管による集合沈線を巡らせて横帯区画を作成する。区画内には集合沈線が鋸歯状に施され、それに合わせて大ぶりの三角印刻文が多段に配される。色調は明褐色（7.5 YR5/6）で、胎土には細礫を多く含む。

79は半截竹管による平行沈線文を渦巻状に密に施し、沈線間に刻みを加える。拓影図上端は無文となりくぼむ。色調は灰褐色（7.5 YR4/2）で、胎土には雲母細片を多く含む。

第6類 中期前半の土器（第27図80～109）

五領ヶ台式・阿玉台式・勝坂式土器。

1種 五領ヶ台式及びそれに後続すると思われる土器（80～95・102）

80は口縁部に粘土帯を貼付し複合口縁状にし、下端には三角形の刻みを加える。粘土帯には半截竹管による平行沈線を縦位に等間隔に施す。刻みが加えられた隆帯が垂下し、沈線による文様が描出される。色調はにぶい赤褐色（5 YR5/4）で、胎土には細砂を含む。

81は僅かに肥厚した口唇部に刻みが加えられる。器面には横位・縦位の条線状の集合沈線が施される。色調はにぶい褐色（7.5 YR5/3）で、胎土には粗砂と白色粒子を僅かに含む。

82は口唇部に刻みが加えられる。帯状の低い隆帯が巡り、口縁部に1条、隆帯を挟んで2条の角押文が施される。口縁部の2条の角押文間には部分的に交互刺突による鋸歯状文がみられる。地文はLRの単節斜縄文で隆帯上にも施文されている。色調は灰褐色（7.5 YR4/2）で、胎土には細砂と白色粒子を多く含む。

83は波状口縁の土器。細い隆帯を巡らせて口縁部文様帯を画する。文様は角押文によって描出され、波頂部では渦巻文から派生して口縁部に沿って弧状に、頸部では水平に多条に巡る。色調は灰褐色（7.5 YR5/2）で、胎土には細砂と白色粒子を多く含む。

84は横位に隆帯が貼付される。半截竹管による平行沈線で弧状区画が作られ、細めの半截竹管による斜位の集合沈線が充填される。色調はにぶい赤褐色（5 YR4/3）で、胎土には雲母細片を多く含む。

85は半截竹管による横位の集合沈線に縦位の集合細沈線を重ねて格子目状の帯状文を形成する。帯状文に沿って三角印刻文が巡らされ、空白部には棒状施文具による刺突文が施される。色調は灰褐色（7.5 YR5/2）で、胎土には雲母細片を含む。

86は半截竹管による平行沈線を多段に巡らせ、同一の施文具により縦位に集合沈線を施す。沈線間には刻みが加えられる。色調は灰褐色（7.5 YR4/2）で、胎土には雲母細片を多く含む。

87は僅かに外半する口唇部に刻みが加えられる。横位・縦位の平行沈線で区画が作られ、角押文によ

り三角形文・弧線文が施される。三角形文内には三角印刻文が充填される。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には雲母細片と風化花崗岩と思われる細礫が含まれる。

88は半截竹管文による平行沈線を縦位・弧状に施して帯状に画し、集合沈線を充填する。拓影図左上端には三角形の印刻がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）で、胎土には雲母細片を含む。

89は半截竹管文による平行沈線を直・弧状に組み合わせて区画を作り、集合沈線を充填する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には雲母細片を含む。

90は口唇端部に刻みが加えられる。平行沈線を横位・縦位に施して縦長の区画を作り、沈線に沿って竹管を寝かせて行った刺突文が施される。縦位の沈線間には交互刺突による鋸歯状文がみられる。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には細砂を含む。

91は頸部がくびれる土器。口縁部の角押文と頸部の沈線により口縁部文様帯を画する。文様帯内には沈線による連結する「Y」字状文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には細砂を僅かに含む。

92の文様は、沈線による「∩」字状文とその両下端から派生した二重の弧線文からなる。連結部の空白部分には三角印刻文が充填される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には雲母片を多く含む。

93は口縁部が粘土帯の貼付により複合口縁状を呈する。太さが違う撚紐を撚ったR Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には細砂を含む。

94・95は結節文が施された土器。94は縦位に施されるが、器面が荒れているため詳細は不明。色調はにぶい褐色（7.5YR4/2）で、胎土には風化花崗岩と思われる粗砂を多く含む。95は「Z」字状の結節文が横位に施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には細砂を含む。

102は隆帯が垂下し、その両脇に沈線が加えられた土器。R Lの単節斜縄文が施されるが、隆帯上にも及ぶ。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には雲母片と風化花崗岩と思われる細礫を多く含む。

2種 阿玉台式・貉沢式土器（96～101）

96は頸部がくびれ胴部が脹らむ甕状の器形になろうか。肩部には短い粘土紐をつまんで貼付した小突起がみられる。やや幅広の角押文が弧状に施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には雲母片を多く含む。

97は帯状の隆帯が巡り、上位には波状沈線文と結節沈線文を併用した楕円形の区画が、下位には連続指頭圧痕文が巡る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には雲母細片と風化花崗岩と思われる細礫を多く含む。

98は押し引きによる2条の結節沈線文と円形竹管文列が縦位に施される。拓影図上端には弧状に施文された結節沈線文がみえる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には雲母細片と風化花崗岩と思われる細礫を多く含む。

99は隆帯と3条の沈線が巡る。R Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には雲母片を多く含む。

100は頸部がくびれ、口縁部が内湾する土器。口唇部下には1条の沈線が巡る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には雲母細片を多く含む。

101は断面三角形の隆帯が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には風化花崗岩と思われる細礫を多く含む。

3種 勝坂式土器（103～108）

103は波状口縁の可能性がある。口唇端部に刻みが加えられる。貼付されている隆帯は弧状になるうか。口唇部下と隆帯に沿った部分に半截竹管文の押し引きによる連続爪形文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には粗砂・雲母細片・白色粒子を含む。

104は波状口縁の土器で、肥厚する口唇端部には刻みが加えられる。口唇部に沿って半截竹管の押し引きによる連続爪形文が巡る。色調は褐灰色（10YR4/1）で、胎土には細砂を多く含む。

105は蛇腹状に凹凸のある器面に、隆帯による長楕円形の区画が作られる。隆帯上には部分的にR Lの単節斜縄文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には細砂を含む。

106は口縁内部が肥厚する土器。平行に沈線が垂下する。拓影図右側には多段の刻みがみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には細砂を多く含む。

107は弧状の隆帯と縦位の沈線が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には細砂を含む。

108は平行する沈線で円文が施される。沈線間には刻みが加えられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には雲母細片を含む。

4種 馬高式系と思われる土器（109）

長く引いた押し文列を垂下させ、縦長の区画を作る。区画内には角張った渦巻文が多段に施される。色調は褐灰色（10YR4/1）で、胎土には細砂を含む。

第7類 中期後半の土器（第27図110～115、第28図116～140）

加曾利E式土器。曾利式系・連弧文系土器を含む。

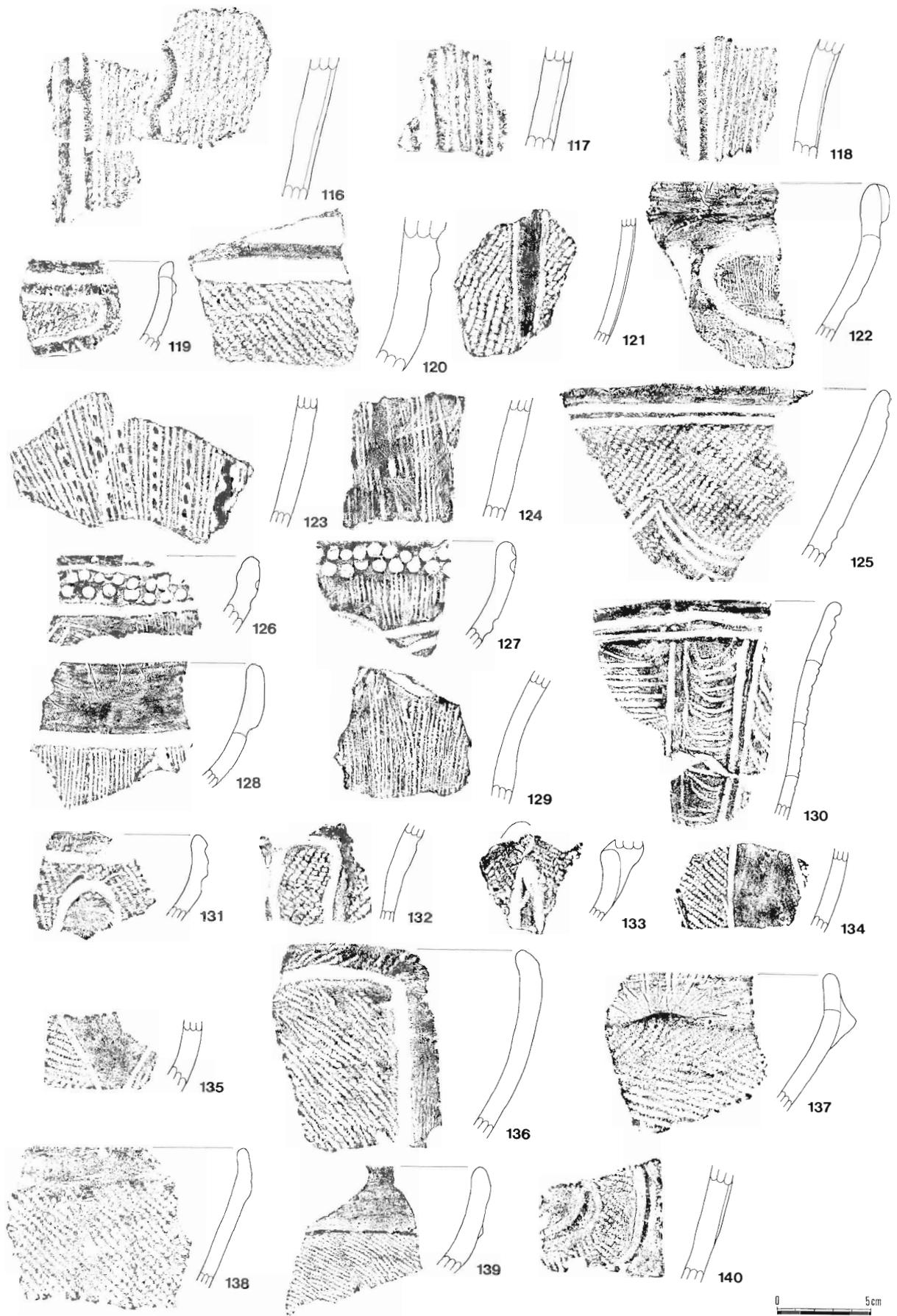
1種 加曾利E I式土器（110～119）

110～113・119は口頸部破片。110・111は隆帯による渦巻文と区画が作られ、区画内には縦位の沈線がみられる。110の色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には粗砂を僅かに含む。111は頸部に僅かではあるが単節斜縄文がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には粗砂を多く含み輝石もみられる。112はLの撚糸文が縦位に施され、隆帯による楕円形の区画が作られる。頸部は無文帯になる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土には細砂を含む。113は2本の隆帯により頸部と胴部を区画する。頸部は無文帯になる。胴部はR Lの単節斜縄文を地文とし、隆帯による蛇行する懸垂文が貼付される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には細礫を多く含む。119は隆帯により楕円形の区画が作られる。区画内にはLの撚糸文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には細砂を多く含む。

114～118は胴部破片。114・115はR Lの単節斜縄文を地文とする。114は隆帯による蛇行する懸垂文が貼付される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には細礫を多く含み輝石もみられる。115は沈線により渦巻文、蛇行・平行する懸垂文が施される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には細砂を多く含む。116～118はLの撚糸文を地文とする。116は隆帯による蛇行・「H」字状の懸垂文が貼付される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には粗砂を多く含む。117・118は平行する隆帯が垂下する。117の色調はにぶい褐色（5YR5/4）で、胎土には細礫を僅かに含む。118の色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には細砂を多く含む。

2種 加曾利E II式（120～122・124）

120・121は縄文を地文とする。120は胴部上位の破片。2条の凹線が巡り、以下、R Lの単節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には細砂を含む。121は拓影図では不明瞭であるが、R L Rの複節斜縄文を地文とし磨消懸垂文が施される。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）で、胎土



第28图 包含層出土遺物 4 (1/3)

には細砂を含む。

122・124は条線を地文とする。122は凹線による区画と懸垂文がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細砂を僅かに含む。124は磨消懸垂文が施される。色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）で、胎土には細砂を含む。

3種 連弧文系土器（125～129）

125は口縁部破片。R Lの単節斜縄文を地文とする。口縁部に2条の沈線が巡り、3本1組の沈線で連弧文が描かれる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には粗砂を多く含む。

126～129は条線を地文とする。126・127は口縁部に円形刺突文列が2列巡る土器。126は2条の沈線間に円形刺突文列が配される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には細砂を僅かに含む。127の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には細砂を多く含む。128は凹線を巡らせて口縁部に広い無文帯を作る。色調は褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細礫を僅かに含む。129の色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細砂を含む。

4種 曾利式系土器（123・130）

123は半截竹管による集合沈線を地文とする。半截竹管の押引文と蛇行隆帯が垂下する。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）で、胎土には粗砂を多く含む。

130は口縁部に2条の沈線を巡らせ、平行沈線を垂下させて縦位に区画する。区画内には横位に弧線文・平行線文を充填して肋骨文状にする。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細砂を僅かに含む。

5種 加曾利EⅢ式土器（131～136）

131～133は沈線により「 \cap 」字状文が施される。131は口縁部に1条の沈線が巡る。L Rの単節斜縄文を地文とするが、部分的に羽状になる。「 \cap 」字状文内は磨り消される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には細砂を僅かに含む。132はR Lの単節斜縄文を地文とする。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には細礫を僅かに含む。133は波状口縁の土器。L Rの単節斜縄文を地文とするが部分的に羽状になる。文様内は磨り消される。色調は灰褐色（5YR5/2）で、胎土には細砂を僅かに含む。

134・135は磨消縄文の土器。134の地文はL Rの単節斜縄文。色調は灰褐色（5YR5/2）で、胎土には細砂を僅かに含むが精選されている。135の地文はR Lの単節斜縄文であるが、部分的に羽状になる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土には細砂を含む。

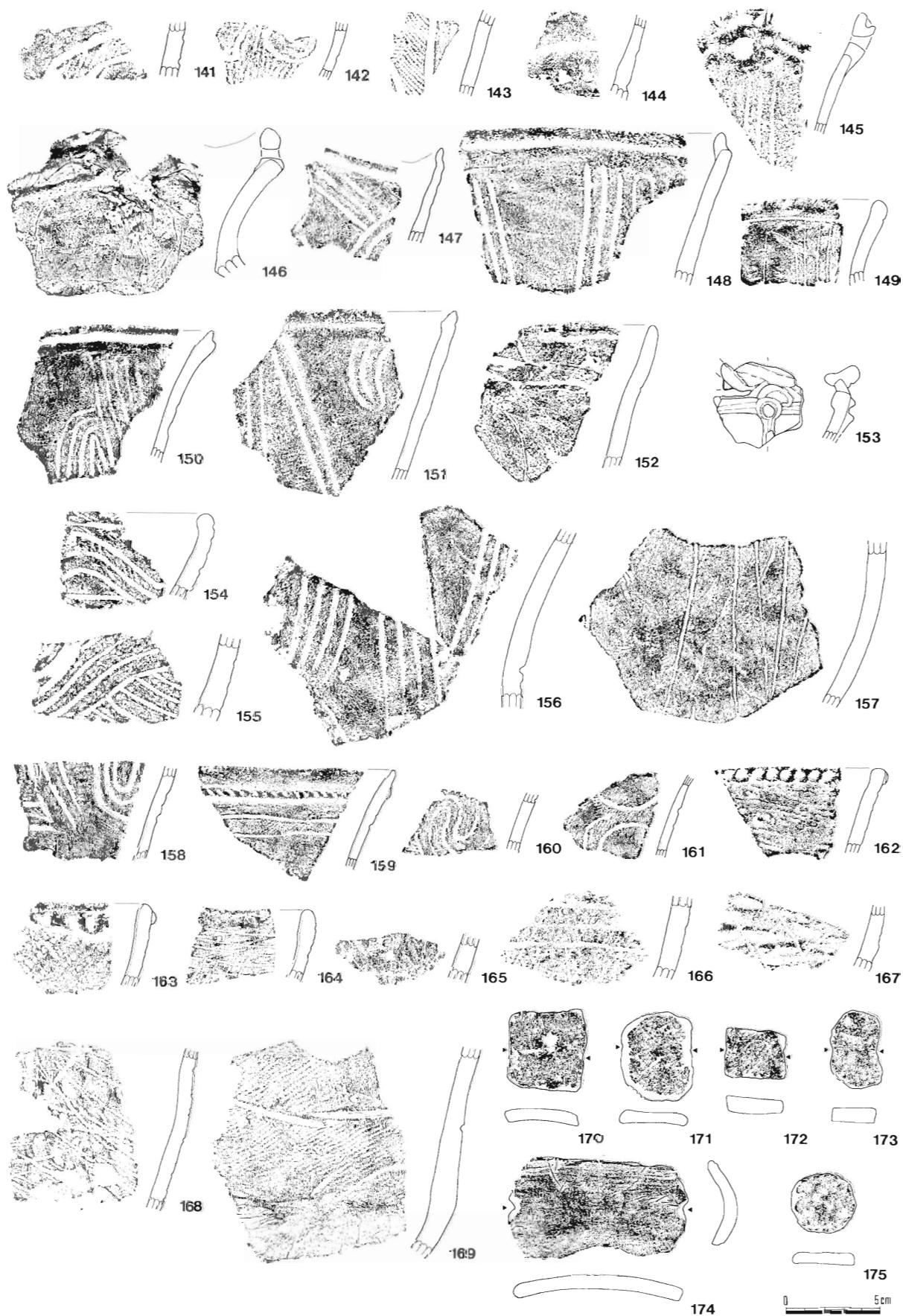
136はLの無節斜縄文を地文とするが、口唇部直下とそれ以下は施文方向を変えて羽状にする。凹線により「 \cap 」字状文が施される。拓影図右端は磨り消されている。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）で、胎土には細砂を僅かに含む。

6種 加曾利EⅣ式土器（137～140）

137・138は口縁部の無文帯下に僅かな膨らみをもち、以下、縄文が施される。137は膨らみ部分が一部突出する。L Rの単節斜縄文が羽状に施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）で、胎土には細砂を含む。138はL Rの単節斜縄文が施される。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には細礫を僅かに含む。

139は微隆帯により口縁部無文帯と縄文施文部を画する。Lの無節斜縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には細砂を僅かに含むが精選されている。

140はL Rの単節斜縄文を地文とする。微隆帯により弧状の区画を作り、磨り消される。色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）で、胎土には細礫を僅かに含む。



第29图 包含層出土遺物5 (1/3)

第8類 後期前半の土器（第29図141～161）

1種 称名寺式土器（141～144）

141～143はLRの単節斜縄文を地文とする。弧状の沈線で区画を作り、区画外は磨り消される。141の色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土には細砂を僅かに含む。142の色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には細砂・輝石を僅かに含む。143の色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には粗砂を僅かに含む。これらの土器の胎土は、いずれも精選されている。

144は沈線による区画内に刺突が加えられる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）で、胎土には細砂を含む。

2種 堀之内1式土器（145～158）

145・146は波状口縁の土器。波頂部には円孔が穿たれ、横に円形の刺突文がみられる。145は波頂端部が窪み、刺突が加えられる。口縁部には沈線が巡らされ、波頂部から4条の沈線が垂下する。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には細砂を含む。146は口縁部がくぼむ。頸部は無文帯になる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には細礫を僅かに含む。

147は波状口縁になろう。LRの単節斜縄文を地文とする。口縁部には凹線が巡り、沈線により幾何学的な文様が描かれる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細砂・白色粒子を多く含む。

148・149は口縁部に凹線・沈線が巡り、垂下する沈線と「 \cap 」字状文が施される。148の色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には粗砂を多く含む。149の色調はにぶい褐色（7.5YR5/2）で、胎土には細砂を含む。

150・151は平縁の土器で、口縁部に凹線が巡り、沈線による直線文と弧線文が組み合わされる。150は薄手の土器で、多条の沈線をやや斜位に垂下させ、そこから弧線文を接続させて描く。色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には細砂を含む。151は縄文を地文にしているが、器面が荒れているため詳細は不明。「ノ」字状の沈線文と斜位の平行沈線文が施される。内面口唇部下は凹線状にくぼむ。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には粗砂・輝石を多く含む。

152は口縁部の凹線が途切れている。胴部には細沈線で同心円状の文様が描かれる。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には細礫を僅かに含む。

153は粘土紐をねじって螺旋状にした突起をもつ平縁の土器。突起下には沈線による半円文と円形の刺突が加えられた貼付文が付けられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細砂を含む。

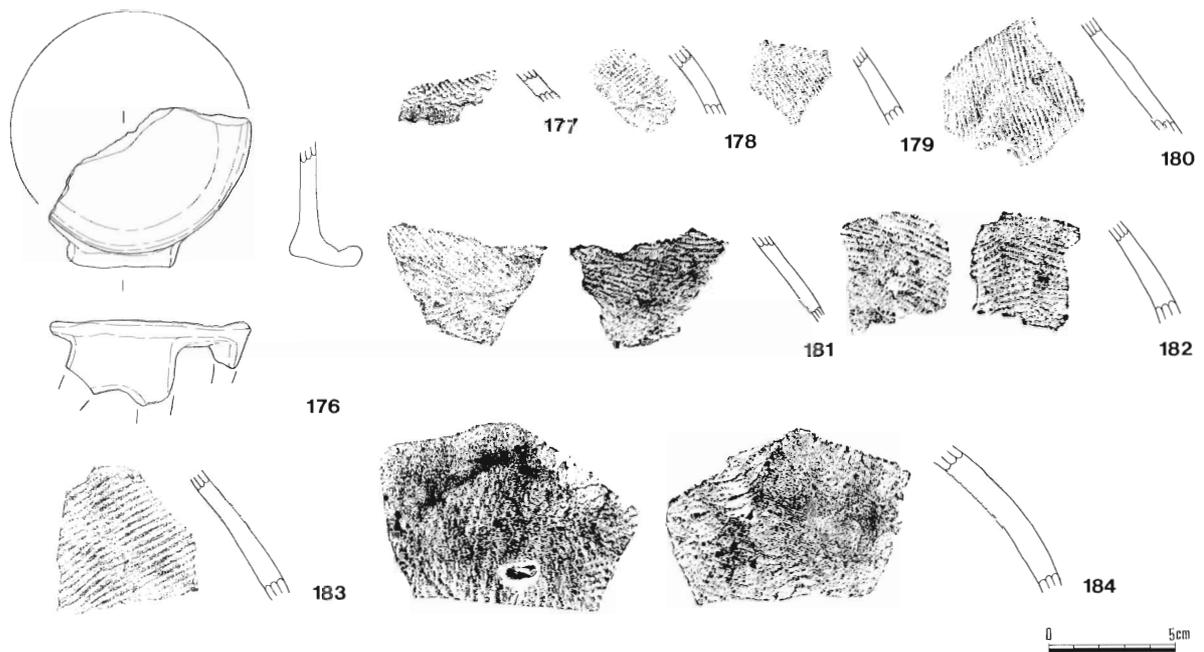
154・155は磨消縄文の土器。154は平縁の土器で、LRの単節斜縄文を地文とする。口縁部に沈線を巡らせ、3条の波状沈線文を施す。以下、横位の沈線がみられる。色調は灰褐色（5YR5/2）で、胎土には細砂を含む。155はLRの単節斜縄文を地文とする。多条の弧線文は入り組み状になろうか。色調は褐灰色（7.5YR4/1）で、胎土には細砂を含む。

156は多条の沈線を直線状・弧線状に組み合わせた土器。直線と弧線の接する部分には刺突文がみられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/1）で、胎土には粗砂を多く含む。

157は直沈線が乱雑に施された土器。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）から灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には粗砂を多く含む。

158は多条の沈線による三角形文・弧線文が施される土器。地文はLRの単節斜縄文で、磨り消されている。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）で、胎土には細砂が含まれるが、精選されている。

3種 堀之内2式土器（159～161）



第30図 包含層出土遺物6 (1/3)

159は薄手の口縁部破片で、刻みが加えられた細隆帯が巡る。横位の平行沈線間にはLRの単節斜縄文が充填される。内面口唇部下は凹線状に僅かにくぼむ。色調は灰褐色(7.5YR4/2)で、胎土には細砂を多く含み、輝石もめだつ。

160・161は薄手の土器で、弧線で文様を描きRLの単節縄文が磨り消される。160は弧線が巴状になる。色調は灰褐色(7.5YR5/2)。161は「8」字状の磨消文様になるうか。色調は褐灰色(7.5YR4/1)。共に胎土には細砂を僅かに含むが、精選されていて緻密である。

第9類 後期後半の土器 (第29図162~169)

1種 加曾利B式土器 (162~168)

粗製土器である。

162・163は紐線文土器。押捺が加えられた隆帯が口唇部と一体化して貼付される。162はやや斜位に条線が施される。内面口唇部下は凹線状に僅かにくぼむ。色調は灰褐色(7.5YR5/2)で、胎土には細砂・白色粒子を含む。163はLRの単節斜縄文が施される。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)で、胎土には細砂を僅かに含む。

164~168は格子目文が施された土器。164は細沈線を口縁部からやや斜位に多段に施し、以下、格子目文になる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)で、胎土には細礫・白色粒子を含む。165は細沈線が格子目状に施される。色調は灰褐色(7.5YR5/2)で、胎土には細砂を僅かに含む。166は格子目文上に3条の太沈線が巡る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)で、胎土には粗砂を僅かに含む。167は器面に指頭によると思われる横位の強いナテ整形痕を残し凹凸がめだつ。色調は褐灰色(7.5YR4/1)で、胎土には細砂を多く含む。168は乱雑に格子目文が施される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)で、胎土には細砂・白色粒子を多く含む。

2種 曾谷式土器 (169)

胴部中位がくびれ腰が張る瓢形の器形が考えられる。上半はLRの単節斜縄文が施され、弧線は入り組み状になろうか。下半は無文になる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には粗砂・細礫を含む。

第10類 土製品（第29図170～175、第30図176）

170～174は土器片錘。170・171・173・174は無文の土器片を利用。170は4.5×4.2cmのほぼ正方形を呈する。重さは18.4g。色調はにぶい褐色（10YR6/3）で、胎土には細砂を僅かに含む。171は4.8×3.8cm、重さ16.8g。短軸に刻みが加えられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）で、胎土には細砂を僅かに含む。173は4.2×2.7cm、重さ11.5g。短軸に刻みを加える。色調は灰褐色（7.5YR4/2）で、胎土には粗砂を含む。174は9.6×5.2cm、重さ55.7g。長軸に刻みを加える。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）で、胎土には雲母細片を僅かに含む。

172は不鮮明であるが単節の縄文が施されている。3.3×2.7cm、重さ11.1g。刻みは長軸に加えられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）で、胎土には細砂を僅かに含む。

175は土製円盤。径3.4cm、重さ9.5g。無文の土器片を利用して、円形に整えている。色調は灰褐色（7.5YR/2）で、胎土には粗砂を含む。

176は器台形土器か。推定径5.2cm。周縁は縁取りされるように高くなる。上面は丁寧に磨かれている。脚台部は五徳状になろうか。色調は褐灰色（10YR5/1）で、胎土には細砂を僅かに含む。

以上の遺物は、縄文時代中期の所産とみて大過ないものと思われる。

第11類 石器（第31～33図）

1～2は石鏃、3～11は打製石斧、12は削器、13はスタンプ石器、14は礫器、15～19は石皿、20は石核である（第5表参照）。

（2）弥生時代の遺物（第30図177～182）

後期後半の土器である。

177～179は壺形土器の肩部破片。177は2条の結節文で体部と区画し、RLの単節斜縄文が施される。体部は赤彩される。色調はにぶい黄褐色（10YR6/3）で、胎土には細砂を僅かに含む。178は3条の結節文で体部と区画し、結束の羽状縄文を施す。体部は赤彩される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/2）で、胎土には粗砂と赤色粒子を含む。179はLRの単節縄文を羽状に施す。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）で、胎土には細砂を僅かに含む。

180～182は甕形土器の体部破片。180は斜位にハケ目痕を残す。色調は褐灰色（5YR4/1）で、胎土には粗砂を含む。181・182は内外面ハケ目痕を残す。181の色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）で、胎土には細砂を含む。182の色調は灰褐色（7.5YR5/2）で、胎土には粗砂を僅かに含む。

（3）古墳時代の遺物（第30図183・184）

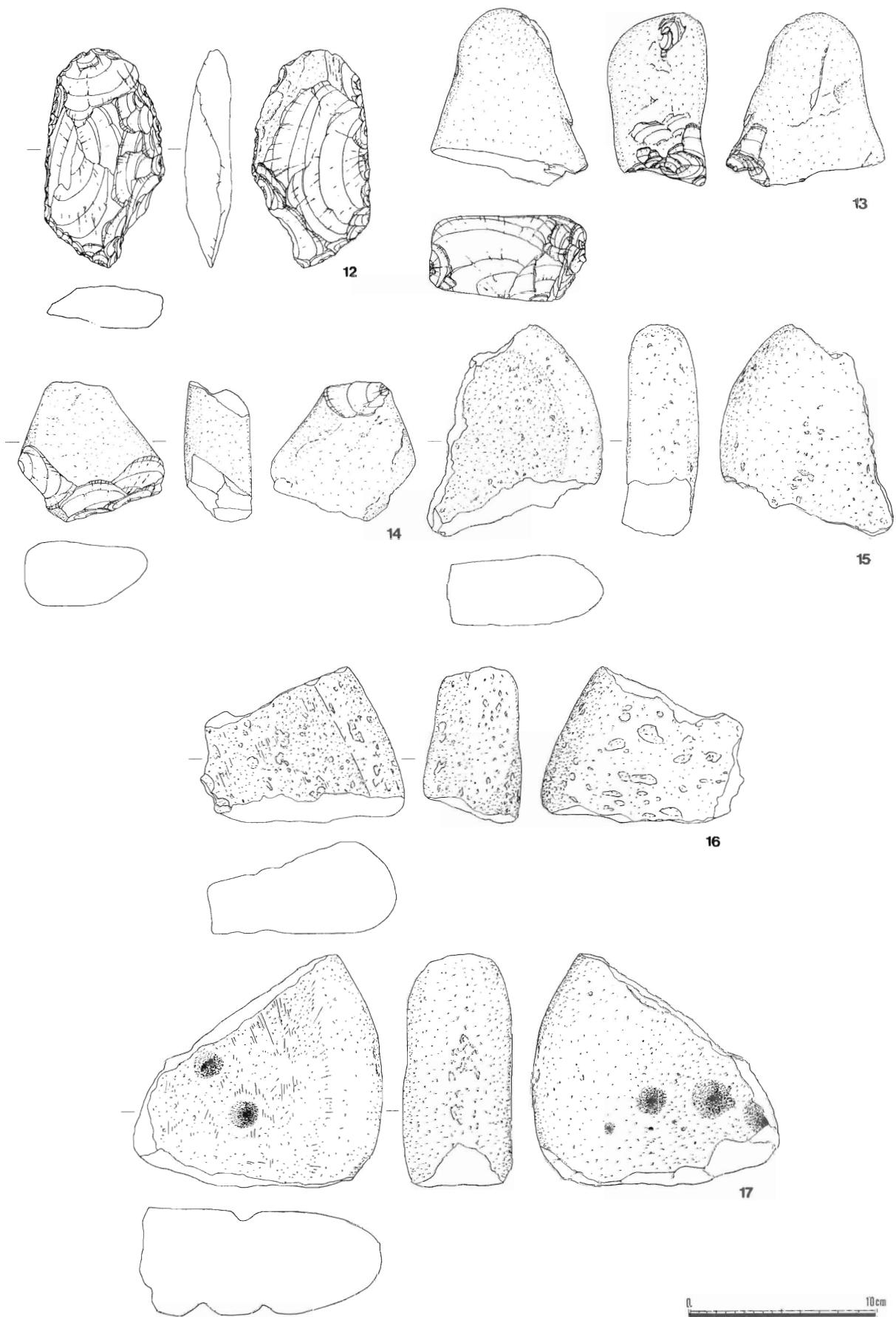
後期の須恵器甕形土器である。

183は平行叩き目痕を残す。色調は灰黄色（10YR6/2）で、胎土には粗砂を僅かに含む。

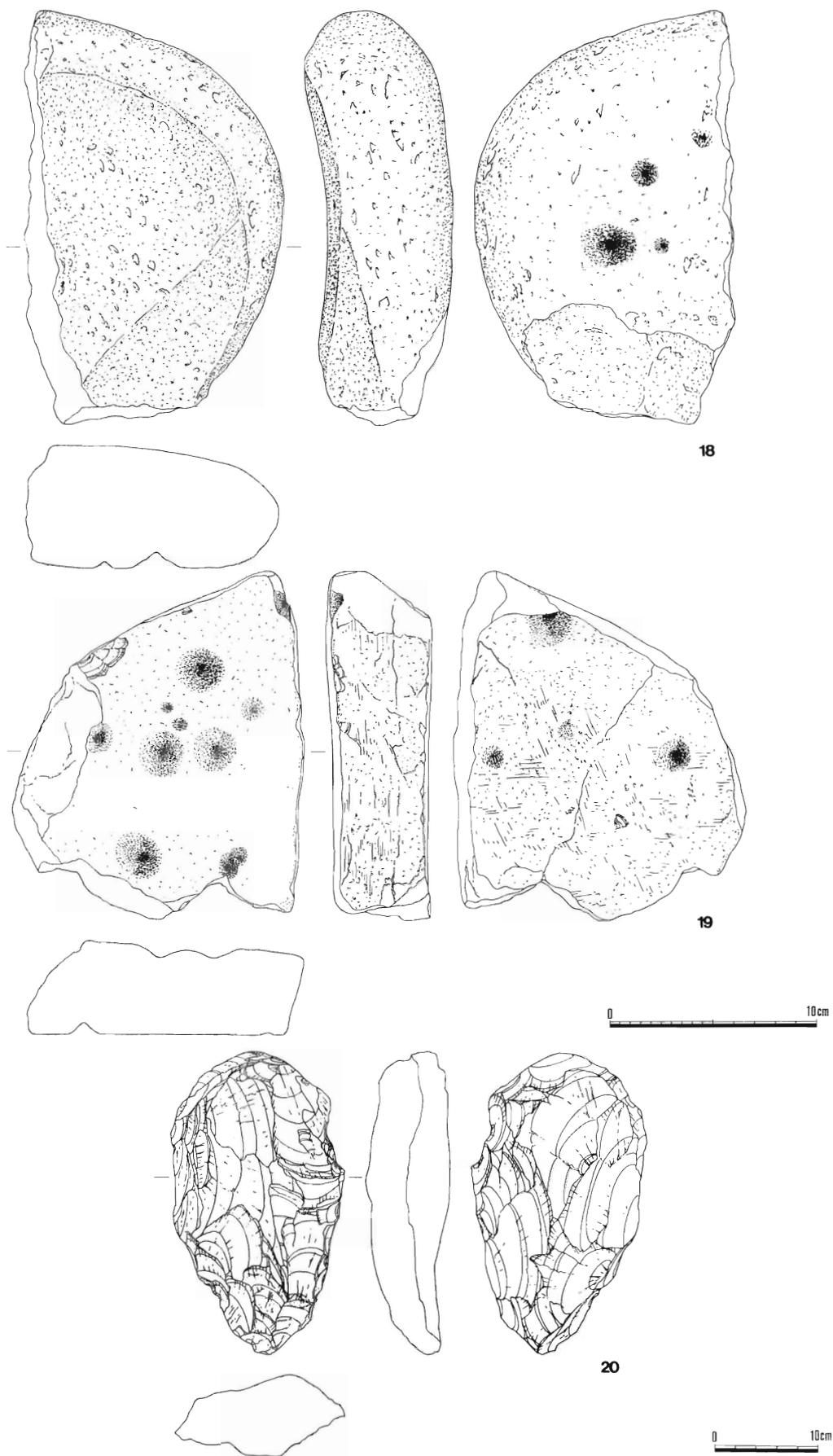
184は外面に縄目叩き目痕、内面には青海波当て板痕を残す。色調は褐灰色（10YR5/1）で、胎土には粗砂を多く含む。



第31图 包含層出土石器 1 (2/3 · 1/3)



第32图 包含層出土石器 2 (1/3)



第33图 包含層出土石器 3 (1/3 · 1/6)

(単位cm・g)

図版番号	器種	形態	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
第31図1	石 鏃	凹基	チャート	22.92	16.63	3.52	1.1
第31図2	石 鏃	凹基	黒曜石	12.80	12.45	3.19	0.3
第31図3	打製石斧	短冊	結晶片岩	80.35	38.85	16.54	77.3
第31図4	打製石斧	短冊	ホルンフェルス	132.31	51.42	26.74	210.9
第31図5	打製石斧	短冊	砂岩	120.38	46.51	21.59	141.1
第31図6	打製石斧	撥	頁岩	93.43	51.38	13.88	74.9
第31図7	打製石斧	撥	砂岩	86.61	62.32	26.31	188.8
第31図8	打製石斧	分銅	砂岩	93.93	59.26	17.11	115.6
第31図9	打製石斧	分銅	砂岩	78.81	68.06	14.76	104.5
第31図10	打製石斧	分銅	粘板岩	106.10	75.72	22.69	222.5
第31図11	打製石斧	抉入	砂岩	156.26	72.52	25.12	318.1
第32図12	削 器	片刃	ホルンフェルス	119.23	63.70	24.81	203.5
第32図13	スタンプ形石器		頁岩	96.75	83.99	52.62	542.9
第32図14	礫 器	片刃	砂岩	77.23	78.50	35.33	231.9
第32図15	石 皿		安山岩	115.33	93.88	37.91	446.0
第32図16	石 皿		安山岩	85.08	109.17	52.49	485.7
第32図17	石 皿	両面凹	花崗閃緑岩	126.34	134.31	59.38	1,401.6
第33図18	石 皿	裏面凹	安山岩	204.70	127.17	63.61	2,280.7
第33図19	石 皿	両面凹	砂岩	172.69	142.16	51.83	1,588.5
第33図20	石 核		ホルンフェルス	297.16	168.18	82.34	4,115.6

第5表 包含層出土の石器観察表

第4章 まとめ

城山遺跡は、現在まで44地点の発掘調査が実施され、旧石器時代・縄文時代草創・早・前・中期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡として判明している。そして本報告は、平成4年度に発掘調査が実施された第15地点と第16地点の調査成果を収録したものである。

ここでは、これら2地点の調査所見をまとめることにする。

1. 城山遺跡第15地点

第15地点は、志木市立志木第3小学校の西校舎裏の道路工事に伴い発掘調査が実施されたものである。この調査は、終始大変苦勞したものであったと言えよう。それは、昭和50年代に今の西校舎の移築工事が施工された際に上・下水道管やガス管などの配管が同時に埋設されたと考えられるが、その配置図が残っていなかったことにある。そのため、調査初日から、注意しながら、重機により表土剥ぎ作業を行ったが、結局水道管を破壊してしまい、調査区域内には大量の水を冠水させてしまった。しかし、どの水道管を破壊したのか、どの止水栓を止めれば水を止められるのか、市役所水道部に立ち会ってもらうがすぐに対処できるものではなかった。さらに、検出された遺構として、地表からの深さ3.7mの柏城関連の大堀（12号溝跡）があったことも付け加えることができる。狭小な面積の中、大堀を断面方向ではなく、走向方向に対し縦に半截する形となってしまったからである。何とか調査を完了できたが、今から思うと危険を伴った調査であったと言える。

さて、今回の第15地点の調査では、古墳時代後期の住居跡6軒、中・近世の溝跡2本・土坑1基が検出された。特に、12号溝跡に関しては、『館村旧記』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」（第34図）の本丸を囲む大堀に相当する可能性があり、貴重な発見につながったと言えよう。

この屋敷割図に示される堀については、昭和49（1974）年に実施された発掘調査によって、中世に比定される溝跡の一部が確認されているが、本格的にその解明に拍車をかけたのが、昭和55（1980）年の市史編さん室により実施された発掘調査であった。その後の昭和60（1985）年には、志木市遺跡調査会により発掘調査が実施され、その屋敷割図の配置通りに三の丸大堀に相当する堀跡が確認されたことから、その資料の信憑性が確かめられている。

しかし、その屋敷割図に示されていない多くの溝跡が、平成2（1990）年の第12地点や平成5（1993）年の第18地点の調査により確認されているのも事実である。この『館村旧記』の「柏之城落城後の屋敷割の図」は、享保12～14（1724～1729）年に執筆されたものであることから、江戸時代中期の様子を描いた宅地図である。つまり、18世紀前半頃には、大堀に相当する大規模な堀は、残存していたと思われるが、それ以外の小・中規模のは堀跡等については、図示されていないため、すでにすべて埋め戻されていた可能性がある。

今回検出された本丸の大堀に相当すると考えられる12号溝跡についても1～5層はロームブロックを主体とする人為的な埋設土と考えられ、その土層中から、図版5-4のような肥前系磁器（18世紀後半）などが出土することは、時期的に『館村旧記』の執筆後に最終段階の大規模な大堀埋め戻し作業があったことが推測できる。ただ、『新編武蔵風土記稿』（註2）の中で、「一今は畑となりしかど、虚堀のあと土手の状などわづかに残りて一」と柏城についての記載があることに注意される。つまり、この『新編武蔵風土記稿』が完成されたとする文政11（1828）年直前までは、記事にあるように柏城の大堀や土

手などの痕跡が確認されていたことになる。そう考えるならば、前述したように最終段階の大規模な大堀埋め戻し作業は、完全な形で埋め戻されたのではなく、ある程度の窪みを残したままで終了していたと見るべきであろう。

写真1は、平成13年3月に柏城の三之丸の大堀に相当する部分を撮影したものである。この部分は、この写真を撮影後、盛土が施され、今では見ることはできないが、確かに大堀があったであろう部分の窪みがはっきりと確認することができる。

2. 城山遺跡第16地点

第16地点は、マンション建設に伴い発掘調査が実施されたものである。本地点は城山遺跡の北東端に位置し、東側に大きく開析された谷地形に入り込む斜面地に存在する。そのため、本地点では、通常確認面とするローム面までは黒色土を基調とする土層が厚さ80cm以上堆積しており、その土層中からは、市内初となる縄文時代草創期の爪形文系土器をはじめ多くの縄文土器が出土した。今回はその調査区内のすべてを調査した訳ではないが、調査区内には縄文時代の土器を主体とする遺物包含層が発達しているものと理解することができる。

また、今回の報告書刊行に伴い、整理作業を進めてきたわけであるが、発掘調査当時にはかなり詳細に遺物の分布図を作成する目的で遺物出土状態の実測を行っているが、残念にもその後の管理の悪さにより、遺物と図面を照合することはできず、第5節の包含層出土遺物としての遺物の掲載に留めざるを得なかった。さらにI区で1号集石が1基検出され、同時に遺物が数点出土しているが、これについても遺物が行方不明であり、掲載することができなかったことをお詫び申し上げる次第である。

さて、本地点からは、縄文時代の集石1基、平安時代の住居跡1軒、中・近世の溝2本・土坑1基・井戸跡2基が検出されている。特に、14・15号溝跡については、平成2年に発掘調査が実施された第12地点で検出された溝跡と関連があるものと思われる。可能性として、前項の第15地点から検出された12号溝跡同様に柏城の堀跡に関連する遺構と考えられる。そこでもう一度、第34図の屋敷割図を参照する



写真1 柏城大堀跡（平成13年3月撮影）

と本地点に該当する地区には屋敷が構えられており、堀等は確認できない。となれば、『館村旧記』が執筆されたとされる享保12～14（1727～1729）年には、すでに、埋め戻されていた可能性がある。おそらく、第12地点や今回検出された溝跡については、柏城の西之丸に対する東之丸に関連する施設の可能性があると思われる。

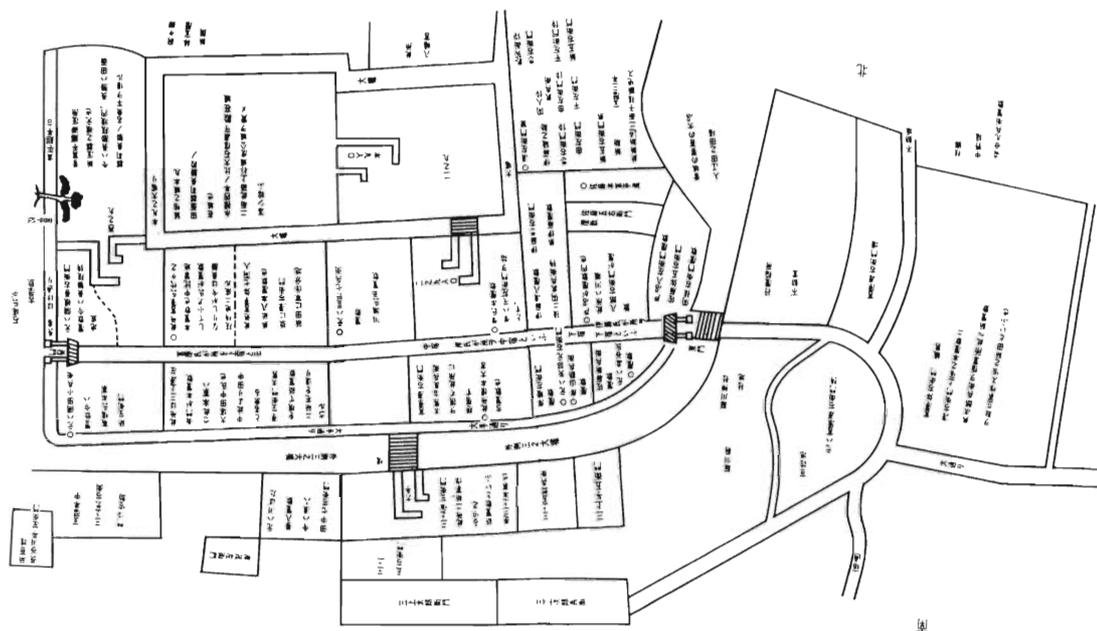
3. 発掘調査の成果からみた柏城について

現在までの発掘調査により、柏城のすべてが解明されたというには、到底及ばないであろう。前項でも触れたように昭和55（1980）年の市史編さん室や昭和60年（1985）年の志木市遺跡調査会によって実施された発掘調査を契機に明らかに第34図に提示した柏城落城後の屋敷割の図に相当する大堀跡が確認されているが、今日に至ってもまだ柏城の実体を確認したに過ぎないと言える。

第34図は『館村旧記』にある「柏之城落城後の屋敷割の図」を第35図と南北軸を合わせるために上下逆さまに転写したものである。第35図は今までの発掘調査で検出された柏城に関連すると思われる溝跡を白図上に合成したものである。

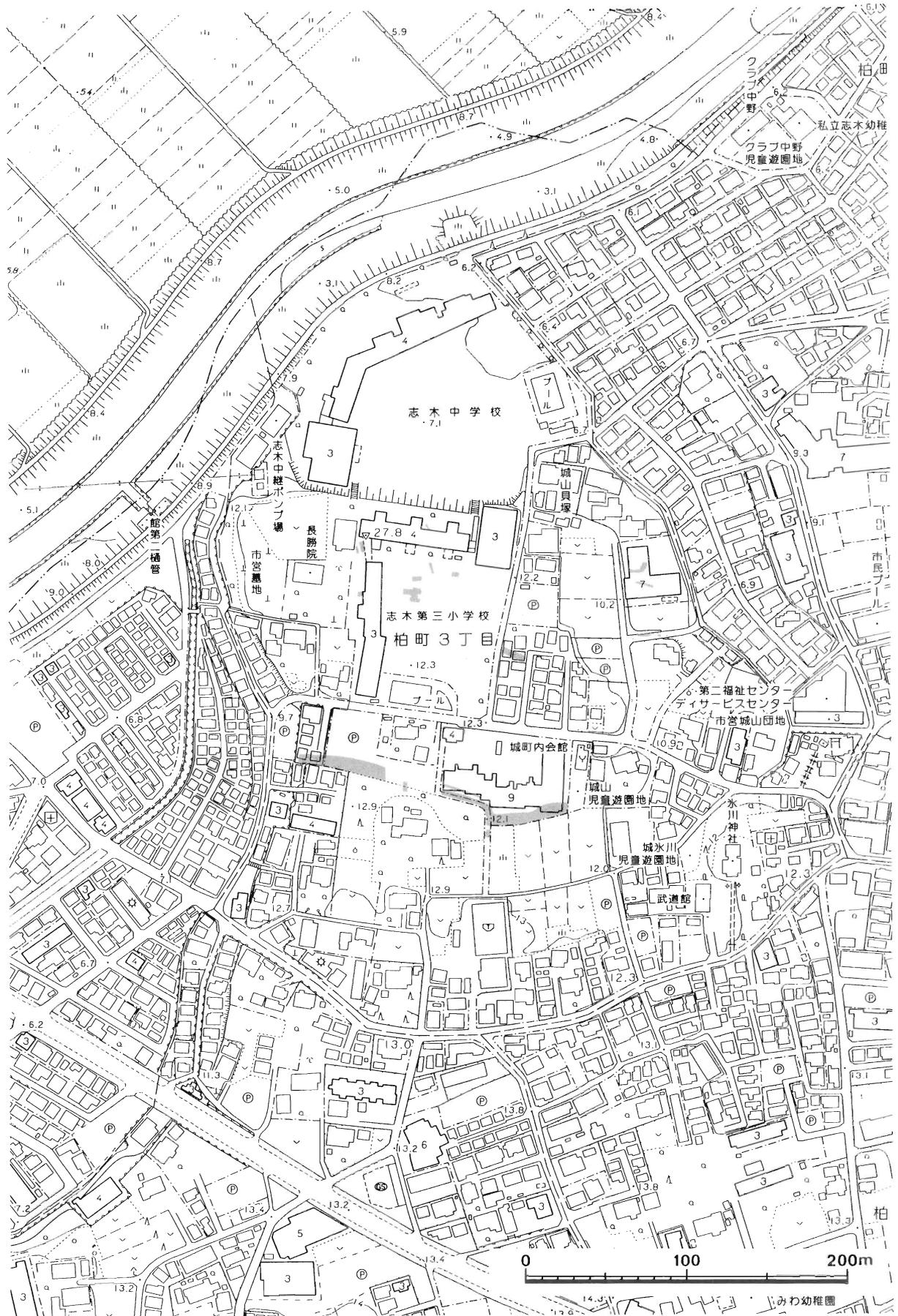
以下、現在までに確認された柏城関連と思われる遺構についてを列記することにする。

- ① **三の丸大堀跡**—昭和55（1980）年の市史編さん室による調査、昭和60（1985）年の志木市遺跡調査会による第1地点、平成13（2001）年の志木市遺跡調査会による第42地点から確認されている。規模については、市史編さん室の調査から、深さが地表から4.7m、上幅は推定で12.2m、下幅は1.6mである。
- ② **本丸大堀**—本報告に掲載した第15地点の12号溝跡が相当する。規模は、深さが地表面から3.7m前後、推定で上幅約9m、下幅約1mにも及ぶ可能性がある。
- ③ **その他**—以下のように『館村旧記』の「柏之城落城後の屋敷割の図」に示されていない遺構についても柏城関連のものと考えられる。



第34図 柏城落城後の屋敷割の図

(上下を逆さまに転写)



第35図 柏城の関連遺構

昭和49（1974）年の市史編さん室によるA地点の調査により、本丸跡内を南北に走向する深さ1.1m（確認面から）・上幅1.8m・下幅0.9mの溝跡1本が検出されている。

昭和57（1982）年の市史編さん室によるB地点の調査でも、本丸跡内を南北に走向すると思われる溝状遺構が検出されているが、詳細不明である。

平成2（1990）年には、本報告の第16地点のすぐ南側で道路改良工事が行われ、その工事に伴う調査で、中・近世の所産と思われる溝跡4本・井戸跡1基・地下式坑2基が検出されている。

また、平成5（1993）年には、志木市立志木第3小学校の校庭の雨水流水抑制工事に伴い実施された第18地点の調査で、本丸跡内に相当する位置から溝跡6本・土坑6基が検出されている。

平成6（1994）年、志木市遺跡調査会で実施された第26地点でも二の丸跡内から東西方向に走向する中規模の溝跡1本が検出されている。

本報告の14・15Mの2本の溝跡が検出された第16地点は、『館村旧記』の「柏之城落城後の屋敷割の図」で二の丸大堀の東側の「清左衛門躰、伊藤縫之助、忠右衛門倅、由左衛門倅、宇左衛門倅…」と書かれた屋敷部分に相当する。この時点では、これらの溝跡は跡形もなく埋め戻されていた可能性がある。

また、第35図では、最大の防御施設であると考えられる三の丸大堀は、西側に至っては台地下の低地にそのまま移行し、東側では、行屋稲荷の手前で城山遺跡と中野遺跡を区切る谷に吸収あるいはその谷をうまく共有し利用したと思われる。北側は、現在の志木第3小学校（当時は足立中学校）の建設工事により台地縁辺部がかなり掘削されているが、城山貝塚のラインに沿ってかなり広がっていたものと考えられる。

柏城の外側を概観すると、西側から北側、そして東側にかけては全体に柳瀬川に開析された低地であり、南側は武蔵野台地の奥方向に向いていることが理解できる。そのため、外敵には最も弱いと考えられる南側に人工的な大堀を掘る必要があり大規模工事を行ったことが想像されるが、実際には武蔵野台地の北端という自然地形を十分に考慮して最大限にコストを抑えることに成功した要塞であったと言えることができるであろう。

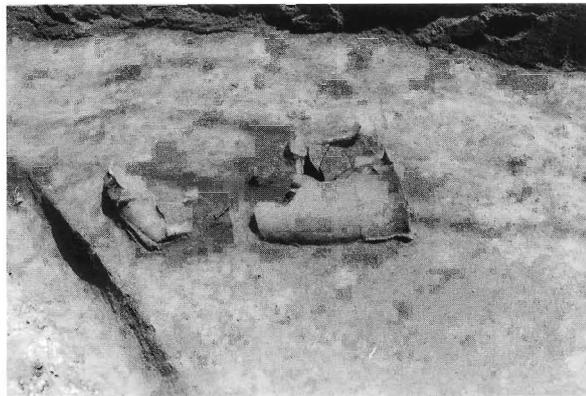
註

- (1) 『館村旧記』は、館村(現在の志木市柏町・幸町・館)の名主であった宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14(1727～1729)年にかけて執筆したものである。
- (2) 『新編武蔵風土記稿』は、昌平黌地理局総裁林述斎編。全265巻で、文政11（1828）年に成立。

版 图



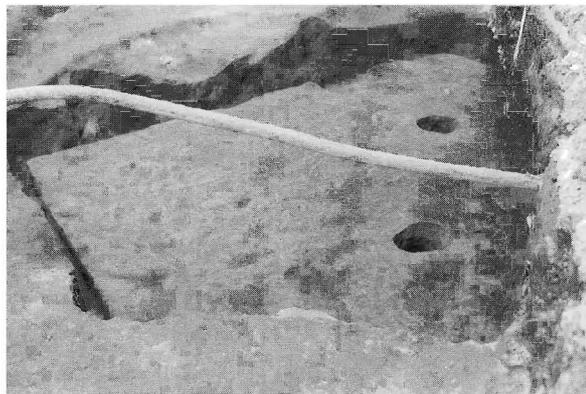
1. 82号住居跡遺物出土状態



2. 82号住居跡遺物出土状態



3. 82号住居跡



4. 83号住居跡



5. 84号住居跡遺物出土状態



6. 84号住居跡遺物出土状態



7. 84号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



8. 84号住居跡



1. 85号住居跡遺物出土状態



2. 85号住居跡



3. 86号住居跡遺物出土状態



4. 86号住居跡遺物出土状態



5. 12号溝跡発掘風景



6. 12号溝跡発掘風景



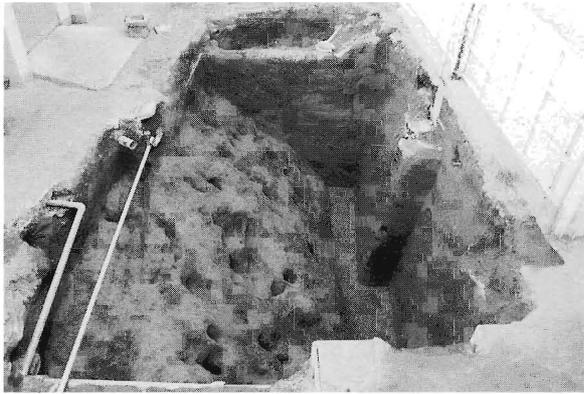
7. 12号溝跡遺物出土状態



8. 12号溝跡遺物出土状態



1. 12・13号溝跡 (I区)



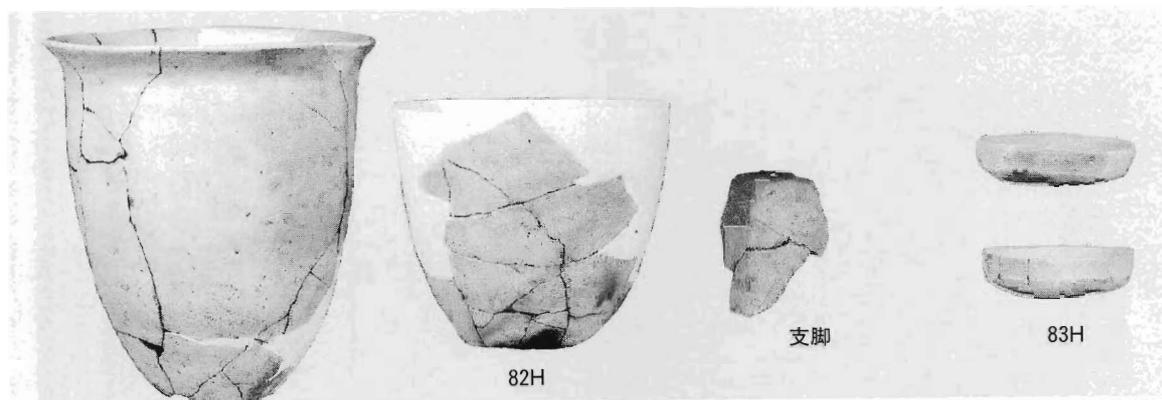
2. 12・13号溝跡 (I区)



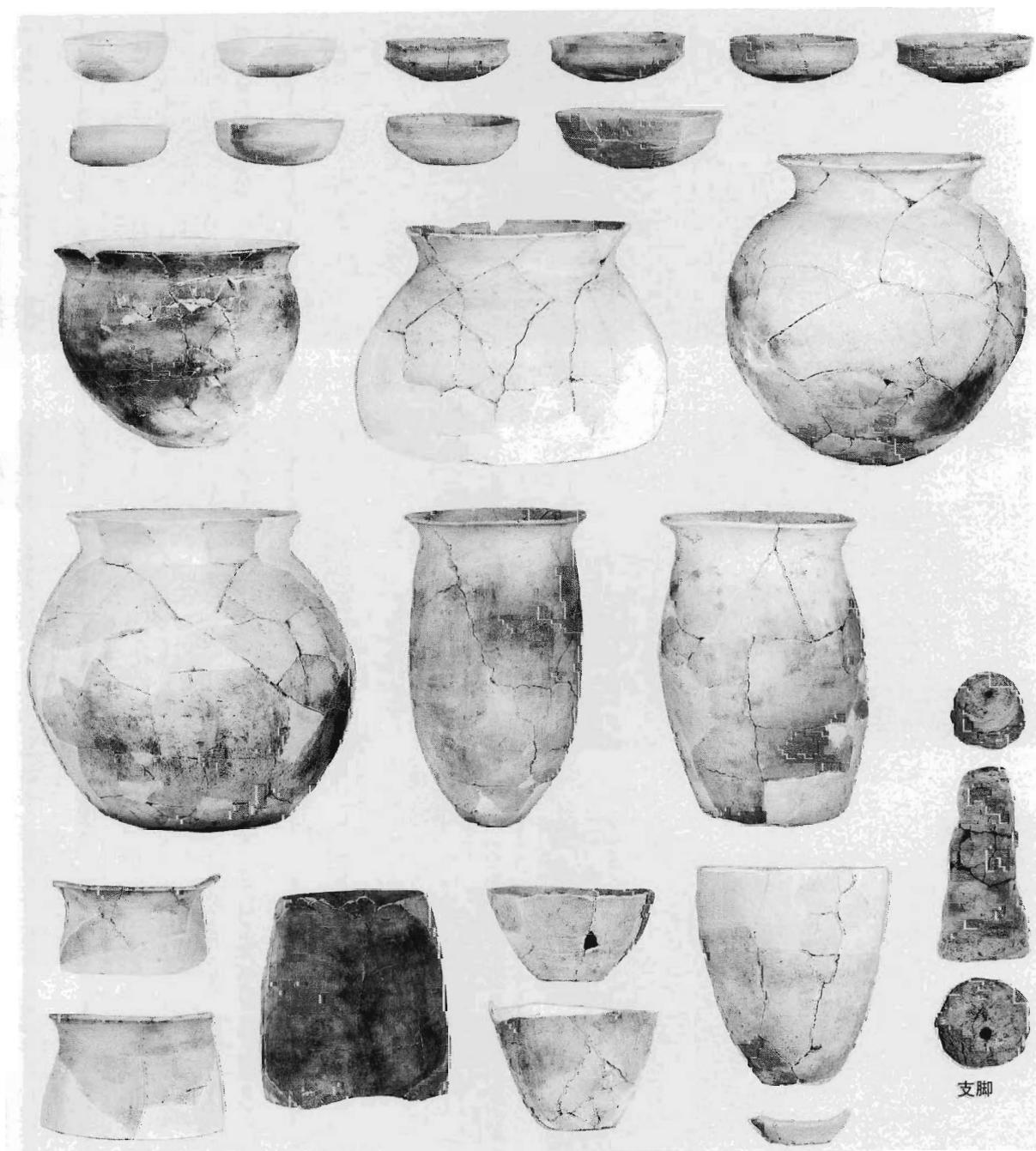
3. 12号溝跡土層断面



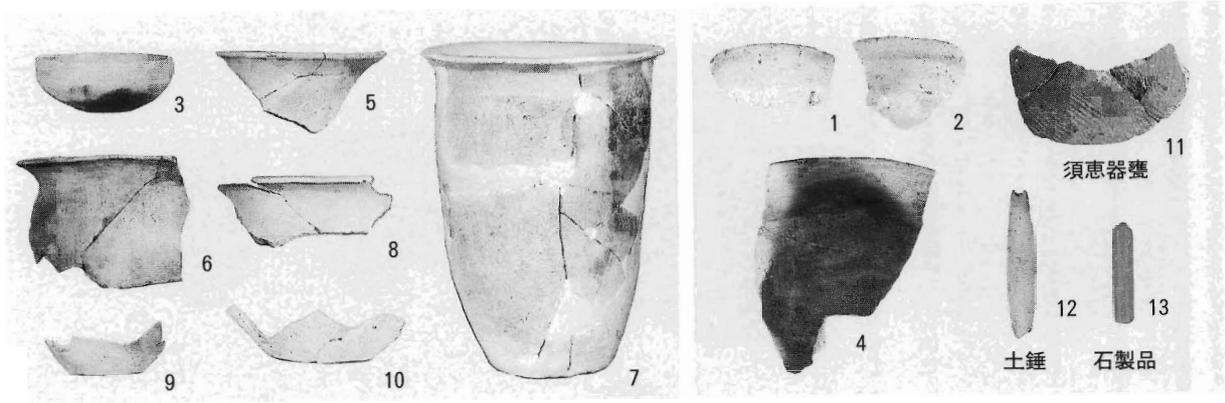
4. 13号溝跡



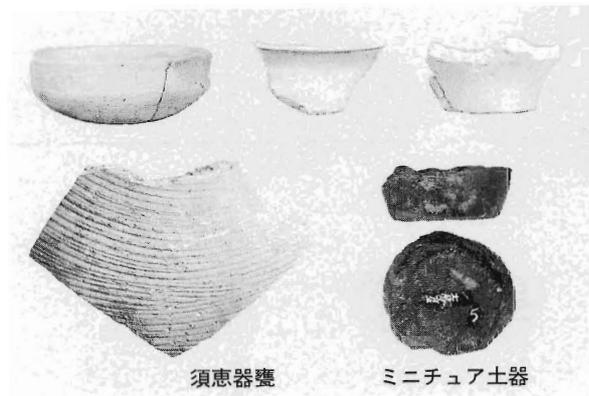
1. 82・83号住居跡出土遺物



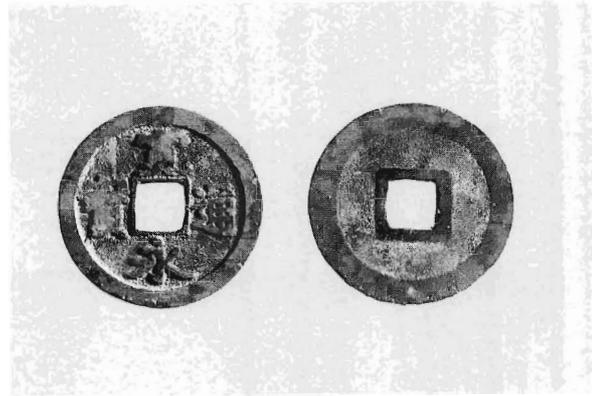
2. 84号住居跡出土遺物



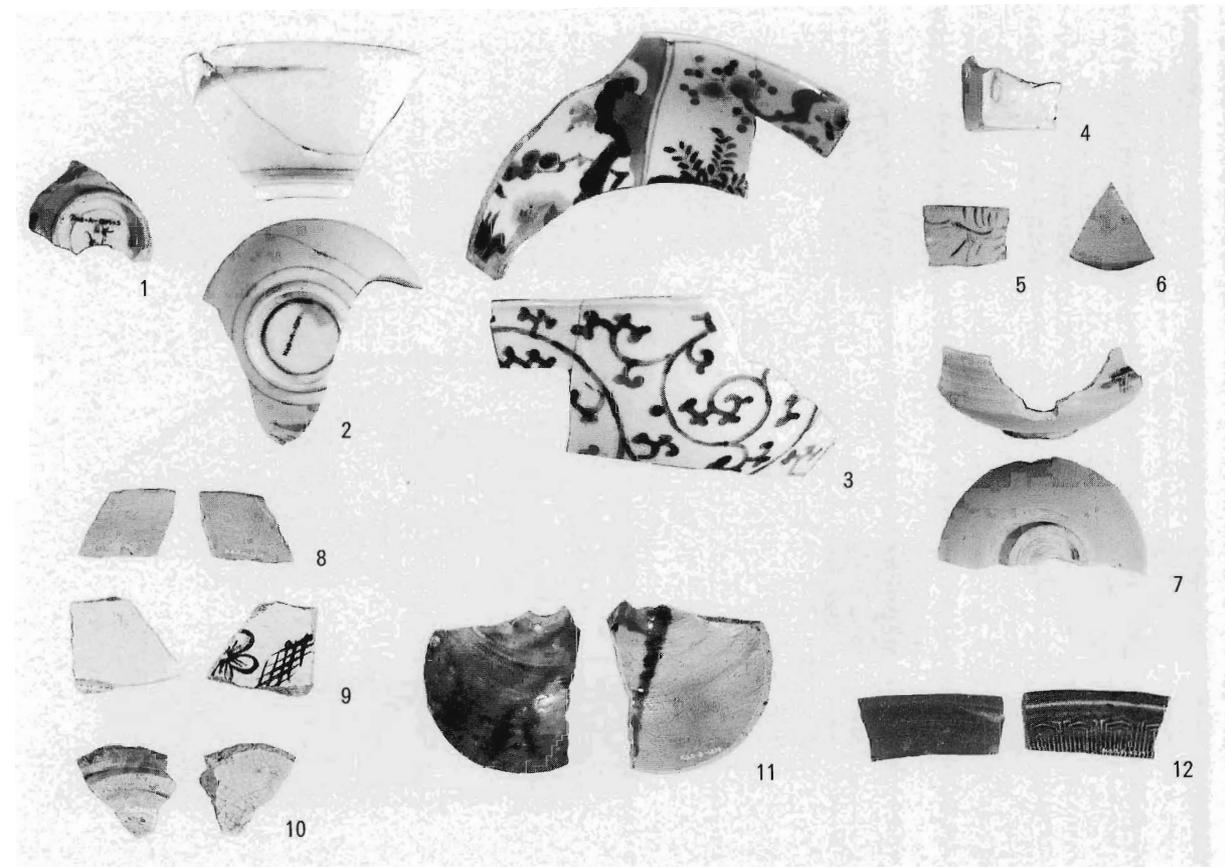
1. 85号住居跡出土遺物



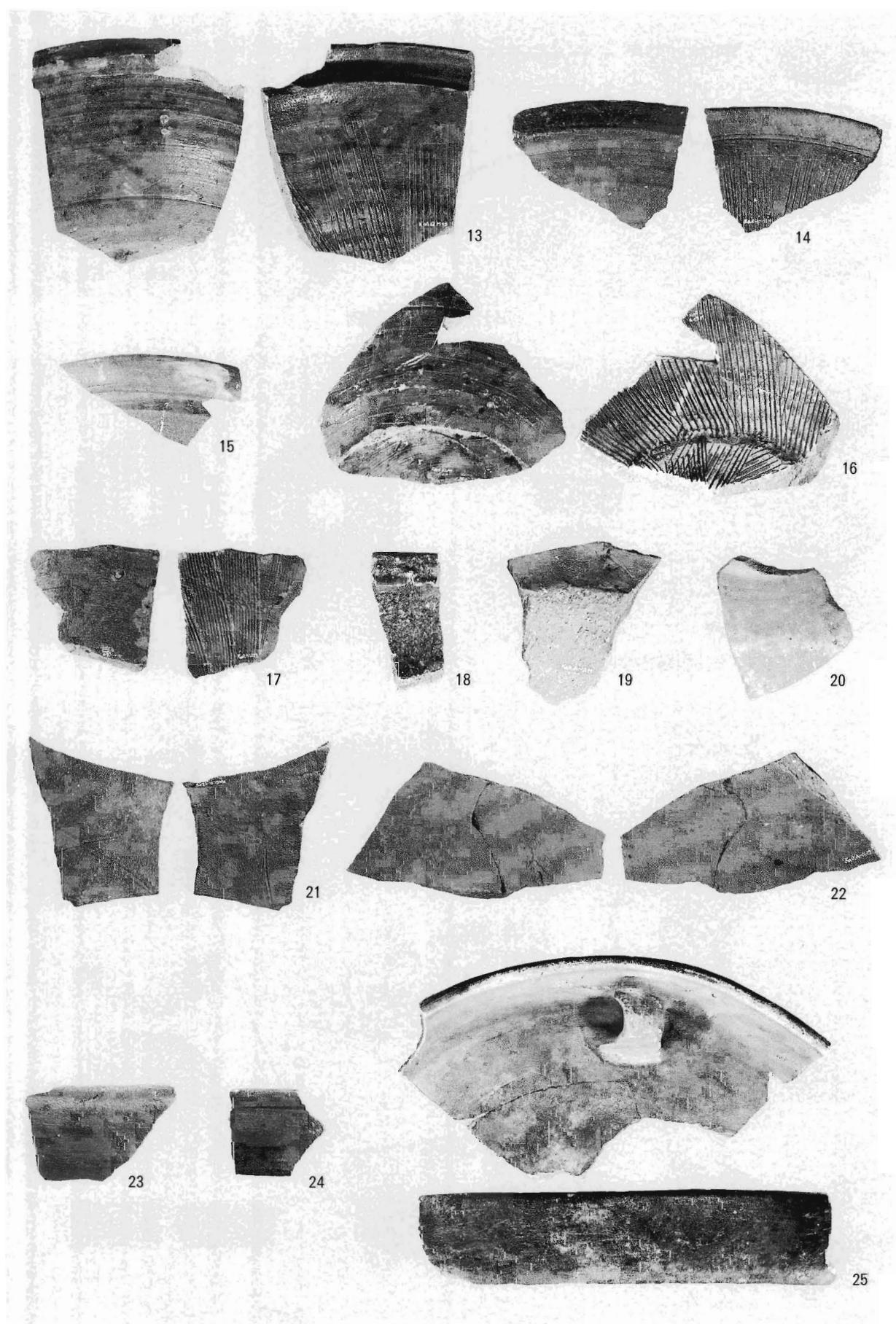
2. 86号住居跡出土遺物



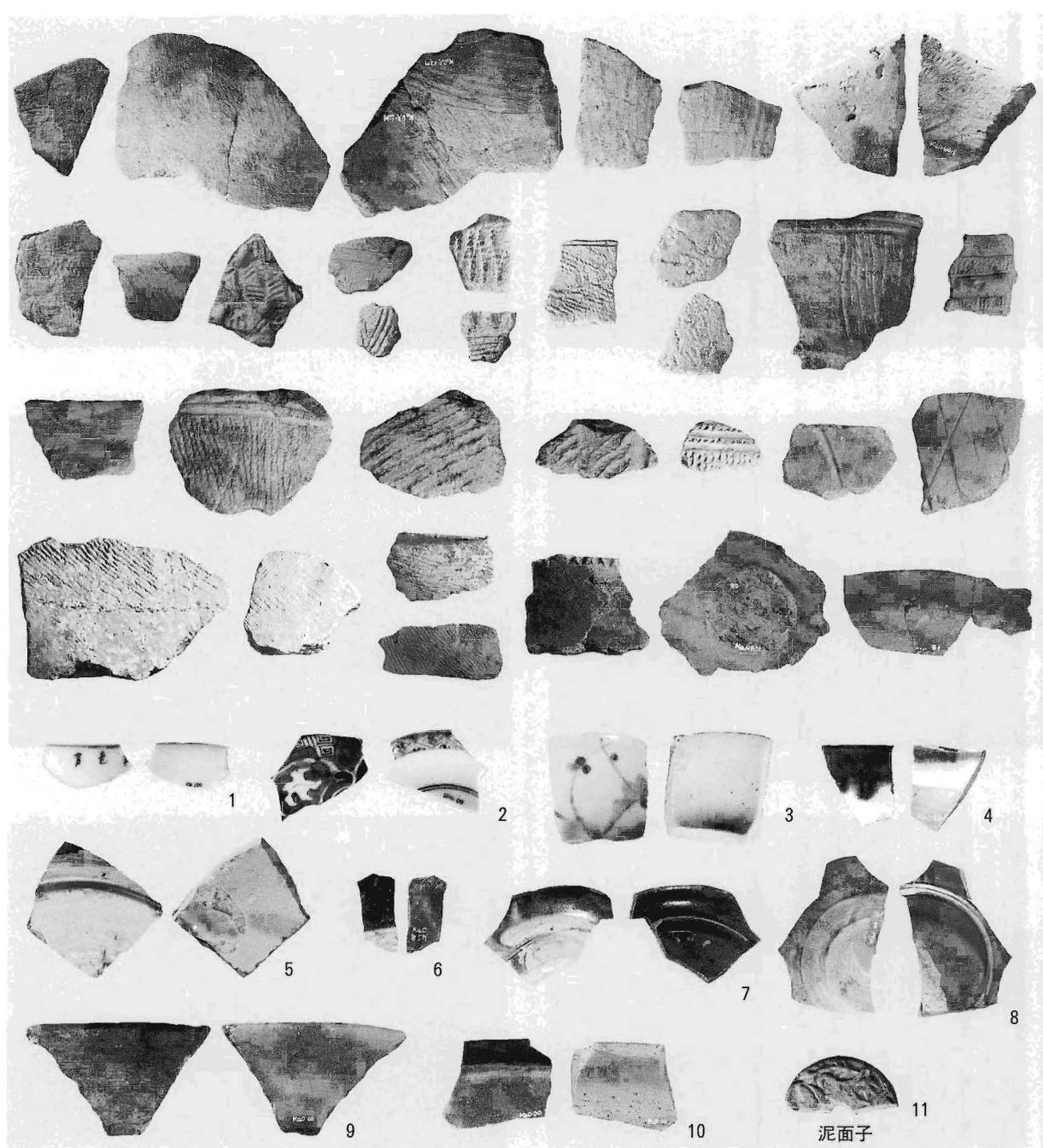
3. 12号溝跡出土古銭



4. 12号溝跡出土遺物



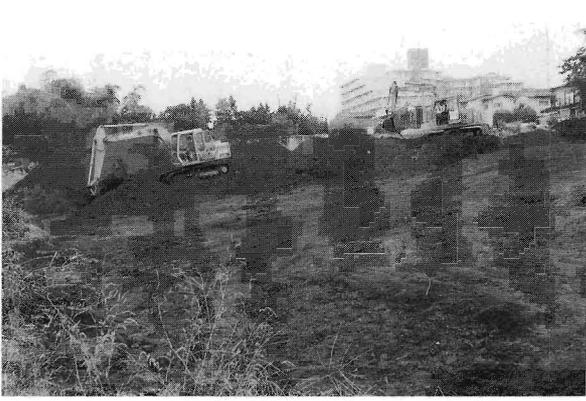
12号溝跡出土遺物



1. 遺構外出土遺物



2. 遺構外出土石器



1. 確認調査風景



2. 1号集石



3. I区調査風景



4. I区遺物出土状態



5. 87号住居跡



6. 14号溝跡



7. 14号溝跡



8. 14号溝跡



1. 14号溝跡



2. 14号溝跡



3. 15号溝跡発掘風景



4. 15号溝跡



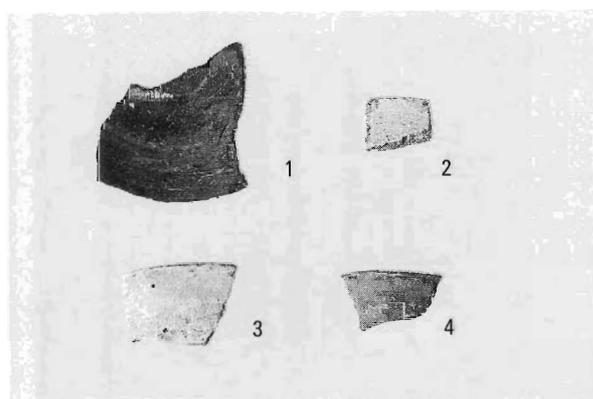
5. 13号井戸跡



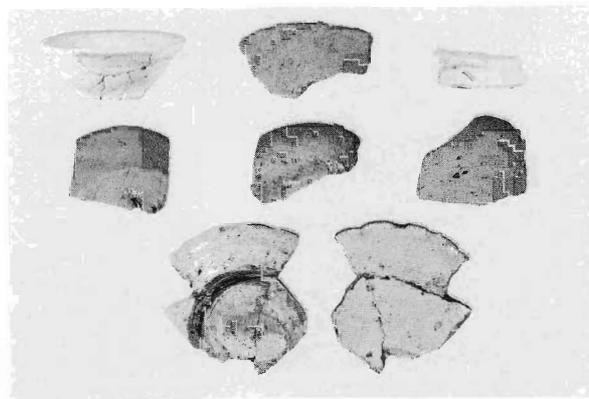
6. 14号井戸跡



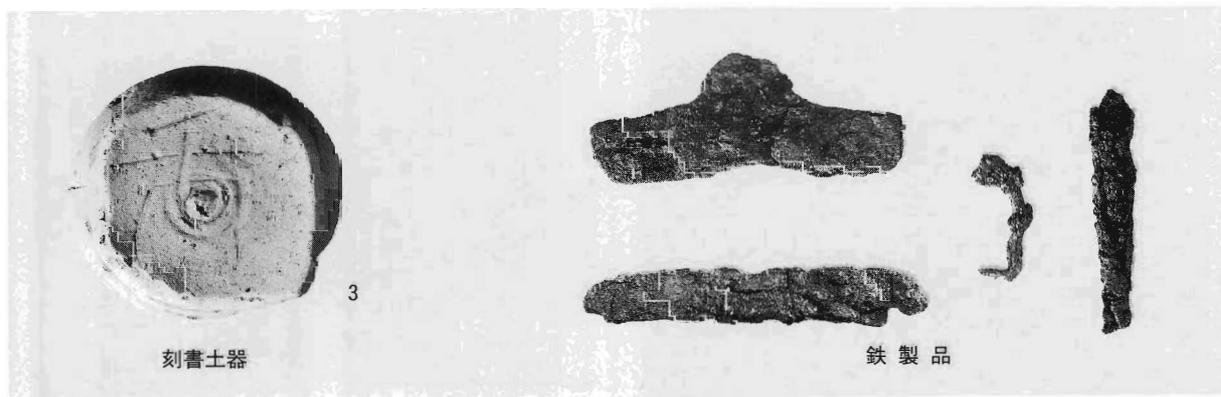
1. I区出土の古墳・平安時代の遺物



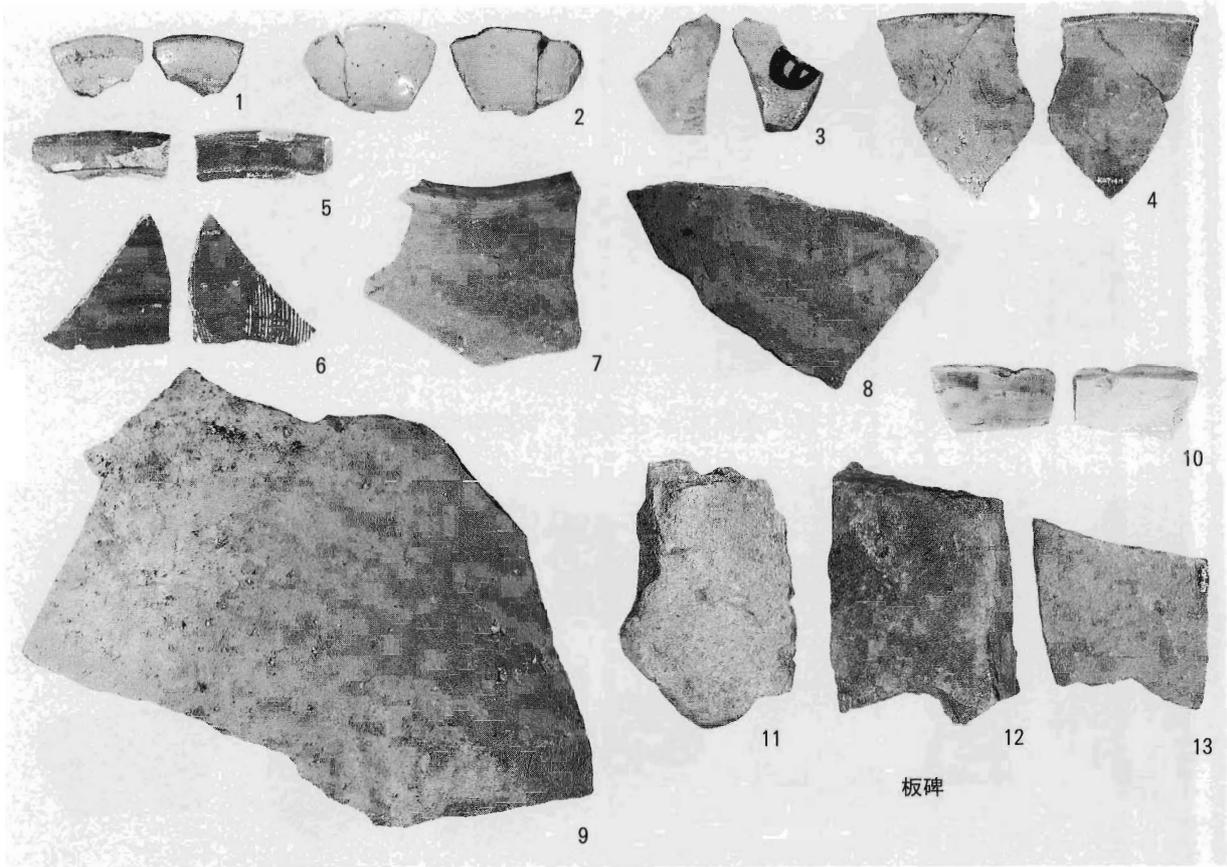
2. 87号住居跡出土遺物



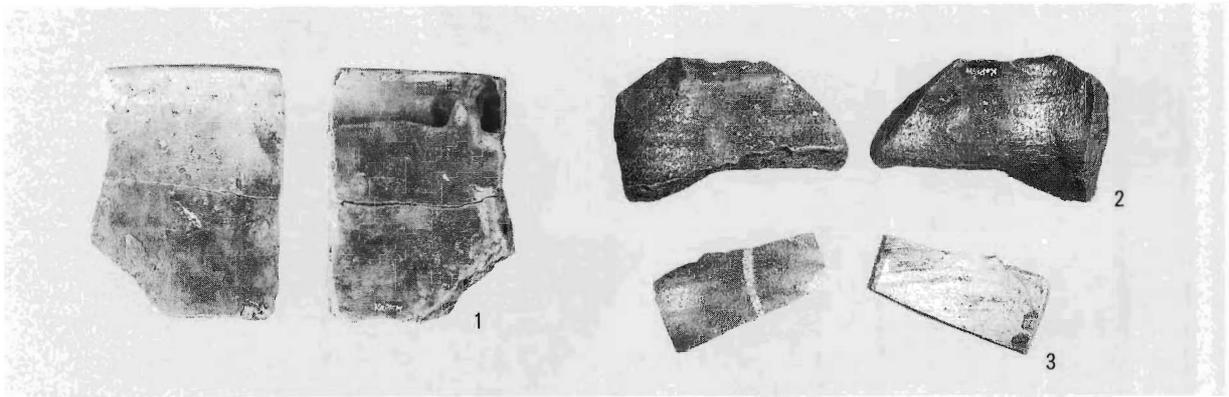
3. 14号溝跡出土遺物



4. 14・15号溝跡出土遺物



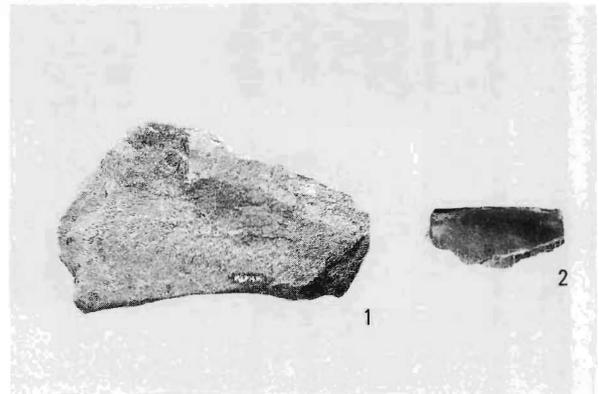
1. 14号溝跡出土遺物



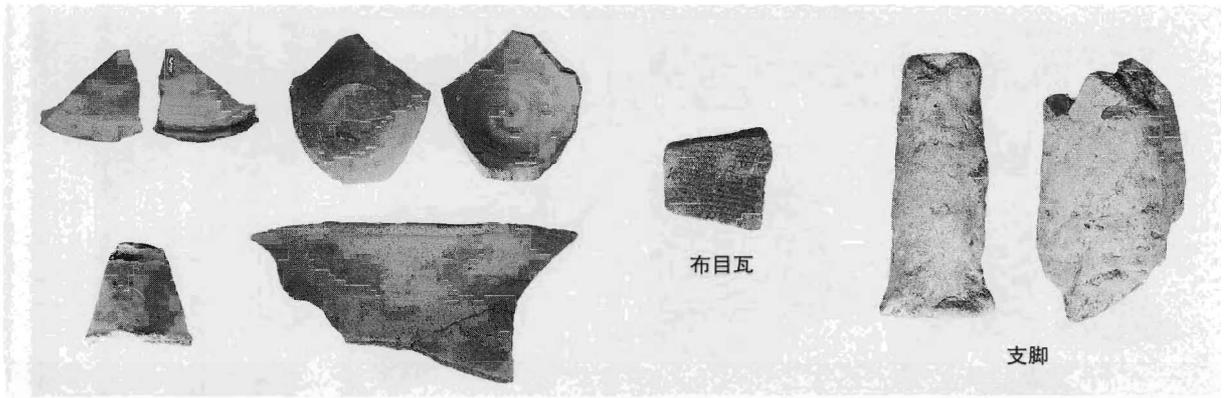
2. 15号溝跡出土遺物



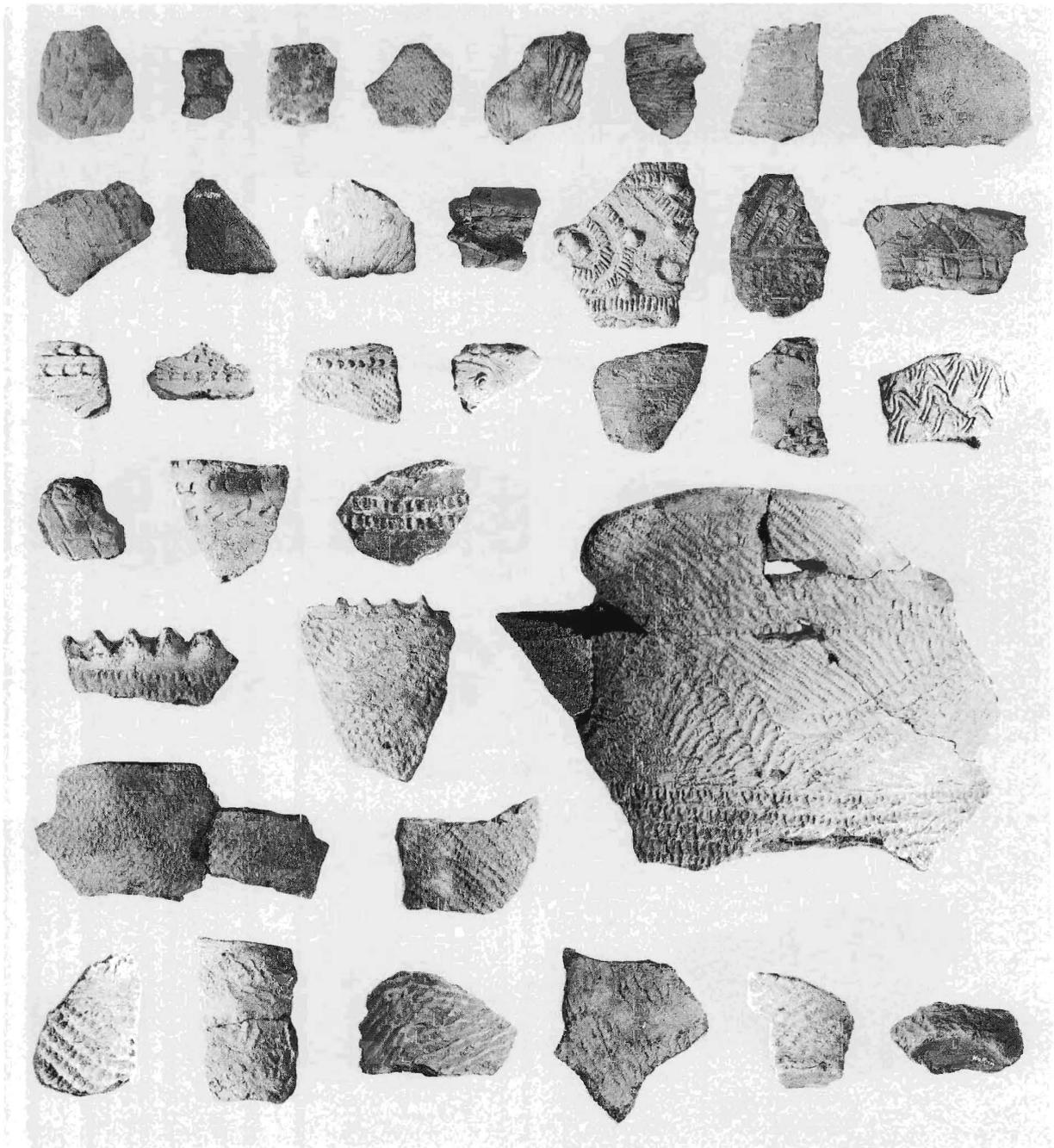
3. 15号溝跡出土遺物



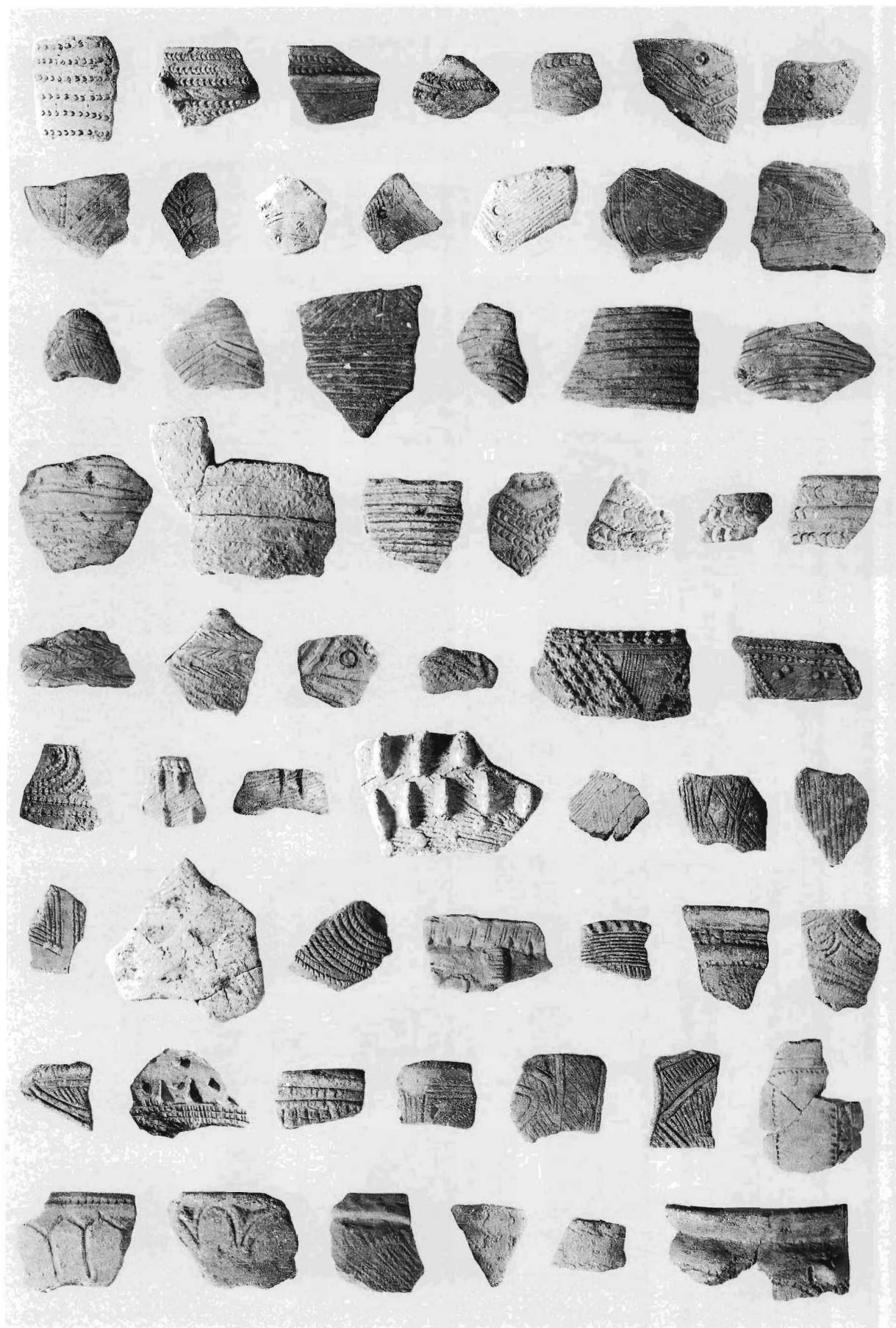
4. 14号井戸跡出土遺物



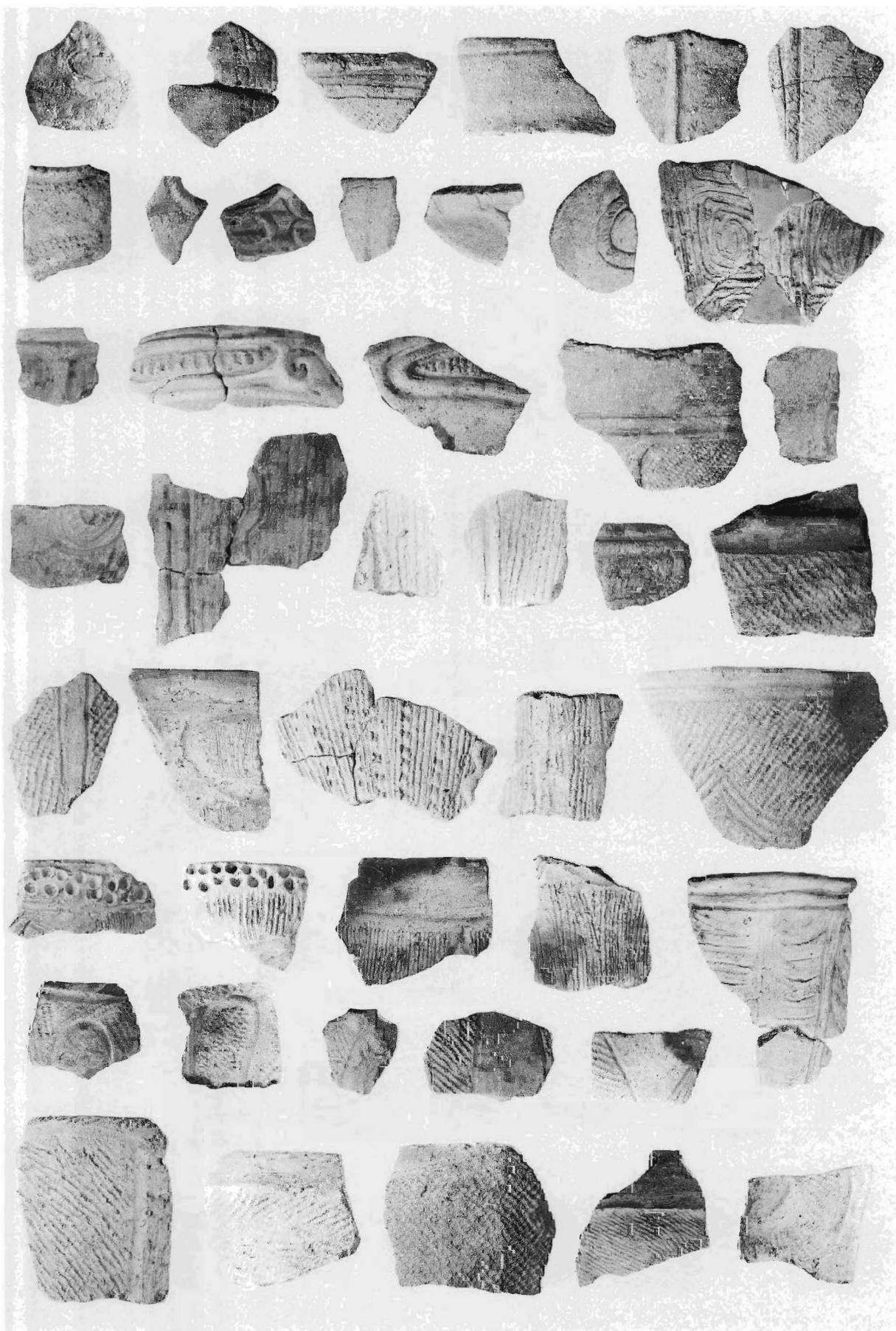
1. Ⅱ・Ⅲ区出土の古墳・平安時代の遺物



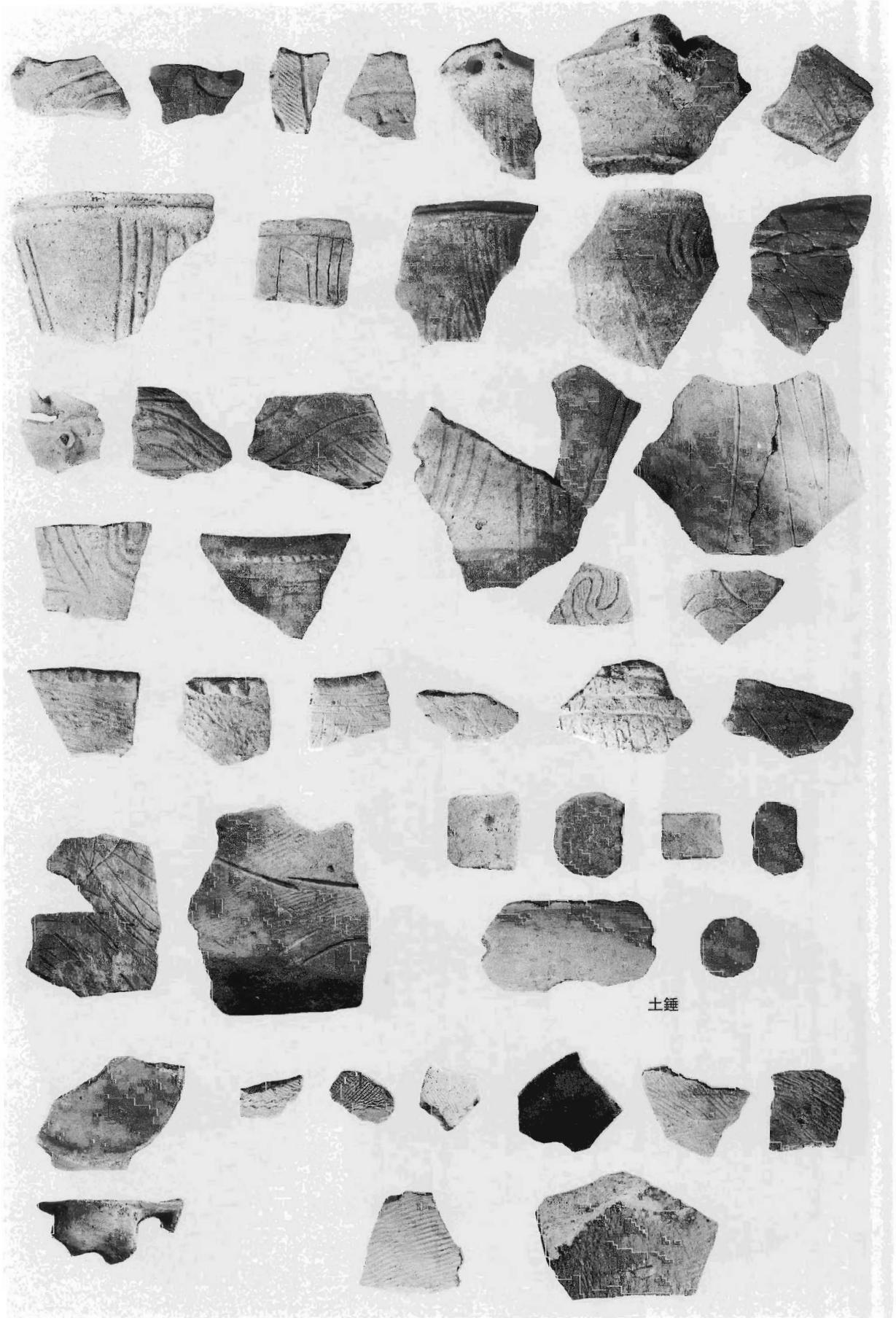
2. 包含層出土遺物



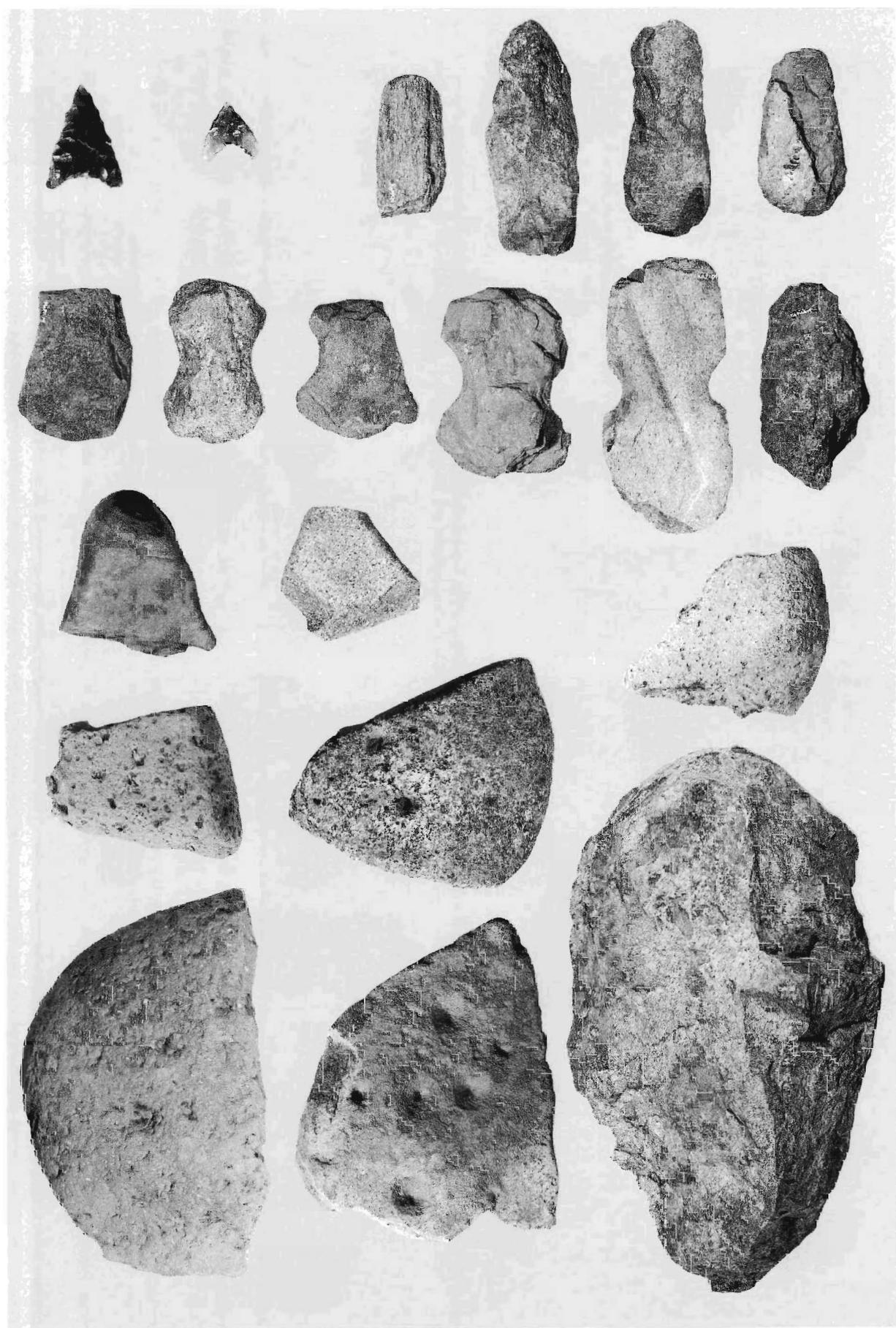
包含層出土遺物



包含層出土遺物



包含層出土遺物



包含層出土石器

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかぎいちょうさほうこくしょ 3							
書名	埋蔵文化財調査報告書 3							
副書名				巻次				
シリーズ名	志木市の文化財			巻次		第34集		
編著者	尾形 則敏 佐々木保俊 深井 恵子 佐々木 潤							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	平成14年(2002)年11月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しろやまいせき 城山遺跡 (第15地点)	しきしかしわちょう 志木市柏町 3丁目 2608	11228	003	35° 49' 45"	139° 34' 18"	19920721 ～ 19920826	560.00	道路工事
しろやまいせき 城山遺跡 (第16地点)	しきしかしわちょう 志木市柏町 3丁目 2599-7	11228	003	35° 49' 45"	139° 34' 18"	19921002 ～ 19921212	1,556.00	共同 住宅建設
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
しろやまいせき 城山遺跡 (第15地点)	集落	古墳時代後期 中・近世	住居跡 6軒 溝跡 2本	土師器 陶・磁器、かわ らけ		溝跡12Mは、柏城跡の本丸袖 曲輪を圍繞する大堀跡と考えら れる。		
しろやまいせき 城山遺跡 (第16地点)	集落	縄文時代 平安時代 中・近世	築石 1基 住居跡 1軒 溝跡 2本 井戸跡 2基	土師器 陶・磁器、かわ らけ、鉄製品 (火打金・釘) 板碑		特に、14Mについては、柏城 関連の堀跡の可能性はある。		

志木市の文化財 第34集

埋蔵文化財調査報告書 3

発 行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発 行 日 平成14(2002)年11月29日
印 刷 株式会社 白 峰 社